

平成26年度

第20回日教弘教育賞

教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える



第20 回日教弘教育賞教育研究集録 発行に当たって

公益財団法人 日本教育公務員弘済会
理事長 佐藤 一 俊

(公財)日教弘は、公益法人の使命である「民による公益の増進」を果たすべく、教育振興事業の更なる拡充を図り、広く教育界に寄与・貢献する活動を行っています。

教育振興事業における奨学金の貸与・給付、学校研修・研究への助成及び資質向上を目指す教職員への支援は、事業目的である「青少年の健全育成」に資することになります。このような観点に立ち、教育振興事業の評価基準は、「最終受益者は子どもたちである」ことを前提にしています。

(公財)日教弘は、教育振興事業を通して、「明日を担う子どもたちのための健全育成に資する」こと、事業の評価基準は「最終受益者は子どもたちである」ことを基軸にして、21世紀に生きる子どもたちの教育に寄与・貢献することを志してまいりました。

教育研究や実践活動を支援する教育研究助成事業は教育研究助成、教育実践研究論文募集、教育研修助成、教育出版の4部門に対して助成を行っています。

平成7年度に制定した日教弘教育賞は本年度で20回目を迎えました。日教弘教育賞は、教育関係者が使命感をもって日々行っている教育実践の優れた結果の報告の場として、日教弘教育賞実践論文の募集を行う事業です。

研究主題は、論文の主題である「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から応募者が具体的な研究主題を決めて論文をもとめることとしています。

本年度も都道府県支部へ全国から多数の論文を応募いただきました。その中から各支部推薦の教育論文(学校部門73編、個人部門59編の計132編)を審査、別掲の結果となりました。拡充を図るという点では、応募数は前年度比145%、優秀賞は4編から6編、優良賞は6編から8編、優秀賞、優良賞のそれぞれ学校部門の賞金額の増額を行いました。

審査にあられた皆様とそれまでお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、そのご協力に感謝申し上げます。

本研究集録は、学習指導要領のキーワード「生きる力を育むために、子どもの未来のために」に沿った教育実践や変化の激しいこれからの社会を子どもたちが生き抜いていくために地域、学校、家庭が連携・協力した教育実践となっています。

このたび発行する第20回日教弘教育賞教育研究集録が、各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の日本教育の着実な発展に寄与できれば幸甚であります。



たくましく未来に羽ばたく子供たちを育む

審査委員

文部科学省初等中等教育局主任視学官

清原 洋一

このたび、栄えある賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

今回応募された論文、特に受賞された皆様の論文におかれましては、いずれも現在の教育課題に即して、指導の改善や充実に参考となるものばかりでした。学習への興味・関心を高め、子供の主体的な学びを引き出している実践、自ら課題を見だし追究し、論理的に考え表現し、児童生徒が考えを練り上げ、思考力・判断力・表現力等の育成を図る実践、ICTを効果的に活用し確かな学力を育成する実践、グローバルな視点を明確にして学びを深める実践、自己肯定感や自尊感情の向上を目指し豊かな心や行動力を育成する実践、地域や外部と連携して学習意欲を高めるとともにキャリア教育を推進する実践、ふるさとへの想いを強くし防災意識を高める実践など、それぞれに子供の状況を的確に捉え、地域や学校の特色を活かしながら実践し研究を深めていました。

昨年11月には、中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問が出されました。今後の日本の社会の状況として、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、子供たちが就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになるだろうといった指摘もあります。そうした社会状況の中で、将来を担う子供たちには、こうした変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を身に付けることが求められています。そのためには、一人一人が互いの異なる背景を尊重し、それぞれが多様な経験を重ねながら、様々な得意分野の能力を伸ばしていくことが、これまで以上に強く求められます。特に、今回の諮問においては、これからの時代を生きていく子供たちに必要な力を育むため、「何を教えるか」という知識の質や量の改善のみならず、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが重要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習や、そのための指導の方法等を充実させていくための教育の在り方の方向性を問うており、現在の学習指導要領で重視している言語活動の充実等の趣旨をどのように発展させていくかということとも言えます。

今回最終審査に残った論文は、いずれも熱意が伝わるものであり、児童生徒の主体的で深い学びにすべく実践研究を積み重ねたものばかりでした。しかし、審査における評価については、現状分析や、これまでの実践の成果と課題を踏まえた明確な課題設定になっているか、先行研究を踏まえ工夫や改善点が明確になっているか、実践の成果が根拠となる資料に対応して分析・評価されているか、などが大きな分かれ道となったと感じています。また、学校部門の審査では、共通理解をどのように図り組織的な取組になっているかも議論になりました。よりよい実践研究とするためにも、是非、そのような視点を明確にしながら深めていただきたいと思います。そうした実践の積み重ねを通じて、子供たちはたくましく未来に羽ばたいていくことでしょう。

結びに、この日教弘教育賞がこれまで長きにわたり、学校教育の充実・発展に寄与してこられましたことに対し、主催者をはじめ関係の皆様へ深く敬意を表するとともに、本事業のますますの御発展を祈念いたします。



日教弘教育賞の審査を終えて

第一次審査委員長 佐賀支部 支部長
上 芝 正 子

第20回「日教弘教育賞」を受賞された皆様、おめでとうございます。

公益財団法人日本教育公務員弘済会の教育振興事業の一つである教育実践研究論文の募集につきましては、今回（第20回）から各支部からのご推薦が3編となりました。全支部からの応募総数は、132編（学校部門73編、個人部門59編）となりました。

平成26年12月19日に第1次審査委員会が開催され、慎重なる審査の結果、学校部門12編、個人部門10編を日教弘教育賞審査委員会に推薦しました。

引き続き平成27年1月21日に日教弘教育賞審査委員会が開催され、審査の観点に沿って丁寧に審査が進められ、各賞を決定しました。各審査委員は、今の教育現場が抱える多様な教育課題に、教職員の皆様が果敢に挑戦されている実態を肌で感じながら、心からのエールを送りました。

論文の内容としては、①ICT機器の利用を駆使したもの②児童生徒の興味関心を引き出すための授業内容に工夫をしたもの③学力の向上を目的とする児童生徒間の助け合いを中心としたもの④児童生徒の個性を発揮する特色ある学校作り⑤防災教育の実践⑥生徒会活動を通じた交流学習⑦学校の様々な課題を保護者や地域などと共有し、その解決に向けた取り組みなど今日的課題に視点を据えた意欲的な実践が目立ちました。その教育論文を通して見えてきたことは、若手教職員の頑張りです。教師としての基礎基本ともいえるべき学習ノートの指導などを通して、職員室でのやり取りが目に見えるようでした。また、論文の内容から感じられたことは、学校部門だけではなく、個人部門でも、学年間、教科間、または学校全体の強力な連携を感じられる論文がありました。いずれにしても現代は人間関係が希薄といわれる時代、教職員も例外ではありません。しかし、私たちは、児童生徒の教育に責任を持たなければなりません。そのためには、教職員同士がお互いに協力し、切磋琢磨する現場でなければならないと思います。ただ、限られた紙面で多くの実践内容をまとめることは容易ではありませんが、論文のまとめ方で「起承転結」がはっきりし、児童生徒の成長過程やその実態が分かれば他校での参考に資するのではないかと思います。

以上、経過と感想を述べ、審査委員の任を終えたいと思います。

最後になりましたが、本冊子が刊行されるにあたり、多くの関係者に敬意を表するとともに、この研究が今後の教育に生かされることを願ってやみません。

第 20 回日教弘教育賞 審査委員

(順不同－敬称略)

《審査委員》

文部科学省初等中等教育局主任視学官	清原 洋一
日本大学教授	佐藤 晴雄
元横浜市立市場小学校校長	早瀬 友子
日本教育新聞社 編集局長	矢吹 正徳
第一次審査委員会 委員長	上芝 正子
公益財団法人日本教育公務員弘済会常務理事	黒田 文男

《第一次審査委員》

委員長	九州ブロック	上芝 正子 (佐 賀)
委員	北海道・東北ブロック	北島 博 (宮 城)
委員	関東北ブロック	藤倉 新一 (群 馬)
委員	関東南ブロック	水口 正人 (静 岡)
委員	東海・北陸ブロック	小林 福治 (富 山)
委員	近畿ブロック	原田 久 (京 都)
委員	中国ブロック	小早川 健 (広 島)
委員	四国ブロック	松崎 洋 (徳 島)
委員	日教弘常務理事	黒田 文男 (本 部)

《目 次》

◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 理事長 佐藤 一俊 …………… 3

文部科学省初等中等教育局 主任視学官 清原 洋一 …………… 4

第一次審査委員長 佐賀支部 支部長 上芝 正子 …………… 5

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧…………… 8

●『最優秀賞』2編

《学校部門》 佐賀県唐津市立鏡山小学校 校長 青木 一記 …………… 18

《個人部門》 沖縄県国頭郡宜野座村立松田小学校 教諭 具志堅恵子 …………… 22

●『優秀賞』6編

《学校部門》 新潟県胎内市立中条小学校 校長 小野 真 …………… 26

滋賀県長浜市立虎姫小学校 校長 北辺 禎雄 …………… 30

《個人部門》 埼玉県立川越総合高等学校 教諭 松尾美奈子 …………… 34

大阪府守口市立梶中学校 教諭 金谷 大輔 …………… 38

岡山県岡山市立竜操中学校 教諭 矢吹 望 …………… 42

沖縄県立浦添工業高等学校 教諭 照屋 友理 …………… 46

●『優良賞』8編

《学校部門》 千葉県東金市立東小学校 校長 子安 昌人 …………… 50

静岡県立清水特別支援学校 校長 小岱 和代 …………… 54

富山県富山市立大沢野小学校 校長 久保 雅則 …………… 58

岡山県立岡山御津高等学校 校長 浅沼 淳 …………… 62

香川県三豊市立仁尾小学校 校長 山下 昌茂 …………… 66

熊本県阿蘇郡高森町立高森中学校 校長 古庄 泰則 …………… 70

《個人部門》 秋田県立秋田高等学校 教諭 伊藤 匡 …………… 74

兵庫県芦屋市立打出浜小学校 教諭 辻 晴美 …………… 78

平成26 年度・第20 回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

【佐賀県】

主体的に学び合い、いきいきと活動する児童の育成
～「学び合い」とICTの効果的な活用を通して～

佐賀県唐津市立鏡山小学校

校長 青木 一記

◆優秀賞

【新潟県】

ふるさとへの思いを高め、自ら課題を追求する子どもの育成

新潟県胎内市立中条小学校

校長 小野 真

【滋賀県】

筋道を立てて考え表現し、考えを深める算数科学習指導法の研究

～共働する組織体として児童を育て、学校力を向上させる～

滋賀県長浜市立虎姫小学校

校長 北辺 禎雄

◆優良賞

【千葉県】

算数科における思考力・表現力の育成を目指す授業づくり

～きめ細かなノート指導を通して～

千葉県東金市立東小学校

校長 子安 昌人

【静岡県】

地域を教室に一人一人のキャリア発達を促す教育の実践

～学齢期12年間のつながりを見据えて～

静岡県立清水特別支援学校

校長 小岱 和代

【富山県】

子供の自己肯定感や自尊感情の向上を目指した「子供と共に行う特別活動」の推進

富山県富山市立大沢野小学校

校長 久保 雅則

【岡山県】

自己効力を意図的に強化することによって学ぶ意欲を引き出す授業づくりの研究

岡山県立岡山御津高等学校

校長 浅沼 淳

【香川県】

「仁尾小防災リーダー」誕生までの4年間

～防災感覚と実践力は、小学校時代に育てる～

香川県三豊市立仁尾小学校

校長 山下 昌茂

【熊本県】

確かな学力を身につけた生徒の育成

～21世紀にふさわしいICT環境を活かした学び合う授業づくりをとおして～

熊本県阿蘇郡高森町立高森中学校

校長 古庄 泰則

◆奨励賞

【北海道】

「読みたい」「行きたい」「触れ合いたい」を叶える図書館を目指して

～児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動の充実を図って～

北海道松前郡松前町立松城小学校

校長 小寺 廣次

【秋田県】

学び合いの中から自力解決の力を育む指導

～「北陽スタイル」による問題解決的な学習の展開～

秋田県男鹿市立北陽小学校

校長 工藤 光男

【秋田県】

試行錯誤と自己（集団）決定のある学校をめざして

～強みを生かし弱さを克服する学校づくり～

秋田県八郎潟町立八郎潟小学校

校長 六郷 博志

【岩手県】

ふるさとの復興を担う「人づくり」の展開

～「自分から」かかわり、学びを深める児童の育成～

岩手県宮古市立宮古小学校

校長 笹川 正



- 【岩手県】 学校生活の満足度を高める
～体力づくり活動を通して～
岩手県盛岡市立玉山中学校 校長 根田 真江
- 【宮城県】 算数科における習熟度に応じた問題解決的な授業の充実を目指して
宮城県塩竈市立第一小学校 校長 星 篤
- 【山形県】 精いっぱい考え なかまと学びを深めていく子どもの育成
～複式算数科授業スタンダードの実践を通して～
山形県東置賜郡川西町立高山小学校 校長 小林 英喜
- 【山形県】 地域と連携し、農業意欲を育む農場学習の取り組み
～高校初JGAP（日本優良農業規範）認証への挑戦～
山形県立上山明新館高等学校 校長 寒河江 茂
- 【福島県】 ひとみ輝かせ学ぶ児童の育成
～よさを求めるすこやかな心を持ち、自分の思いや考えを伝え合い、学び合う学習集団づくり～
福島県福島市立平野小学校 校長 山内 雄和
- 【福島県】 自校における「放射線教育」はどのようにあればよいか
～平成25年度の実践から～ 福島県福島市立清水中学校 校長 雉子波敏司
- 【栃木県】 学校における発達障害児の早期アセスメントの効果について
～保護者の理解と治療・療育の実際～
栃木県河内郡上三川町立北小学校 校長 柳澤 邦夫
- 【群馬県】 自分の思いや考えをいきいきと表現できる児童の育成
～国語科「話すこと・聞くこと」の領域におけるグループ学習の工夫を通して～
群馬県前橋市立敷島小学校 校長 青木 博
- 【群馬県】 「2分間スピーチ」を聞き、聞く力、書く力、自分を深める力をつける指導
～聞き取り補助シートを活用した指導～
群馬県立聾学校 校長 宝田 経志
- 【埼玉県】 地域の中で児童を育み、地域とともに歩む学校づくりを目指して
～地域の「人」との関わりを重視した地域福祉の取り組み～
埼玉県鶴ヶ島市立鶴ヶ島第二小学校 校長 相澤 輝久
- 【新潟県】 『未来を切り拓く確かな力』を育む教育課程の編成
～ファシリテーションとU DL で学び続ける生徒を育成する～
新潟県新潟市立白新中学校 校長 川端 弘実
- 【長野県】 生徒が主体的に考え、協同的に取り組み、自己有用感を味わう「総合的な学習の時間」の在り方
～「地域に生きる生徒」の意識を教育活動に組み込む取り組み～
長野県下伊那郡天龍村立天龍中学校 校長 田本 忍
- 【長野県】 生徒とともに育つ地域ボランティアのありかた
～生徒の教育活動を支える地域のボランティア組織「三葉組」の発足とその取り組み～
長野県長野市立東北中学校 校長 湯田 博
- 【茨城県】 学び合いを大切にし、確かな学力を身に付ける教育の推進
～校内の組織を生かした取組の工夫を通して～
茨城県結城市立結城小学校 校長 永盛 信之
- 【茨城県】 知識・技能を確実に定着させ、思考力・判断力を育てる算数科学習指導の在り方
～算数的活動の充実を通して～
茨城県龍ヶ崎市立城内小学校 校長 杉田美代子



【東京都】	特色のある学校づくりの推進 ～パイオニア活動（ボランティア活動）の取り組みを通して～ 東京都江東区立深川第五中学校	校長 山本昭比古
【神奈川県】	地域と一体となって取り組む環境教育の推進 ～里地里山に親しみ、調べ、護る活動を通して～ 神奈川県秦野市立洪沢小学校	校長 熊澤 広明
【神奈川県】	組織的・計画的な学力向上の取り組み ～「授業アンケート」の活用と「取り出し」による学習支援～ 神奈川県小田原市立城南中学校	校長 佐藤 均
【山梨県】	国語科「読むこと」における言語活動の充実に関する実践 ～文学的な文章の指導を通して～ 山梨県甲府市立里垣小学校	校長 佐野寿満子
【静岡県】	わかる授業 ～学びの再構成を促す授業の工夫～ 静岡県焼津市立港中学校	校長 市川 克明
【富山県】	活力と魅力にあふれ、保護者・地域から信頼される学校を創る ～「今日が楽しく、明日が待たれる学校」創造プロジェクトの推進を通して～ 富山県富山市立奥田中学校	校長 石出 宗人
【石川県】	ふるさと宝立の豊かな自然と人に学び、国際社会をたくましく生きる児童・生徒の育成 ～「ふるさと珠洲科」の取組を通して～ 石川県珠洲市立宝立小中学校	校長 多田 進郎
【福井県】	「自ら考え、伝え合い、生き生きと学び続ける子の育成」 ～ユニバーサルデザインを活用した指導の工夫～ 福井県福井市安居小学校	校長 高嶋 和子
【岐阜県】	自主的に健康管理できる子を目指して ～自己管理スキルを育む歯科保健教育を通して～ 岐阜県山県市立桜尾小学校	校長 北洞 隆久
【岐阜県】	自ら考え、判断し、主体的に行動できる生徒の育成 ～「魅力ある学校づくり調査研究事業」の取り組みを起点として～ 岐阜県瑞穂市立穂積北中学校	校長 後藤 知利
【愛知県】	自らの思いや考えをもち、生き生きと活動する児童の育成 ～伝え合い、学び合える人間関係づくり～ 愛知県江南市立古知野南小学校	校長 村 良弘
【愛知県】	ともに学び合う児童の育成 ～「誦習の学び」と「松蔭の学び」を通して～ 愛知県豊橋市立花田小学校	校長 安藤 正紀
【三重県】	生きる力を育む「故郷で・に・を・と教育」 ～故郷に生きる極小規模校の学びざま～ 三重県南牟婁郡御浜町立神志山小学校	校長 生駒 亮哉
【三重県】	観光教育を意識した総合学科高校の魅力化・活性化の試み ～子どもたちが地域に学び「学力の樹」を育てる～ 三重県立鳥羽高等学校	校長 中川 弘文
【滋賀県】	「生徒」と「地域」を結び、生徒会活動を活性化させるための1つの戦略 ～地域を知り、地域に学び、地域にかえり、地域に貢献する生徒の育成を通して～ 滋賀県大津市立瀬田中学校	校長 山本 進



【京都府】	“東光っ子” 未来の科学者育成プログラム ～夢は東光小学校からノーベル賞科学者を～ 京都府相楽郡精華町立東光小学校	校長 山下 芳一
【京都府】	信頼を高める学校づくり ～「内からの改善」と「外からの改善」～ 京都府綾部市立綾部中学校	校長 森川 藏
【兵庫県】	若い力が学校を走らせる ～若手教師の育成を通じた「学校力」の向上～ 兵庫県神戸市立小東山小学校	校長 中村 登
【兵庫県】	真野発 新たな神戸の防災教育 ～つながろう 人・心・まち～ 兵庫県神戸市立真野小学校	校長 野路 保正
【大阪府】	学校改革・学校改善の取組み ～教職員すべての力による3年間の取組み～ 大阪府河内長野市立南花台中学校	校長 松本 裕史
【和歌山県】	コミュニティスクールへ ～みなが育ち合う地域社会を創り出す～ 和歌山県橋本市立紀見小学校	校長 森本 敏夫
【鳥取県】	思考力(深く)・判断力(正しく)・表現力(美しく)を高めていく生徒の育成 ～総合的な学習の時間の探究的な学習を通して～ 鳥取県鳥取市立福部中学校	校長 濱崎 裕生
【鳥取県】	志を持ち、豊かな学びを追究する生徒の育成 ～学びの楽しさ・奥深さを実感させる授業づくりを通して～ 鳥取県鳥取市立北中学校	校長 有本 健一
【島根県】	体験学習や日常学習の充実につながる奥出雲町のふるさと教育 ～たたら体験学習を通して、奥出雲の子どもの学びを育てる～ 島根県仁多郡小・中学校長会	会長 立石 典夫
【島根県】	健やかな荒木っ子の育成 ～からだ力とまなび力の向上を目指して～ 島根県出雲市立荒木小学校	校長 古川 信行
【広島県】	体験活動の感動を学ぶ意欲へ繋げる教育の実践 ～能楽の稽古や地域の生産活動の体験を通して～ 広島県東広島市立板城西小学校	校長 西谷恵美子
【山口県】	「教えて考えさせる授業」を基調とした授業改善 ～研修の日常化を図るための全教職員による取組～ 山口県美祢市立於福中学校	校長 徳野 秀敏
【山口県】	子どもたちの夢をはぐくみ、社会を生き抜いていく力の育成 ～へき地小規模校における高度な小・中連携を中心として～ 山口県萩市立相島小・中学校	校長 山縣 賢夫
【香川県】	社会参画により自己有用感を高める特別活動の展開 ～「わらべ地蔵」を震災地に送る児童会活動を通して～ 香川県三豊市立吉津小学校	校長 安藤 清和
【徳島県】	より豊かな人間関係を育てるために ～異学年集団：クローバー班活動を中心にした取組について～ 徳島県徳島市川内北小学校	校長 濱口恒一郎



- 【徳島県】 夢と志を持ったたくましい子どもの育成をめざす保・小・中一貫教育
～たくましく やさしく ねばりつよく そだて むぎっ子～
徳島県海部郡牟岐町立牟岐小学校 校長 中村 亨
- 【愛媛県】 人口減少地域における「郷土学習」の教育的意義と可能性
～新教育課程「郷土学」の創設と実践を通して～
愛媛県北宇和郡鬼北町立日吉中学校 校長 西村久仁夫
- 【愛媛県】 「ふるさとの海」との関わりを通して「生きる力」を育む学習活動の展開
～生活科・総合的な学習の時間の横断的な学習と異学年集団での協働学習の取組を通して～
愛媛県松山市立浅海小学校 校長 川崎 豊
- 【高知県】 すべての生徒が安心して学べる学校づくり
～普通高校における特別支援教育とキャリア教育の実践～
高知県立高岡高等学校 校長 佐藤 章
- 【高知県】 キャリア教育の視点に立った学校改革
～キーワードは「つなぐ」～
高知県長岡郡本山町立嶺北中学校 校長 大谷 俊彦
- 【大分県】 自らに問いかけ、考え、判断し行動する子どもの育成
～一人ひとりが考える「自問清掃（自問教育）」の取組を通して～
大分県中津市立三保小学校 校長 友松 康樹
- 【福岡県】 生徒の自助・共助・公助の意識の高まる防災教育の推進
～「地域と連携した避難訓練」や「防災の視点に立った授業づくり」を通して～
福岡県福津市立津屋崎中学校 校長 芳賀 求
- 【福岡県】 体力・学力向上の取り組み
～体力向上を中心に～
福岡県八女市立筑南小学校 校長 谷口千奈美
- 【宮崎県】 高大連携による実験実習の実践
～競技力強化に指定されたテニス競技をサポートするための加速度センサを用いたスポーツ運動動作解析～
宮崎県立佐土原高等学校 校長 中原 正樹
- 【熊本県】 生まれ育った玉名への愛着と日本人としての誇りをもち、国際社会を生き抜く子どもの育成
～玉名学の実践を通して～
熊本県玉名市立大野小学校 校長 西村 隆司
- 【鹿児島県】 桜島と共に生きる黒神の防災教育
～自分の命は自分で守るために必要な資質や能力の育成～
鹿児島県鹿児島市立黒神中学校 校長 下平 譲
- 【佐賀県】 望ましい生活習慣を身に付ける食育指導の工夫
～ICT等を利活用した「若木っ子食育タイム」「若木っ子食育ノート」の取組～
佐賀県武雄市立若木小学校 校長 山崎 健彦
- 【長崎県】 子どもの体力向上を目指して
～学校が中心となることができる体力向上へ向けての取組を通して～
長崎県長崎市立南陽小学校 校長 入江 正博
- 【長崎県】 「学びの空間」を工夫して取り組む授業改善
～生徒の思考力や判断力、表現力の向上を目指して～
長崎県佐世保市立大野中学校 校長 宮原 龍美
- 【沖縄県】 寄宿舎における余暇支援の取り組み
～クラブ活動を通して生きる力を育む～
沖縄県立名護特別支援学校 校長 仲尾 武

◎個人部門

◆最優秀賞

【沖縄県】 興味・関心を高め知的な気付きを育む生活科学学習の実践的研究
～身近な植物素材の教材開発を通して～
沖縄県国頭郡宜野座村立松田小学校 教諭 具志堅恵子

◆優秀賞

【埼玉県】 「やってみよう」を形にして、生徒の主体的な学びを引き出す指導
～教科指導の一環としての“ファッションショー”の取組～
埼玉県立川越総合高等学校 教諭 松尾美奈子

【大阪府】 英語ライティング力向上を目指す授業実践
～帯単元『英文物語』の実践を通して～
大阪府守口市立梶中学校 教諭 金谷 大輔

【岡山県】 学校行事に主体的に取り組む小集団づくり
～改善に取り組む小集団活動を中心に～
岡山県岡山市立竜操中学校 教諭 矢吹 望

【沖縄県】 工業高校の学科間及び企業とのコラボレーション
～制約をきっかけとしたコミュニケーション能力の育成～
沖縄県立浦添工業高等学校 教諭 照屋 友理

◆優良賞

【秋田県】 コンサマトリー性の動機づけに着目した授業の実践（高等学校物理）
～楽しさから物理を学び、それから本質的な物理の楽しさへ～
秋田県立秋田高等学校 教諭 伊藤 匡

【兵庫県】 料理に込められた想いに気づこう
～心をむすぶ「おむすび」作り～
兵庫県芦屋市立打出浜小学校 教諭 辻 晴美

◆奨励賞

【北海道】 「知的障害児と指導者が共に参加できる余暇活動の在り方」
～ヒップホップダンスの実践から見えてきた余暇活動の意義と課題を中心に～
北海道余市養護学校 寄宿舎指導員 及川 修司

【北海道】 東日本大震災を風化させないために
～いま私たちにできること ー環境教育から発展した復興への歩みー～
北海道札幌市立白石中学校 教諭 森山 正樹

【青森県】 国民投票の授業を通しての有権者教育
～立憲主義を理解し、国民主権を実感する授業を目指して～
青森県八戸市立大館中学校 教諭 大下 洋一

【岩手県】 地域と共に歩む学校づくり
～子どもが輝き地域が輝く～
岩手県奥州市立木細工小学校 教諭 及川 公子

【宮城県】 「自ら課題を見つける力」の育成
～習得・活用・探究を位置づけた学習指導を通して～
宮城県塩竈市立第一中学校 教諭 青嶋 永

【宮城県】 「地域に根ざし、震災からの復興の未来を目指す子どもの育成」
～地域学習と被災地への社会見学等で体験したことの劇化などを通して～
宮城県刈田郡蔵王町立円田小学校 教諭 鈴木 正



【山形県】	感じたことを伝えよう 広げよう ～みんなの思いを「一枚の絵」にたくして～ 山形県鶴岡市立鼠ヶ関小学校	教諭 西間木美香
【福島県】	学び合う授業の創造 ～発問・板書・指名を生かした物語教材の授業づくり～ 福島県福島市立平野小学校	教諭 花輪 忠康
【栃木県】	コミュニケーション能力を高める「話し方・聞き方」の指導法 ～小集団による協同作業を円滑に進めるために～ 栃木県宇都宮市立泉が丘中学校	教諭 菊池 洋二
【栃木県】	生徒の学習意欲のタイプに応じた学習指導に関する研究 ～効果的な学習習慣の定着への取り組みを中心に～ 栃木県立小山市城南高等学校	教諭 鈴木 啓介
【埼玉県】	「音符が読める」から「演奏できる」へ ～読譜の研究～ 埼玉県吉川市立中曾根小学校	教諭 伊古田佐枝子
【新潟県】	総合的な学習の時間で「愛校心」を考える ～町校魂って何だろう？「栄光への讃歌を私たちの手で」の実践を通して～ 新潟県長岡市立表町小学校	教諭 笠原 道宏
【長野県】	東日本大震災から、自分たちの「ふるさと」常盤について生き方を学ぶ ～常盤地区「昭和58年洪水被害」の学習・調査活動を通して～ 長野県飯山市立常盤小学校	教諭 藤田 茂樹
【茨城県】	身体性・協働性を重視する「スローイラスト」 ～美術科における人物表現プログラム開発～ 茨城大学教育学部附属中学校	教諭 高橋 文子
【東京都】	不登校の背景にある学校不適応の解消に向けた組織的対応 ～校内委員会を活用して50人を超す不登校に向き合う～ 東京都足立区立立六月中学校	主任養護教諭 山田美智子
【東京都】	情緒通級等指導学級利用児童へのLCSA活用の実践 ～言語力・コミュニケーションスキルのアセスメント結果を踏まえた効果的な学習・SST指導方法について～ 東京都武蔵村山市立第八小学校	教諭 川上 尚司
【神奈川県】	本がある 人がいる 行ってみたくなる 学校図書館づくり 神奈川県藤沢市立善行小学校	教頭 岩成 真澄
【千葉県】	主体的に社会参画することで、防災意識を高める社会科学習のあり方 ～コンセンサス会議を取り入れた、5年「私たちのくらしと防災」の一実践を通して～ 千葉県鴨川市立鴨川小学校	教諭 粕谷 昌良
【山梨県】	プレゼンテーションから養う真正のコミュニケーション能力 ～パフォーマンス評価による自発的な学びを促す活動～ 山梨県南アルプス市立八田中学校	教諭 高畑 伸子
【静岡県】	農業高校における魅力ある学科づくりを目指して ～商品開発と被災地支援から学ぶ“生きる力”～ 静岡県立磐田農業高等学校	教諭 桂 武彦
【富山県】	校内研修の活性化と同僚性の構築を図るOJTの推進 富山県富山市立堀川小学校	教頭 石田 和義
【石川県】	側鸾の強い子どもに学校で行える身体へのアプローチと変化 ～他動的な体幹部へのアプローチが呼吸機能改善に繋がった事例 石川県立いしかわ特別支援学校	Kさんの発信から学ぶこと～ 自立活動部主任 太田 博巳



【石川県】	地域に根ざした工業人育成システムの開発 ～工業高校生と地元企業技術者の絆について～ 石川県立小松工業高等学校	教諭	吉岡	学
【福井県】	「つなげる」中国語教育 福井県立足羽高等学校	教諭	青山	恭子
【福井県】	聴覚を介した音源定位と気付き ～T君との係わりを通して～ 福井県立嶺北特別支援学校	教諭	瓜生	幸弘
【三重県】	子どもが「国語が好き」と思える授業を目指して ～単元を貫く言語活動を通して～ 三重県鈴鹿市立若松小学校	教諭	横矢	規
【滋賀県】	子どもの体力向上に向けた取り組み ～運動文化の創造・体育授業の改善・家庭との連携～ 滋賀県大津市立瀬田東小学校 健康体力向上部会	教諭	宮塚	江理
【京都府】	子どもたちが「地域のすばらしさ」を学び「伝える」ことなかかわりが深まる活動 ～世界文化遺産・醍醐寺と京都伏見・恵福寺との地域連携～ 京都府京都市立大塚小学校	教諭	大松	有香
【大阪府】	外部機関と連携したE S Dの推進 ～大阪府教育センター附属高校における『探究ナビ』及び『家庭基礎』の実践～ 大阪府教育センター附属高等学校	教諭	宮田	早永子
【奈良県】	やる気を引き出す体づくり ～「GnR(ぐんぐん のびろ プロジェクト)」に取り組んで～ 奈良県生駒市立生駒南小学校	養護教諭	徳永	詳子
【和歌山県】	重症心身障害児の発達評価についての研究 ～重症児の発達指標案の作成～ 和歌山県重症児教育研究会	代表世話人	南	有紀
【和歌山県】	45分の授業を安定して行える授業の工夫 ～特別支援学級で行った算数科の授業を通して～ 和歌山県新宮市立神倉小学校	教諭	打越	丈容
【鳥取県】	書くことのよさを感じ、書くことを楽しむ心を育てるために ～一枚文集2000枚の実践から見えてきたもの～ 鳥取県米子市立福米東小学校	教諭	波多野	健司
【岡山県】	“こちら高校市民課防災係”の取り組み ～地域防災を起点とした教育実践を通して～ 岡山県立真庭高等学校	教諭	佐々木	正剛
【島根県】	プレインターンシップをとおして自己理解を進める取組 ～校内作業体験の実施～ 島根県立宍道高等学校	教諭	佐々木	喜美子
【広島県】	持続可能な社会の形成者としてふさわしい能力や態度の育成 ～持続可能な開発のための教育(E S D)の視点に立った総合的な学習の時間の学習活動を通して～ 広島県立御調高等学校	教諭	豊田	昇
【広島県】	高等学校理科における言語活動の充実に関する研究 ～論証の枠組みを取り入れた授業実践を通して～ 広島県立黒瀬高等学校	教諭	山中	真悟



【山口県】	へき地校における学校経営とコミュニティ・スクールのあり方 ～従来の教育活動を生かした取組について～ 山口県岩国市立宇佐川小学校	校長	秋田 和美
【香川県】	個別の支援を大切に、集団支援の視点に立った学級経営 ～「ユニバーサルデザイン」理論からの実践～ 香川県高松市立香南小学校	教諭	北角 理恵
【徳島県】	自尊感情を高める学級経営の展開について ～生徒指導の機能的特性を生かして～ 徳島県徳島市千松小学校	教諭	黒田 博章
【愛媛県】	問題行動の集積結果の傾向分析と対応の標準化について ～学校の荒れの発生状況と沈静化の方策～ 愛媛県松山市立城西中学校	教諭	大田 雅哉
【高知県】	生徒が主体的に取り組む、楽しい体育授業の創造 ～生徒がかかわり合い、学び合う活動を通して～ 高知大学教育学部附属中学校	教諭	東 龍之介
【大分県】	「知る」「作る」「待つ」で育てる 言葉で伝え合う小学1年生のクラスづくり ～幼児教育の視点から、外国籍児童と学級への支援のあり方を探る～ 大分県別府市立南立石小学校	臨時講師	伊藤 芳恵
【大分県】	食の自立を目指した自分で作る「お弁当の日」の取り組みを中核にした食育指導 大分県津久見市立第一中学校	栄養教諭	甲斐さや香
【福岡県】	離島における地域の素材を生かした教材開発と児童生徒とともに理科研究 ～小呂島での4年間の実践とその成果～ 福岡県福岡市立早良中学校	教諭	山口 哲也
【宮崎県】	新生「北方学園」の創造 ～新設小中一貫校開校への教頭のかかわり～ 宮崎県延岡市立北方学園	教頭	末廣 恭雄
【宮崎県】	地域と向き合い、自分の夢にむかって努力できる児童の育成 ～課題対応能力の向上を図る教育活動の工夫を通して～ 宮崎県西臼杵郡高千穂町立高千穂小学校	指導教諭	橋本 香織
【熊本県】	生き生きと笑顔あふれる職員室経営 ～教員の多忙感を軽減し、充実感を味わわせる取組を通して～ 熊本県熊本市立大江小学校	教頭	平野 修
【鹿児島県】	思考力・判断力・表現力を育成し、言語活動を支えるNIEの取組 ～NIEの環境整備と授業実践～ 鹿児島県鹿児島市立宇宿小学校	教諭	宮園 聖
【鹿児島県】	「思いやり」の心をもつ子どもの育成を目指して ～子どもの心と体の健康を増進する取組から～ 鹿児島県始良市立始良小学校	養護教諭	川原由理子
【佐賀県】	Q-Uテストを活用した学級づくり ～2年間の取り組みを通して～ 佐賀県東松浦郡玄海町立有浦中学校	教諭	副島 依子
【長崎県】	児童の変容を実感できる食育の在り方 ～目標を明確にした給食指導と調理や栽培の実践を通して～ 長崎県島原市立第一小学校	教諭	林田 一成

日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

主体的に学び合い、いきいきと活動する児童の育成

～『学び合い』とICTの効果的な利活用を通して～

佐賀県唐津市立鏡山小学校

校長 青木 一記

1 主題設定の理由

(1) 今日における教育的課題

今世紀の先進国は、「知識的基盤社会」「高度知識社会」と言われる。それは、モノの大量生産・大量交換が主流の産業社会から、知識・情報・サービスが中心のポスト産業主義への移行を遂げた社会である。このような社会において、知識だけを溜め込むのではなく、自らが考えて活動する力や社会の変化に柔軟に対応できる力が必要となる。また情報化社会と言われるようになって久しいが、我が国でも情報機器の整備・普及が急速に進んでおり、教育の情報化も必然である。平成23年度より本格実施となった学習指導要領のもと、各教科用図書においてもデジタル化が進み、その活用が問われている。学習状況調査等による学力向上という従来の課題ももちろん残されている。そこで、いかに効率的に学習を進め、学力を身に付けさせるのか、どのような児童に育てたいのかという目的を明確にし、実践を積み重ねていくことが、今日の大きな課題である。

(2) 本校における研究経過と児童の実態

本校のめざす児童像は「かんがえる」「がんばる」「みがき合う」児童の育成である。この目標に向かい指導することで、今日における社会の中でたくましく生き抜こうとする児童へと導いていく。特に「みがき合う」ことを大切に、児童同士が互いに教え合い、支え合い、認め合いながら主体的に学習に取り組む姿勢を身に付けさせたい。そこで西川純氏(上越教育大学教授)の『学び合い』の考え方を土台とし、児童同士が相互に関り合う学習活動を仕組み、思考力・判断力・表現力を高めていきたい。また、ICT機器を単なる教材提示にとどまらせることなく、学習ツールの一つとして、児童がICT機器を活用することで、学習の幅を広げ、自ら思考し、判断する力を養っていきたく考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

児童同士が主体的に学習課題に取り組むための学習過程や授業形態を探る。また、学習に対する児童の興

味・関心を高め、思考力・判断力・表現力を培うICT機器の効果的な活用法を探る。

3 研究の仮説

- (1) 児童が互いを大切にしながら、主体的に学習を進めれば、場や相手を考えた思考力・判断力・表現力が育つであろう。
- (2) 授業の様々な場面でICT機器を効果的に活用すれば、児童の学習活動が広がり、主体的な学習が展開できるであろう。

4 研究の内容

- (1) 【授業研究部】『学び合い』の視点を取り入れた授業の工夫及び提案
- (2) 【環境開発部】ICT機器の効果的な活用方法の検討・提案
- (3) 【調査活用部】児童の変容を探る。

5 研究の実際

- (1) 『学び合い』の視点を取り入れた授業の工夫及び提案

①「みんなが分かる、みんなで分かる、みんなと分かる」授業への誘い

・これまでの授業は、教師主導による一斉指導を中心に行われてきた。個人学習やグループ学習という形態はとっていてもやはり授業の中心は教師であり、一斉に指導するか個別に指導するかのどちらかである。それに対して、児童同士の教え合いを授業の中核にすえ、教師は児童に課題を与え、活動の場と時間を保障する。これが今回の授業で最も大切にしたいところである。資料①は、6年社会科における授業である。まず、教師が授業の課題を示す。児童は課題解決に向けた方向性を自分なりに見つける。そして児童同士の話し合い、



〈資料①〉

教え合いへとつないでいく。資料①の写真は、児童が電子黒板やタブレットを使って教え合っている姿である。教師の課題に対して、自分なりの答え又は考える方向性を見つけた児童は、交流を求めて席を離れる。電子黒板を使い自分の考えを確かめる児童もいれば、他の児童の考えを聞くために移動する児童もいる。また自分の席に着き、考えたり悩んだりしている児童に対して、自分の考えを伝えたり、ヒントを与えたりする児童もいる。その際に利用するのが資料②のネームプレートである。

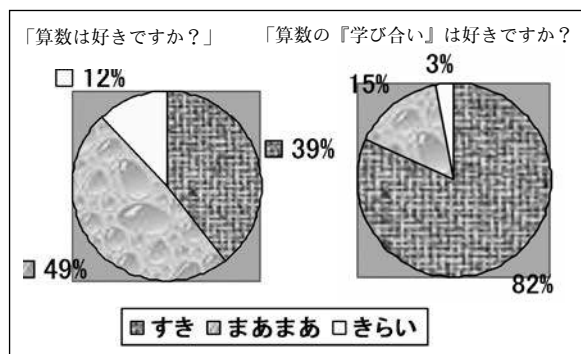


〈資料②〉

そこに教え合いが生まれる。児童は、全員のネームプレートの色が変わること(みんなが分かる)を目標にその児童に合わせた言葉や内容で教えていく。また学習課題を「○○○について説明することができる」とすれば、ネームプレートを裏返しにするレベルが上がる。このように教師が出す学習課題のレベルを上げることによって、ネームプレートの使い方も変わってくる。つまり「みんなが分かる授業」から「みんなで分かる授業」そして「みんなと分かる授業」とレベルアップが図れるのである。

資料③は、昨年度2月にとった3年生のアンケート結果である。「算数は好きですか?」という質問は、算数の教師主導の一斉指導に当たり、「算数の『学び合い』は好きですか?」という質問は、児童主体の授業に当たる。

この2つを比べてみる児童は児童主体の授業が好きであることがわかる。他の学年・学級でも同様の結果



〈資料③〉

であった。その理由には、「自分のペースで勉強できるから」「自分に合う方法で勉強できるから」「友達に教えてもらってうれしかった」「先生より友達の方がわかりやすい時がある」などであった。つまり、教師主導の授業と児童主体の授業を比べると、教え合いを中心とした授業は、児童の理解力を高めると同時に、児童の関心・意欲を育てることに繋がってくるものが伺える。この児童の意思は、次の課題解決へ向けての原動力となる。このような活動を教師が意図的に仕組みれば、研究の目標である児童の思考力・判断力・表現力向上への一歩となる。また、一人一人違う児童と関わりを持ちながら進めるのであるから、相手によって説明が変わったり、付け加えをしたりしながら進めることもできるようになる。

②主体的な学習への誘い

「みんなと分かる授業」は児童の主体性の向上を支える。分かってもらう児童、教えようとみんなのために動いている児童がそれぞれに関わり合いながら授業を進めていく。教師は一人一人に目を向け、誰が何をしているのか知らせる、つまり情報の共有化を図る。その言葉を手がかりに更に児童の活動が進む。友達の学習の進み方を見ながら、今自分がすべきことを見つけ、行動するのである。それが児童の主体的な学習となる。学習内容を教師が教えるのではなく、児童自身が学び合えるように仕組む。それが児童の主体的な学習を支える教師の役割になる。

③自尊感情の高まり

児童同士の教え合いが成り立つようになれば児童の自己肯定感が育ってくる。前述したネームプレート、教師の発言等により、進んで関わりを作ろうとする児童が増えていくからだ。関わりを持つことによって、お互いに認め合うことができるようになる。またそのようなつながりを持った児童を教師が褒める。それによって児童の自尊感情は高まっていく。授業はもちろん、生活場面に生きてくる。

(2) ICT機器の効果的な活用方法の検討及び提案

ICT機器の活用については、教師の教材提示だけでなく、児童の学習ツールとして位置付けをした。その他に教師がこれまで積み上げてきた教材研究という視点から、様々な教材を収集し、デジタル教材を作成する。それを児童が使い、課題解決に向かう。教師が事前にどれだけの資料を整理し、児童が使用できるようにすることが大切である。昨年度通常学級のみならず、特別支援学級でも授業実践を行った。これまで特別支援学級では、個別指導にとどまっていたが、IC



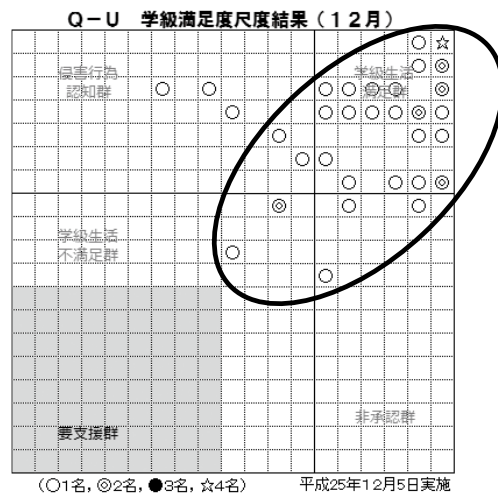
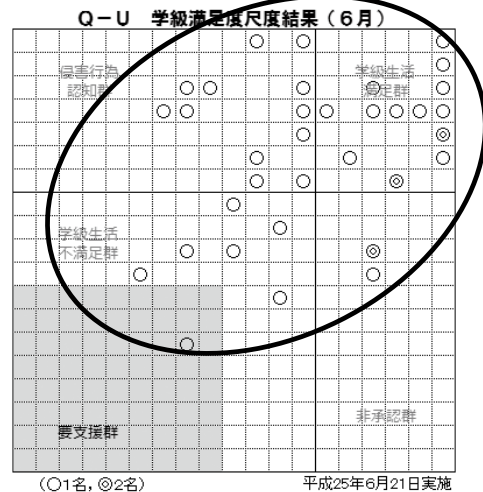
〈資料④〉

T機器を活用することにより、集団での学習が実践できるようになった。学習課題「カレンダーを作ろう」では、市販のシンボルの絵を使って、単語や助詞を入れる教材をパワーポイントで作成した。教師が傍らにいて、一つ一つ声を掛けなくても絵を見て、単語や助詞の学習を楽しんで

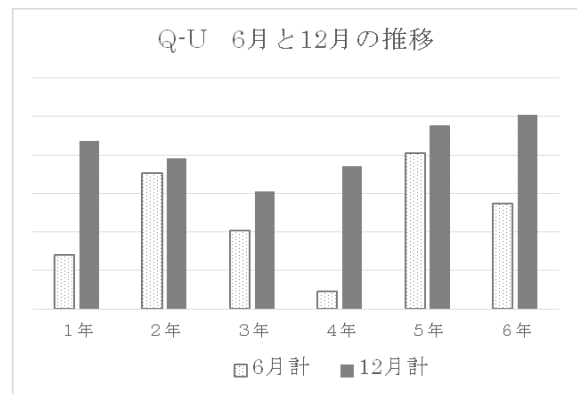
ほしいと願ったからである。児童はパソコンを囲み、キーを押しながら単語や言葉を言い合って、楽しく活動していた。また、調理单元やスライム、ティッシュケースなどの制作に入る前に、インターネットで材料や作り方のレシピ、完成までの動画や画像、使えるようなイラストなどを探したり見たりして、見通しを持った主体的な活動となった。画像や動画といった視覚的にとらえることができる教材を生かすことで、児童がいきいきと活動することに繋がった。

(3) Q-Uでみた児童の変容

児童の変容に関して、先に学習意欲に関する資料を提示した。ここでは学級集団の状態や個人の状態を把握し、更に指導に生かすためにQ-Uを行った。資料⑤は、昨年度の4年生のあるクラスのQ-Uの6月と12月の推移である。これを見ると侵害行為認知群、非承認群、学級生活不満足群が減り、学級生活満足群が増えたのが明らかである。資料⑥のグラフは、Q-Uの座標（縦軸は承認度）、（横軸は被侵害度）を数値化し、クラスの合計点で6月と12月を表し、それを比べたものである。これによると全学年とも満足群の方に推移している。『学び合い』をすることで、お互いを理解し、お互いを認め合えるようになったことも要因の一つである。



〈資料⑤〉



〈資料⑥〉

6 年度途中に追加した取り組み

(1) 学習過程の見直し

さらに、系統的に指導していくために、学習過程の見直しを考えた。教室の前面に掲示し、児童が見通しを持って取り組めるように考えたものが資料⑦である。教師一人一人が積極的に授業実践を積み重ねても、単年では成果が低い。また児童も学習の進め方に迷い

めあて	<ul style="list-style-type: none"> ○めあてを知る。 ・()をみんなができるようになる。 ○今日の学習のポイントを考える。 ・どんな方法で考えたらいいのかな？
学び合い	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで学び合う。 ・わからないことは聞こう。 ・みんなで作ってみよう。 ・自分の考えを話そう。 ・友だちの考えを聞こう。 ・困っている友だちを見つけよう。 ・納得いくまで学び合おう。
ふり返り	<ul style="list-style-type: none"> ○めあての達成を確認する。 ・()ができるようになったかな。 ・今日の学び合いはどうだったかな。

〈資料⑦〉

が出てくる。そこで全校統一した基本的な学習過程が必要であると考えた。また児童が授業を進める上で、これまでフラッシュカードで時間を提示し、児童の活動時間の目安を示してきたが、事前に学習の進め方を児童にうつしておけば児童が見通しを持ち、より計画的に活動できると考える。

(2) 『学び合い』で使いたい言葉

<p>【友達に声をかけるときの言葉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いっしょにしよう ・だいじょうぶ？ ・どこまでできた？ ・今のところまでやってみせて <p>【友達にお願いするときの言葉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いっしょにしよう ・ここから先が分からない ・なぜそうなるの？ ・あなたはどのようにやったの？ <p>【お互いに認め合う言葉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ありがとう ・とけるようになったね ・やったね <p>【分かるように説明するときの言葉】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここを見て ・もう1回読んでみようか ・絵(図)にかいて考えようか ・1回やってみて ・このやり方といっしょだよ ・ここまであってるよ

〈資料⑧〉

言葉遣いは心遣いと言われるが、授業においても児童が認め合えるように、言葉の整理(資料⑧)をして提示した。特に低学年の児童は何をどう伝えればいいのか分からないために、視覚的にとらえられるようにすることによって、活動の手がかりとなる。活動が活発に進むようになれば、更に新たに言葉を加え、認め合う言葉を増やしていける。

7 研究の成果と発展的な課題

(1)各調査資料より

『学び合い』とICTの利活用を始めて、市販テストの平均点がほとんどの学年で伸びた。テストの思考・表現の範囲においても得点の伸びが見られた。『学び合い』とICTの利活用による主体的な学習が、場や相手を考えた思考力・判断力・表現力を育てたことが分かる。CRTは3学期に行っているため今年度の結果はまだだが、過去2年間においては、ほとんどの学年で伸びが見られた。また、Q-Uにおいては、ほとんどのクラスで良い方向への移行が見られた。『学び合い』によって、児童の学力の土台となる潜在的学力である自己肯定感の高まりや学級での良好な友達関係づくりにつながったことが伺える。これは、思考力・判断力・表現力の向上を目指して行った『学び合い』の副産物ともいえる。これらのことから、自信を持っていきいきと活動する児童が育っていると言える。

(2) 授業の変容について

『学び合い』の考え方を土台にし、児童同士が互いに関わり合う学習活動を実践した結果、児童は分かるおもしろさ、教えるおもしろさ、分かってもらえるおもしろさを実感した。その思いが、次の活動へと結び付き、児童の主体的な学習に繋がることが分かった。また、児童の中に「分かりたい」「分かしてほしい」「伝えたい」という思いが生まれ、相手や場に応じた、思考力・判断力・表現力の向上へと結びつくことも見えてきた。そして、「明日の授業で友だちに教えたいから予習してきた。」と自主学習をしてくる児童も出てきた。ICT機器についても、児童が使う中で、学習ツールとしての有効性を確認できた。さらに児童同士の関わりが深まるように、タブレット端末等を児童が自由に操作できる環境を整えたり、異学年との交流学习を増やしたりすることによって、学ぶ楽しさの広がり誘えるよう研修を重ねていきたい。

興味・関心を高め知的な気づきを育む生活科学習の実践的研究

～身近な植物素材の教材開発を通して～

沖縄県国頭郡宜野座村立松田小学校

教諭 具志堅恵子

I はじめに

活動あって学習なし。具体的な活動や体験を学習の柱にする生活科で折に触れ指摘されてきた言葉である。生活科の目指す「自立への基礎を養う」という目標達成のためには、それぞれの単元において、児童が対象へ主体的にかかわり、その中から生まれる驚きや感動、疑問など実感を伴って得た知的な気づきが最も重要であり、その鍵を握るのは教材である。そのため、本稿では児童の身近な素材から手探りで開発した教材から主題へと迫った。

II 主題設定の理由

本校区は緑豊かな自然環境に恵まれ、校庭も様々な樹木や草花が囲っている。しかし、低学年児童を対象に、「帰宅後どんな遊びをしていますか。」の質問をしたところ、友達や兄弟と公園や戸外で鬼ごっこなど体を動かして遊ぶ児童が48%、テレビ視聴やゲームをして過ごす児童が46%という結果であった。身近な自然と直接かかわって遊んだり、自然物を活用して物を作って遊んだりする経験はほとんどないことが分かった。従って、生活科の学習を進めるにあたっては、身近な自然に親しませ、自然の楽しさを味わわせることが極めて大切なことであることを痛感した。

そこで、校庭や学校周辺にある繰り返しかかわり五感を使った活動ができる植物素材を教材開発し、衣装作りや草笛遊び、はっぱ入りホットケーキ作りなどを取り入れた単元構成を考えた。そうすれば、身近な自然にかかわる活動や体験を通して、児童が植物に興味関心を持ち、思考し、気付くことができると考え本テーマを設定し、実証的な研究を行った。

III 研究仮説

校庭や学校周辺にある植物素材を活かした学習展開を工夫することにより、児童は身近な植物に対し興味関心を持ち、実感を伴って得られた知的な気づきを培うことができるであろう。

IV 研究経過

2年間かけて校内外の植物確認調査を実施するとともに、23種類の植物の葉でできる草笛の音声を録音したデジタル教材等を作成した(表1)。そして、開発した教材を活用

表1 草笛のデジタル教材の一部



した学習を工夫して実践した。

V 研究内容

1 素材研究

(1) 素材を教材化する視点

児童が自分とのかかわりで主体的に活動ができるようにするためには、素材を児童の身近な環境から見だし、教材化する視点が重要である。本稿では、以下の視点を押さえて教材化すれば効果的な学習ができると考えた。

- ① 児童の身近な自然を活かしたもの。
- ② 自分とのかかわりが具体的に把握できるもの。
- ③ 児童の興味関心をひくことができるもの。
- ④ 児童の活動を継続的、発展的に展開させることができるもの。
- ⑤ 児童がやり遂げることが可能で、成就感を味わえることができるもの。

(2) 校庭及び学校周辺の植物確認調査

- ① 校庭の植物として142種類確認した。
- ② 校庭で5種類の毒性をもつ植物を確認した。(ルリハコベ、アカバナルリハコベ、シマキツネノボタン、クワズイモ)
- ③ 学校周辺で9種類の毒性をもつ植物を確認した。(トウワタ、ハゼノキ、ハマオモト、キバナキョウチクトウ、トウゴマ、ダンドク、ルコウソウ、チョウセンアサガオ、ニチニチソウ)

- ④ 毒性をもつ植物に関しては、児童と一緒に生育場所で確認するとともに、家庭用に画像資料を配布し注意を呼びかけ安全指導に努めた。

(3) 植物遊びに関する教材開発

校庭や学校周辺にある植物を素材にして、以下のよう
に五感を使っての体験活動を取り入れた植物遊びの
教材開発を行った(表2)。

表2 植物遊びに関する教材開発

教具名	教具	教具の説明及び活用の仕方	活用した植物
シルエット カード		白黒コピーしたはっぱのカードを見せ、形をヒントに何の植物か予想を立てて答える。	リュウキュウマツ、ギンネム、セイヨウタンポポ、オオハマボウ
においボトル		においの強い4種類のはっぱをちぎって、中が見えないペットボトルに別々に入れ、標示した1本のはなボトルに入っている植物と同じにおいを当てる。	ゲットウ、ヒラミレモン、ツワブキ、ペパーミント
グリーン ボックス		緑色の箱の中に入っている植物を手で触って、植物の茎やはっぱの特徴をとらえ何種類の植物が入っているかを当てる。	(四角の葉) シロノセンダングサ (丸の葉) ヤマダマ (つるつるした葉) デイゴ (ざらざらした葉) オオハマボウ
聞いてみよう 草笛の音		草笛に適した植物画像をクリックするとその草笛の音が聞こえるデジタル教材で、児童の草笛作りの動機付けにした。	ガジュマル、ゲットウ、ハマイヌビワ、アカギ、クスノキ、セイロンマンリョウ
草笛(葉巻き 笛)の作り方 カード		草笛の材料と作り方の手順を画像で解説した提示用資料。	ガジュマル、ゲットウ、ハマイヌビワ、アカギ、クスノキ、セイロンマンリョウ
ペットボトル ラッパ		ペットボトルを加工して作ったラッパで、音の出しにくい場合や大きな音を出したい時に活用する。	ガジュマル、ゲットウ、ハマイヌビワ、アカギ、クスノキ、セイロンマンリョウ

VI 研究の実際

1 単元名 「はっぱとなかよし」(全10 時間)

2 単元目標

- (1) 身近な自然に親しみ、自分から材料を集めたり遊ぶものを作ったりして楽しく遊ぼうとする。

【関心・意欲・態度】

- (2) 身近にある植物を使って遊ぶものを工夫しながら作って遊び、それらのことを絵や文などで表現することができる。

【思考・表現】

- (3) 身近にある植物で多様な楽しい遊びができることに気付く。

【気付き】

3 草笛素材の研究

本単元では草笛づくりに挑戦するため、事前に草笛に適する植物を確認したり、草笛の上手な地域の方々に指導を仰いだりして準備を整えた。

(1) 草笛に適する植物

草笛は草花や木の葉、茎、花などを口に当て吹いて音を出すもので、児童が五感をはたらかせて活動しながら様々な気付きを培うことのできる素材であり、表3のような植物が教材として適切である。

表3 草笛に活用できる植物素材

植物名	はっぱや草笛の特徴
ガジュマル、ヒラミレモン、ヤブツバキ、シダレガジュマル、イスノキ、セイロンマンリョウ、ホルトノキ、クスノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、タイワンレンギョ、タブノキ、ハマイヌビワ、クチナシ、ヒサカキ、シマヤマヒハツ、ホルトノキ、マサキ、アカギ、アコウ	はっぱが児童の掌やそれより少し大きめであり扱いやすい。また、はっぱの表面がなめらかで、弾力があり音が出しやすい。比較的小さな草笛が作れ、くわえる位置で音程が変化する。
ゲットウ、ウコン、クロツグ	はっぱが長いため、葉先の部分15cm程度を切って使用する。ラッパの形に仕上がりに、大きな音が出る。小さめのはっぱはそのまま使用できる。

4 授業の実践

(1) はっぱのふしぎ発見【2時間】

導入段階は、単元の学習内容の方向付けと学習意欲を喚起する重要な時間である。このため、児童に事前に用意した様々な植物の葉を容器に入れたまま見えないように提示し、視覚、臭覚、触覚を使って同じ仲間を分類するゲームを取り入れた。普段何気なく目にしている葉についてゲーム感覚で意識的に見る視点を与えることで、植物に関する興味関心が一気に高まった。

授業が終わった後

写真1

も、自発的に葉の形や臭いを確かめる児童が多く、お互いに感じたことを交流し合っていた(写真1)。その後、校庭にある様々な植物の



葉についても確かめたいという声があがり、植物観察

を行った。はっぱを触ったり臭いを嗅いだりと、教室で確かめた植物と比べながら生き生きと活動する姿が見られた。

(2) あぶない植物チェック探検【1時間】

植物の間には毒性のあるものもあり、触れたり口にしたりすると危険

であることを教えるため、学校周辺を探検してその特徴と生育場所を確認した(写真2)。植物の中には危険なものがあることを初めて知る

児童がほとんどで、驚いた様子であった。



写真2

(3) はっぱで変身【2時間】

植物への興味関心をさらに高め、それぞれ異なった植物の特徴に気付きを持たせるため、身近にある草花と葉でこしらえた衣装や装飾品を作り、ファッションショーを開くことになった。材料は、一人一人の児童が事前に準備したものを活用した。

帽子や首飾り、腕輪、剣など、児童が作った装飾品は様々で、アイデア豊富であった(写真3)。ノカラムシやタチシバハギのように衣類にくっつく葉や種を効果的に使用するのも見られ、得意になって自分のファッションを紹介できた。



写真3

(4) はっぱの音楽会【3時間】

自作した草笛のデジタル教材を使い、何種類もの植物の草笛を聞かせると、どのようにしてはっぱから音が出るのか不思議がった。そこで、今度は実際に作った草笛を実演して音を聞かせると、児童の目がみるみる輝いた。校庭や学校周辺の植物で草笛が作れる素材が沢山あることに気付かせ、草笛を作ってみたいという意欲を高めた。校庭を回り、草笛に使えそうな植物採集では、葉の表面にざらつきやとげ等がある植物(口の周辺が痒くなったり、痛くなったりする)、葉の臭いや味が強すぎる植物(口に含んだとき気分が悪くなることがある)は絶対避けるようにさせた。ガジュマル、ハマイヌビワ、アカギ、クスノキ、ゲットウなど口に含んでも害のない植物の葉を使うようにし、草笛作りの計画を立てた。その際、草笛作りの順序を写真

資料にした画像資料を用意することで、全員の児童がスムーズに活動することができた。作り終わると、表

4のようにそれぞれ音の出し方に挑戦し、大きな音が出るまで試行錯誤を繰り返しながら何度も作り直し、友達と音比べをする場面が見られた。グループごとの発表会では、選曲した曲に合わせてリズムよく合奏することができた(写真4)。毎時間の「きょうのべんきょうのふりかえり」で、楽しかった感想が綴られた。

(5) ホットケーキにチャレンジ【2時間】

植物は毒のある種類もある一方、食することができる種類が多いことに気付かせ、ホットケーキ作りへと発展させた。まず、校内で食べられる植物を児童と一緒に採集し、はっぱ入りのケーキをグループごとに作る計画を立てた。はっぱの形を生かしたものや刻んだものなどを生地混ぜ、それぞれ好みの形に焼き上げた(写真5)。安全面に注意を払いながら自分たちで調理したケーキということもあり、普段は野菜を嫌う児童も、はっぱの感触を味わいながら完食した。

表4 草笛づくり

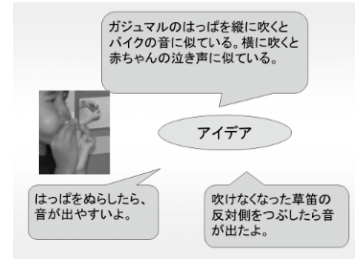


写真4



写真5



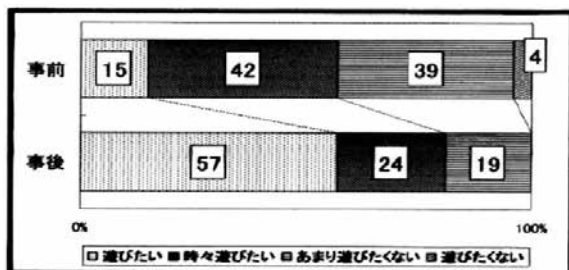
5 仮説の検証

(1) 身近な植物に対する興味・関心について

これまで遊びの中ではっぱを工夫して使う経験の少なかった児童にとって、はっぱで物作りをして遊ぶことや、はっぱ入りホットケーキを食べるなどの活動は、驚きや発見が多かったことが事後アンケートからうかがうことができた。「草や木のはっぱを使った遊びをしたいですか」という質問に対して、「遊びたい」と回答したのは事前の15%から、事後では57%と高まった(表5)。中でも、はっぱ入りホットケーキ作りをもう一度やってみたいと答えた児童が最も多かった。ホットケーキにはヨモギが入っていたが、児童は「苦

い、けどおいしい」と言いながら、においや味を確かめながら食べていた。五感をはたらかせた活動を展開したことにより、身近な植物に対して興味関心をもつことができたと考える。また、「知っている草花や木の名前を書きましょう」の設問に関して、事前では全体で延べ73の記述だったものが、事後では延べ249と約3.4倍に増えていた。回答内容を見ると、草笛作りに用いた植物や毒性をもつ植物が多く回答されていた。それらの植物は画像資料を教室に掲示し、生育場所を確認したものである。繰り返しかかわることにより、身近な植物に対し興味関心をもつことができたと思われる。

表5 事後アンケート結果



(2) 実感を伴った知的な気付きについて

本研究では、五感をはたらかせた活動を随時取り入れ授業を実践した。以下の児童のつぶやきや発言、行動等から児童の知的な気付きが培われてきたと考える。「はっぱの音楽会」の草笛作りの活動において、6種類のはっぱの中から児童は自分の使ってみたくいのはっぱを選択して、草笛作りの活動を行った。A児がクスノキで草笛を作って口にした瞬間、「苦い、鼻の薬より苦い」と叫んだ。この時、直感的にはっぱには特有の味があることに気付いたようである。周りにいた友達も試してみて「ほんとだ」と実感していた。草笛を吹きながら多くの児童が直感的に気付いたのは音色である。「ゲットウはバイオリンの音に似ている」「セイロンマンリョウはブー、ゲットウはビーという音だね」など、様々な音に例えていた。また、「クスノキを吹いたらペロがくすぐったいよ」と、音の振動を舌で感じた児童もいた。

草笛の音が出るようになると、もっと上手に吹いてみようというアイデアを出し、いろいろな吹き方を試すようになった。そして、「ガジュマルのはっぱを縦に吹くとバイクの音、横に吹くと赤ちゃんの泣き声に似ているよ」と、音の変化を楽しむ児童が出てきた。また、使いすぎて音の出なくなった草笛を、どうにか音が出せるよう試行錯誤して作り直しているうちに、草笛の

反対側を口に当てて吹くと、再度音が出せるようになることを発見して喜んでいる児童の姿も見られた。その他のアイデアとして、はっぱを湿らせたなら音が出しやすいと感じて、音の出せなくなった友達に助言をする児童もいた。はっぱの種類や草笛の音に注目して、比較する中から新たな気付きを発見する児童もいた。「6つの違うはっぱで吹いたけど、セイロンマンリョウがよく吹けた」「クスノキみたいな小さなはっぱは作りやすい、でっかいはっぱ(ゲットウ)は何回やっても難しかった」など、はっぱの種類で音の出しやすさに違いがあることを発見していた。また、「クスノキは大きな音が出て、角度を変えてみると違う音が出たのでびっくりした」「同じガジュマルのはっぱを吹いているのに、BさんとCさんでは音が違う。いろいろな音が出るんだなあ」と、友達の音を聞いて驚いている児童もいた。

本研究を通して、身近にある植物素材の活用を図り、ゆとりある活動時間の確保や、学習の場の設定を工夫することにより、児童は驚き、考え、感動するなど、実感を伴った気付きを培うことができただけでなく、その後の学習でも進んで学ぼうとする児童の姿を見ることができた。

VI 成果と課題

1 成果

- (1) 本校及び学校周辺の植物確認調査を実施し、五感をはたらかせた植物遊びの教材開発ができた。
- (2) 身近な植物に対する児童の興味関心を高めるとともに、実感を伴った知的な気付きを培うことができた。

2 課題

- (1) 幅広い分野で身近な植物素材の教材開発を進め、昔からの伝承遊びを取り入れた活動など、実践研究をさらに展開していきたい。
- (2) 開発した教材について誰もが使えるように整理し共有財産化の方法を考えたい。

<主な参考文献>

佐々木洋 2000 『野遊びハンドブック』光文社
佐藤英文・佐藤邦昭編 1993 『草笛を楽しむ』

創和出版

ふるさとへの思いを高め、自ら課題を追究する子どもの育成

新潟県胎内市立中条小学校

校長 小野 真

1 はじめに

情報化、グローバル化、少子高齢化、知識基盤社会の到来等、社会の変化は今後もますます劇的で激しいものとなるだろう。そのような社会を生き抜く子どもたちに必要な力は、社会にある問題を自分ごととして捉え、答えのない問題に直面しても他者と協同して解決していく力であると考えている。今こそ「ふるさとへの誇りを持ち、自ら課題を追究する」力を育てたい。ふるさとの今を知り、問題状況に正対し「自らの課題」として捉え、仲間や地域の方と協同して課題を解決していく。そして、学習を通して、思考力、判断力、表現力を養うとともに、自ら粘り強く課題を追究する力を醸成する。そのような授業を目指し、主に総合的な学習の時間において、「2段階の単元構成の工夫」と「課題意識を高める学習過程と各学習過程における体験活動と言語活動の在り方」について研究を深めてきた。

「ふるさとへの思いを高める子ども」を育てるためには、単に地域を題材にするだけでは足りない。地域を題材とし、地域のよさや問題状況に触れたり、かかわったり、働き掛けたりする学習活動と、子ども自ら課題意識をもち主体的に追究活動をする学習過程を組織することが必要である。

また「自ら課題を追究する子どもの姿を具現する」ために、課題意識を高める学習過程を組織し、各学習過程における体験活動と言語活動の在り方について研究を深めてきた。体験活動の後には、言語（話す・聞く、書く）により整理・分析（比較、分類、序列化、関連付け）するなどの言語活動を行う。そうすることで、拡散していた子どもの意識が収束し、課題解決の方向を明確にでき、課題意識は高まっていくと考える。

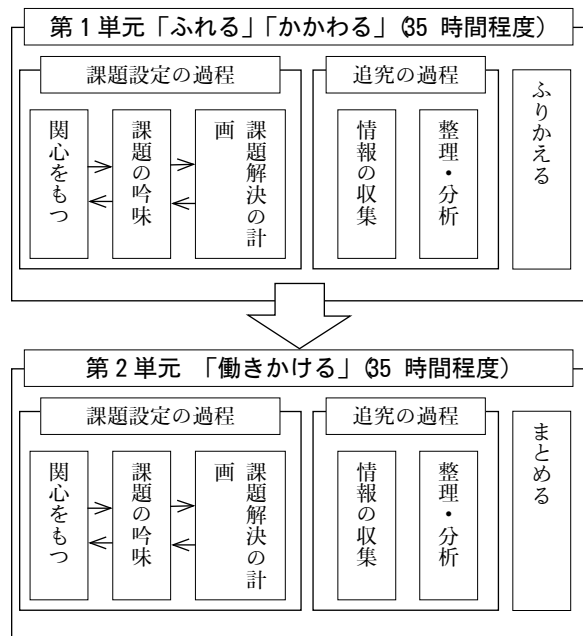
以下、「ふるさとへの思いを高め、自ら課題を追究する」子どもを育てるために、これまでの総合的な学習の時間の授業実践を振り返り、授業記録、ワークシート、制作物等から以下の内容を検証した。

2 研究の内容

(1) ふるさとに「ふれる」「かかわる」単元（第1 単元）

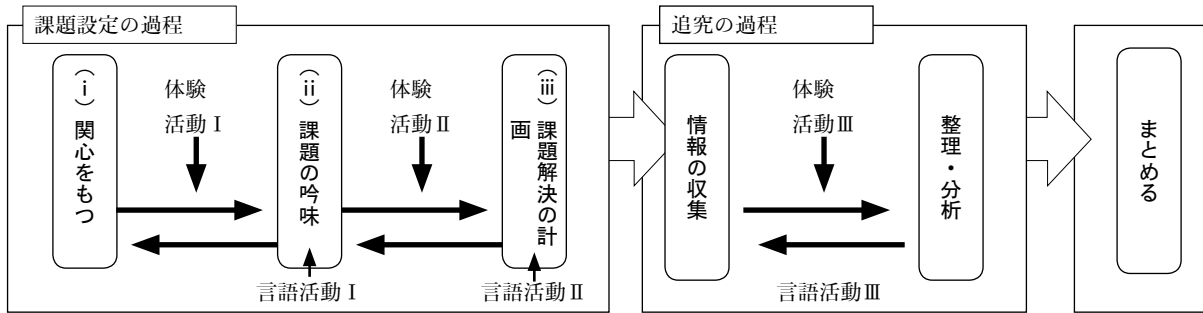
と、そこでの学びを踏まえ、ふるさとに「働き掛ける」単元（第2 単元）とを組織し、2段階の単元構成にすることでふるさとへの思いを高められるか。

ふるさとのよさや問題状況にふれる第1単元（「ふれる」「かかわる」）と、そこでの学びを深め、ふるさとの一員として地域のために自分にできることに取り組んだり、問題状況を解決したりする等して、ふるさとに働き掛ける第2単元（「働き掛ける」）を組織する。



(2) 探究的な学習過程を組織し、各学習過程において、拡散した意識を収束し、課題意識を焦点付けるように体験活動と言語活動を組織すれば、子どもは課題意識を高めることができるか。

「探究的な学習」とは、小学校学習指導要領解説では「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動のことである」とされる。この点を踏まえ下図のように学習過程を組織した。その上で、各学習過程において子どもの拡散した意識を収束し、課題を焦点付けるように体験活動と言語活動を組織する。「課題意識が高まる」とは、(i)「最初の課題」、(ii)(i)がより「具体化された課題」、(iii)(ii)がより「焦点化された課題」、というように、課題がより具体的なもの



となったり、焦点化されたりすることをいう。

3 研究の実際

当校は3～6年生の4か年を通して、連続し発展させながら「ふるさと胎内への思い」を高める総合的な学習の時間を展開している。4か年を通して、市の「自然（3年）」「福祉（4年）」「産業（5年）」「ひと（6年）」を主な学習内容とする。第1単元では胎内市の「ひと・もの・こと」に触れたりかかわったりすることを通して、ふるさとのよさや問題点を知り、第2単元では地域の一員として、各学年の発達段階に応じて問題点の解決策や地域の未来について考える学習活動を組織している。

本稿においては、5年生の授業について紹介する。

(1) 単元名

- 第1単元（「ふれる・かかわる」）

「知ろう！触れよう！胎内市のこと」（全30時間）

- 第2単元（「働きかける」）

「胎内市特産品PRプロジェクト」（全40時間）

(2) 2段階の単元構成にかかわること

① 第1単元の活動について

当校の5年生は市のふるさと体験事業の一環として、農家泊2泊を含む、4泊5日のふるさと体験学習を実施している。農家泊で農作業体験をしたり、市の自然環境や特産品についての体験学習を行ったりしている。この4泊5日の体験学習を中心とした単元を第1単元とし学習活動を展開している。農家泊以外の活動においては、次のような課題別学習に取り組んだ。

食コース・・・草花菜会の方から指導していただき、宿泊施設周辺で野草つみを行い、天ぶらにして食べた。また、黒豚のフランクフルトづくりに挑戦し、羊の腸に黒豚の肉を詰める活動を行い、できたフランクフルトを味わった。

畜産コース・・・畜産団地で牛やヤギの世話を



行った。牛のえさやりや牛舎の掃除、ヤギの搾乳体験を行った。また、搾乳したヤギの乳をつかってアイスクリームづくりを行った。

農業コース・・・減反による転作について話を聞き、畑の様子を見学した。その畑でサツマイモの収穫作業を行った。米粉が胎内市発祥の地であることや、米粉のよさ、可能性について話を聞いたり、「米粉ピザ」を食べたりしてそのよさを味わった。

4泊5日の体験学習を通して、子どもたちは、胎内市の自然の豊かさや、特産品の開発・市の活性化にかかわる人々の努力にふれ、胎内市のよさを感じることができた。

胎内市には、何も特徴的なものがないと思っていたけれど、米粉や黒豚などたくさんの特産品があることが分かりました。米粉や黒豚フランクフルトの生産でがんばった人の話を聞いて、胎内市ってすごくいいところだなと思いました。自然が豊かで、やさしい人の多い胎内市を今までよりも好きになりました。

上記の感想は第1単元「ふりかえる」の過程において、多くの子どもたちが関心を寄せた事柄である。第1単元で得たことを踏まえ、第2単元では、市の特産品の開発を通して市の活性化に尽力する多くの人々の苦労や努力、考え方、生き方に触れさせたいと意図し、次のように行った。

② 第2単元の活動について

本単元は、子どもたちから湧き出た「地域の特産品のよさをPRする課題」を解決するために、必要な情報を収集し、整理・分析することを通して、特産品のよさや、地域活性化に尽力している人の思いや願いを知り、ふるさとへの思いを高めることをねらいとした単元である。

次項において第2単元の活動の詳細とともに2(2)「各学習過程における子どもの課題意識を高める体験活動と言語活動」について述べる。

(3) 課題意識を高める体験活動と言語活動

① 「課題の吟味」の過程（「最初の課題」の設定）

第1単元の学習活動を踏まえ、最初に出会わせたいと考えた問題状況は、開発者の熱意と努力によって開発され、安全性と味に優れた市の特産品であるが、多くの人に知られていないという現実である。まず、次のような体験活動Ⅰを行った。

＜体験活動Ⅰ＞ 特産品開発者を二名招き、特産品のよさや、開発者の思いや願いに触れる体験活動を行うことで、特産品に対する「可能性」や地域活性化に尽力する人（開発者）への「あこがれ」を感じさせる。



開発までの苦労、特産品の製造工程、安全性やよさ、開発者の願いや特産品に対する思い等を語ってもらった。さらに、

次のような[言語活動Ⅰ]を行った。

[言語活動Ⅰ] ア 体験から収集した情報を付箋に書いてベン図に整理し、特産品を開発した二人の共通点について話し合うことを通して、生き方にあこがれを抱いたり、問題状況を理解したりする。
イ 特産品が地域住民にさえ知られていないのはなぜかを問い、現実と子どもの思いとの「ずれ」を感じさせ、もっと深く調べたいことを方向付ける。



【図1】ベン図に整理

付箋を整理しながら話し合わせた。「特産品を開発した人は、多くの困難があったが、それを乗り越え開発した。」「胎内市の活性化のために大変な努力をしている。」等、市の活性化に尽力する努力や思いを二人の共通点として取り上げた。N子は次のようにワークシートにまとめた。

開発者の「すごいところ」を視点

に、二人の共通点

や相違点について考えた。その際、グループで「ベン図」(【図1】)に

これほどの苦労をしできた「ハムやソーセージや米粉」を作り上げた人や胎内市をほこりに思いました。死に物ぐるいで働いたのはすごいと思っし、百キロぐらいのブタをリヤカーにのせて、坂道をのぼるのはすごいと思いました。

子どもたちは、開発者に対して尊敬の気持ちを抱く一方で、「苦労して開発された特産品が、現実には地域住民にさえよく知られていない。」と問題点を指摘した。そこで、それはなぜかを問い、個々の考えをもとに話し合わせた。「宣伝していないからだ。」「アピールが足りない。」「こんなにすばらしい特産品は、地域の宝なのに知られていないのはもったいない。」等の意見が出され、学級共通の課題として、「特産品のよさをたくさんの人に知ってもらおう。」という＜最初の課題＞を設定できた。

② 「課題解決の計画」の過程（「具体化した課題」）

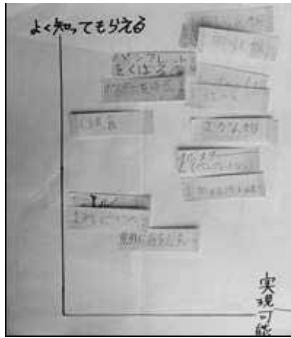
「課題の吟味」の過程で＜最初の課題＞は設定された。しかし、このまますぐに活動に及んでも、途中で意欲が萎えてしまい、子どもの主体的な活動には結びつかない。この段階では、解決の方法や見通しが十分具体的なものとなっていないからである。そこで、＜最初の課題＞を＜具体化した課題＞にするためにまず、次のような＜体験活動Ⅱ＞を行った。

＜体験活動Ⅱ＞ 特産品をたくさんの人に知ってもらうにはどうすればよいか考えを出し合い提案書をつくる。そして、専門家に自分たちの提案を聞いてもらったり、アドバイスをもらったりして、課題解決の具体的な方法をイメージさせる。

専門家には今後、子どもたちが、提案を検討する際の視点を示してもらった。そして、専門家からのアドバイスをもとに、自分たちの提案を見直すために次のような[言語活動Ⅱ]を行った。

[言語活動Ⅱ] 専門家にももらったアドバイスをもとに再度自分たちの考えを検討する。その際、座標軸を使って分析し、よりよい課題解決の方法について検討する。

「実現可能」を横軸、「よく知ってもらえる（効果が高いもの）」を縦軸にとり、座標軸(【図2】)を使ってアイデアを検討した。互いのアイデアを書いた付箋紙を操作したり、その根拠を説明したりして検討をした。話合いの結果、子どもたちが「特産品を広める方法」として最終的に選択したのは、①「試食」②特産



【図2】座標軸で検討

PRする「胎内市特産品フェスティバル」(【図3】)を開くことを決めた。課題設定後、N子は次のように感想をまとめている。

(前略)「回らん板」という意見にもみなさんせいしてくれてよかったです。みんなで「胎内市特産品フェスティバル」を開こうと、いきごんだので、絶対成功させたいです。あと、総合は自分の意見をいっぱい発表できて、いろんな人とふれあったり、感じたりできるので、これからも友達の意見をよく聞いて、自分の意見を発表したいです。(後略)

③ 「追究」の過程(「焦点化された課題」の設定)

自分が何をすべきかが分かり、それぞれの追究課題に向かって夢中になって情報収集する姿が見られた。(「体験活動Ⅲ」)しかし、収集した情報が充実していくにつれ、収集した情報をいかに精選し、効果的に「特産品フェスティバル」来場者に伝えるべきか迷う姿が見られた。そこで[言語活動Ⅲ]においては、この問題点を学級で共有し、PR活動の目的をあらためて明確にするために、伝えるべき情報を序列化(ランキング付け)し、話し合う活動を行った。その結果、伝えるべき事柄が焦点付けられ、子どもは課題解決の方向を明確にすることができた。ポスターやパンフレット等の制作物に、その変容の様子を見ることができる。

4 研究の成果と課題

実践を通して、以下の点が確認された。

(1) ふるさとへの思いを高める単元の2段階構成について

2段階の単元構成にしたことにより、子どもは第1単元で得た情報や学習内容を生かして、第2単元の学習活動に取り組む様子が伺えた。また、児童の胎内市に対する思いの変容から、ふるさとの思いの高まりを見取ることができた。このことから、連続性・発展性のある2段階の単元構成を組織したことは、子どものふるさとへの思いを高めるために有効にであったと思

われる。しかし、単元によっては、児童の興味・関心の持続が課題となる。

(2) 課題意識を高める「体験活動」と「言語活動」

① 「課題の吟味」の過程(「最初の課題」)

子どもの思いと現実との「ずれ」、対象への「あこがれ」等に出会わせる体験活動を行い、それらを明確にする言語活動を行うことで課題意識は高まり、「最初の課題」は設定できる。

② 「課題解決の計画」の過程(「具体化した課題」)

「課題解決の計画」の過程では、体験活動で得た情報をもとに、解決の道筋や互いの考えのよさや問題点を検討する言語活動を行うことで、より課題を明確にでき、「最初の課題」は具体化される。

③ 「追究」の過程(「焦点化された課題」)

「追究」の過程においては、目的を明確にして収集した情報をもとに、情報を序列化するなどして、より効果的に課題を解決するにはどうすればよいかを考える言語活動を行うことで、「具体化された課題」はより焦点化される。



【図3】「特産品フェスティバル」の一コマ

5 終わりに

「胎内市には自慢できることがたくさんあります。(中略)、わたしの自慢は何より胎内市の活性化のためにがんばってくれている地域の人たちです。わたしたちはたくさんの方の人に支えられています。(後略)」第2単元「まとめる」過程で書いた作文の中の一文である。単元全体を通して、課題意識を高め追究活動に没頭し生き生きと学習活動に取り組む子どもたちの姿があった。教科書のない総合的な学習の時間において、授業をつくることは確かに大変なことである。しかし、追究活動に没頭する子どもたちがそこから得ることができる力は非常に大きい。今後も子どもたちがふるさとへの思いを高め、自ら課題を追究する姿を目指し、実践を重ねていく。

筋道を立てて考え表現し、考えを深める算数科学習指導法の研究

～共働する組織体として児童を育て、学校力を向上させる～

滋賀県長浜市立虎姫小学校

校長 北辺 禎雄

1 はじめに

本校は、めざす児童像を「自ら考える子」「たくましい子」「心やさしい子」とし、学校教育目標を「たくましく心やさしい虎姫小の子を育成する」～「わかる」・「できる」喜び～と掲げている。また、「学習を高める」「生活を高める」「心を高める」の3つを基盤にし、学力と意欲の向上を図りながら、知徳体のバランスの取れた児童の育成を目指している。

校内研究は、学校の教育目標の具現化を目指し教師が共働で取り組む活動であり、研究を進め授業改善を行うことは、目指す児童像や学校教育目標につながるものである。また、学校のすべての教師が課題解決に向けて共働することで、教師集団の実践意欲が高まり、一人一人の指導力も向上すると考える。

2 課題の把握と検証方法の明確化

校内研究は、まず、日々子どもとの関わりの中で教育課題を的確に把握し、学校教育目標や重点目標に照らし、取り組むべき課題を焦点化する必要がある。本校では、課題把握の焦点化を図る際、全教師が参加するワークショップ型の研究会をもった。KJ法により、個々の教師が考える算数に関わる現状を整理し、図式化した。その結果、主体的に取り組むことや表現力・活用力に課題があることが明らかになった。そして、その課題解決のためノート指導とグループ・ペア学習を取組の重点とした。全教師が課題を共有し、方向性を共通理解した上で、自力解決の過程を表出するノート指導や、互いに根拠を明らかにして説明したり、考えを振り返ってそのことから考えを深めたりする場を柱とする「筋道を立てて考え表現し、考えを深める算数科学習指導法の研究」を研究テーマとした。

研究は、研究推進委員会のほか授業研究部と調査研究部の2部会の体制で進めることにし、研究成果の検証の方法を児童のノート記述をみるノート分析とアンケートによる児童の意識調査とし、これらのことから児童の変容を見取るようにした。

3 自力解決の思考過程が分かるノート指導

ノートは、思考力・判断力・表現力を高める学習に

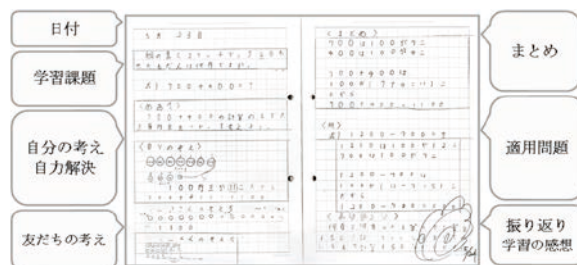
有効であると考え、自力解決の結果だけでなく、自分の思考の記録や話し合い活動の手立てとなるものを目指す。

本校において、自力解決の思考過程が分かるノートとは、

- ①自分の考えを言葉・数・式・図・表・グラフなどを使って表現している。
- ②板書のほか、友だちの考えや自分が大事だと感じたことを書き加えている。
- ③学習後の感想や振り返りの記述から、学習のねらいや児童の変容が分かる。

と、捉えている。

ノート指導をするにあたっては、1時間の学習を見開きにまとめることを基本とし、左のページに課題と自力解決の結果や友だちの考え方、右のページにまとめと適用問題、最後に感想・振り返りを書くという形式にした。



(1) 教師のノートで授業をつくる

見開きにまとめるため、教師も児童と同じマス目のノートを使用し、毎時間、指導計画（板書計画）を立てるようにした。教師が見開きを意識した板書をすれば、その板書がモデルとなり、児童のノートも見開きにまとめることができると考えた。教師が見開きのノートを毎時間考えることは、教材研究につながり、授業のねらいや指導ポイントが明確になる。また、児童に書かせたい振り返りの言葉を考えておくことで、授業をどのように展開すればよいか見通しをもつことができ、評価につながると考えた。さらに、授業後は、改善点を書き加えるなどの工夫をしている。そして、

教師のノート・児童のノート・板書の3つを意識した授業実践を行うことで授業改善をめざした。

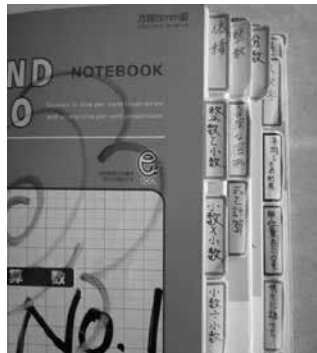
(2) ノートづくりへの意識や意欲を高める

児童のノートは、毎授業後回収し、点検・評価するとともに、よいところを認めコメントを書き入れてきた。教師がコメントを書き入れることで児童の書く意欲が高まるとともに、よりよいノートづくりの規準が明らかになると考え、調査研究部会でコメントの書き方を検討するなど共通理解を図りながら、重点的に取り組んできた。

また、モデルとなるよいノートを教室や廊下に掲示したり、全校ノート展を開催したりして、学校全体でノートづくりへの意識付けを図った。



ノートに書き留めたことが活用できることを実感することでノートづくりの意識も高まると考え、探したいところがすぐに見つけられるよう、単元名を書いたインデックスを付けた。使い終わったノートを一つにまとめて綴じたりするなど、活用を図るための工夫をした。このことは、ノートづくりへの満足感や自分だけのマイノートとしての意識付けにつながった。



4 ノートの見取りと分析の方法

学期末に、校内研究としてノート記述の分析を行い、児童の変容の見取りや今後の取組についての検討や次学期の指導の方向付けをした。互いに他学年のノートを見て分析をすることは、研究内容を再確認し、共通理解する機会となった。また、他学年の取組の様子を知ることで、縦のつながりを意識し、その学年で身に付けさせたい数学的表現等を明確にして指導に当たることができた。

分析は、各学級3名程度の抽出児童のノートで行った。抽出児のノートを縮小コピーし、画用紙に貼り、単元名、時間数、本時のねらいなどを明記した。画用紙余白には、児童の記述から分かることや学習中の様子、教師の支援などを書き込み、関連するところは線

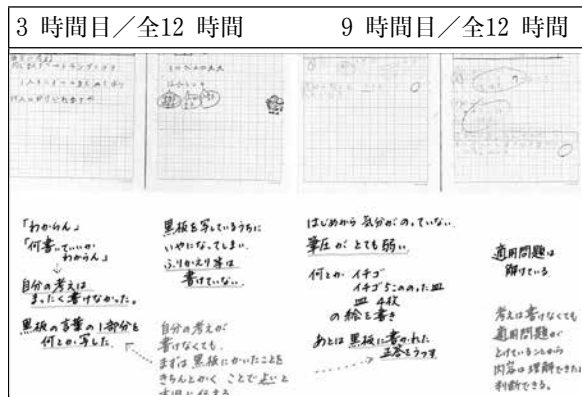
でつなぐなど変容が見えるように工夫した。

毎日のノート点検や学期ごとのノート分析は、教師自身がどのような授業をしてきたのか、児童はどう変わったのか、常に振り返ることになり、ノート指導を中心に据えたP D C Aサイクルによる授業改善へとつながった。

5 ノート分析の実際

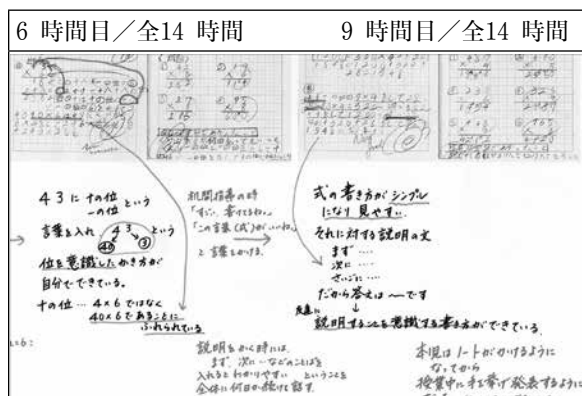
分析をどのように行ったか、3年A児を例に説明する。

(1) 3年A児のノート(わり算: 5月)



A児は学習の理解や習熟の程度が十分ではなく、発表もほとんどない児童である。わり算の3時間目のノートには、何も書けず白紙のところが目立っている。「分からない」と、意欲のない様子も見られた。また、教師は自分の考えが書けなくても黒板を写して書けばよいと声をかけ支援したことを記しているが、本児は写すことも不十分であり、学習の最後の振り返りの言葉も書けていない。

(2) 3年A児のノート(1けたをかけるかけ算の筆算: 10月)



43 × 6 の計算の仕方を考える学習では、前時の考え方をもとに、43 を40 と3に分け、位を意識した書き方ができている。9時間目の左のページ(自力解決)では、式の書き方がシンプルになり、友だちに説明することを意識した理由を書いている。教師は、これま

で、机間指導で、「すごい、書けてるね。」「この言葉がいいね。」と声をかけてきたことが、自信をもって書くことにつながったと分析している。

分析の最後に、「本児は、ノートが書けるようになってから、授業中に手を挙げ発表するようになった。」と書いているように、最初はなかなか自分の考えが書けず、発表もなかったA児が、友だちに説明することを意識したことや教師の支援により変容したことが分かる。

6 ノート指導を推進する部会の取組

調査研究部会が中心となり、児童の変容を見取るノート分析から、指導の重点や指導に有効な手立てをまとめた。

ノート指導では、

- ①教師が、児童と同じマス目のノートで指導計画を立てる。
- ②児童の書いていることをまず認める。
- ③前のノートを振り返っている児童や友だちの考えを書き加えている児童をほめる。

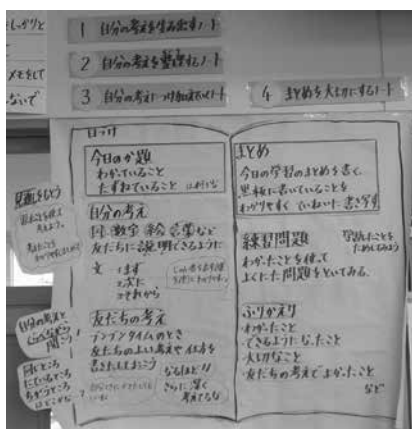
④手本となるよいノートを掲示したり、ノート展を開催したりする。などが、有効な手立てであった。

また、児童の自力解決の意欲を高めるためには、

- ①手がかりとなるような前時の学習内容を掲示する。
- ②自分の考えもてない児童が多い時は、まず一つの考えをみんなで解釈する場面を設定する。
- ③毎時間ノートを回収点検し、教師のコメントを工夫する。

などが有効であった。

これらのことを全体で共通実践できるよう、『ノートづくりのコツ』として冊子にまとめた。1時間の学習の中でのノート指導の段階やノートへのコメントの仕方を示すことで、全校のノート指導の統一を図った。また、児童用として、ノートの書き方の約束事を示したカードを作成し、児童がいつでも確認できるようにノートの表紙内側に貼ることにした。



7 評価問題を授業に生かす取組

単元計画を立てる際、児童の実態から課題を明らかにし、付けたい力を明確にすることが大切である。本校では、数学的思考力が弱く、全国学力・学習状況調査の結果、B：活用に関する問題の正答率が低く、無解答率が高いという課題が見られる。そこで、この単元、或いは、この時間に付けさせたい数学的な考え方の力を明らかにした上で、それをゴールとした評価問題を作成した。ゴールを明らかにし、指導案や教師のノート計画に評価問題を明示し、出口の児童の姿を意識した授業を展開することで、授業改善を図った。授業では、単元で付けさせたい力や本時のねらいを明確にし、評価規準を設定するとともに評価問題を提示していく。評価問題の作成に当たっては、正答例や正答規準を設定しておくことで、授業のポイントや指導上の留意点などが明らかになり、展開の見通しがもてると思った。教科書の問題のほか、全国学力・学習状況調査のB問題や県の学力向上アプローチ事業の評価問題の問題や結果分析などを考慮しながら、教師間で検討し作成し、結果をもとに児童の変容を見取ったり、授業を振り返ったりして授業改善を進めてきた。また、評価問題や正答基準を見直すことで継続的な改善に努めることにした。

8 算数の研究の広がり

(1) 他教科への広がり

校内研究で取り組んできたノート指導やペア学習・全体交流が他教科にも広がっている。校内研究の根底にあるものは学校教育目標の具現化であり、研究を始めるに当たり、本校の課題として共通理解してきた、主体的に取り組む力や思考力・判断力・表現力の育成やコミュニケーション力の育成にある。算数科を窓口としているが、校内研究で取り組んできたことは、他教科にも生かして取り入れていくことは自然なことと考える。他教科への広がりの例として、社会科や理科でのノート指導、体育科や図画工作科での自力解決とペア・全体交流などがあげられる。社会科や理科では教師が児童と同じノートで指導計画を立て、思考過程が分かる見開きのノートづくりを取り入れた授業改善に取り組むようになった。また、図画工作科においては、作品を作る過程に自力解決の時間と交流の時間を設けることで、イメージを深め、自分の色や形に表していく授業展開を工夫した。本校では、そのような交流の時間を「小さな鑑賞会」と名付け、「どうしたらよくなるだろう。」という個々の課題を、交流を通して解決していく活動を積極的に取り入れるようにした。

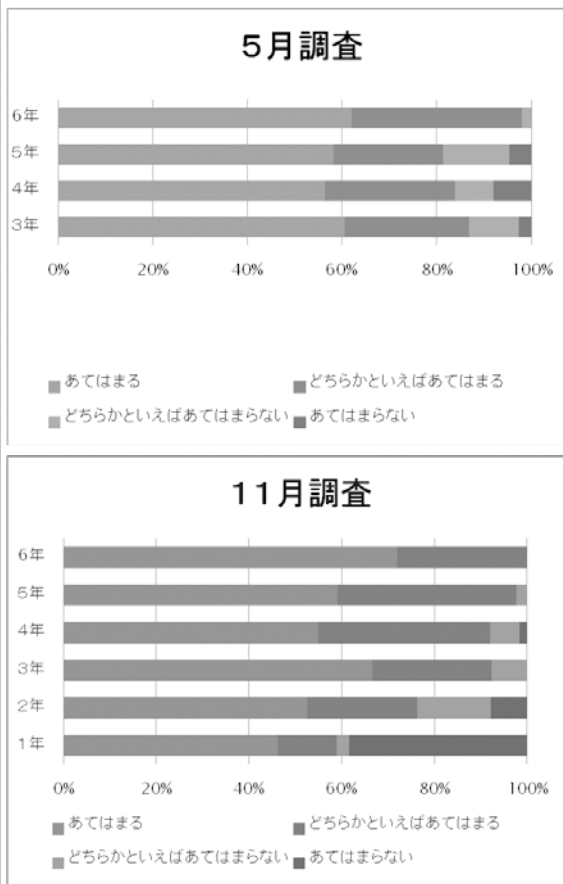
(2) 取組の可視化による広がり

会議や来客の多い集会室にコーナーを設け、教師のノート、児童ノート、授業終了時の板書の写真を3点揃えて常設展示した。展示する写真は月1回程度変えることとし、常に更新することで、他学年の取組が分かり教師間の共通理解が図れた。また、保護者やボランティアなど地域の方、他校の先生に本校の研究の取組を紹介することもできた。他校から展示を見に来られることもあり、成果が広がっていることが分かる。



9 研究の成果

⑩問題を解くときに、友だちの考えを参考にしたり使ったりすることがある。



(1) 上の児童アンケートの結果からも分かるように、ノート指導に力を入れることで、自分の考えをまとめたり、課題解決に向けた意欲が向上したりした。また、様々な方法で課題を解決する児童が増えた。

(2) グループ学習やペア学習をすることで、考えの交流を図ることができた。児童がノートを指し示しながら説明をしたり、友だちの考えをノートに記録したりするなど話し合いの仕方に変容が見られた。

(3) 成果の検証方法を明らかにし、2部会で分析を進めることにより、児童の変容の様子が確認できた。また、検証方法を年度当初に明らかにし、分析を進めてきたことは、教師の意欲向上と共通実践につながった。このことは、全教職員が計画的・組織的に取り組んできた成果である。

9 終わりに

1年間の研究を終えるに当たり、児童の姿がどのように変容したかを、KJ法によりまとめた。ワークショップ型で話し合い、まとめることにより研究の成果や新たな課題を共有することができた。また、どんな取組が成果につながったのかを、全職員が各々の立場から振り返りの用紙に記述し、冊子としてまとめた。研究を各自がまとめることで、これからの授業や次年度の研究に生かすことができ研究の価値が高まった。

本校では、ノート指導やペア・全体交流などを通して、筋道立てて考え表現し、考えを深める算数科学習指導法の研究に取り組んでいるが、本校児童もいずれ大人になり、さらに多様で変化の激しい社会を生き抜かなければならない。本校が研究で大事にしている「自力解決」と「人と適切に関わる力」こそ、「生きる力」、「生き抜く力」につながると確信している。

校内研究に学校全校で取り組むことにより、児童の生活態度や保護者・地域の学校を見る目が変わってきている。また、世代交代が進む職員構成の中で、若手教員が伸びてきている。これは、「チーム虎姫」として、校内研究に取り組んできた成果と考える。学校全体が共働体として取り組んだからこそ、意義があり、成果があがったと考える。これからも学校全校で共通理解しながら、同じ方向、同じベクトルで取り組んでいきたい。

「やってみたい」を形にして、生徒の主体的な学びを引き出す指導

～教科指導の一環としての“ファッションショー”の取組～

埼玉県立川越総合高等学校

教諭 松尾美奈子

1 はじめに

本校の文化祭ファッションショーは平成22年度の3年次生が試行錯誤して取り組んだことから始まった。今年度で5回目となったショー（ファッションショーと同義）も大盛況のうちに終了し、参加した3年次生が、さらに卒業まで、より主体的な学びを重ねるべく積極的に授業に取り組んでいる。

本校は全日制の単位制総合学科の高校で、2年次より「農業」科目と「家庭」科目を中心とした100種類以上の選択科目の中から選択し、各自の進路希望等に合わせ自分で時間割をつくる。興味関心の高いものを積極的に学べるのが本校の特色である。しかし実際は、積極的に学びを重ねたいと願うより、日々気楽に楽しく過ごせばいいという生徒が多い。力があるにも関わらず、それを高校生活の中で伸ばしきれずに卒業していく生徒も少なくない。そこで何か、生徒が積極的に物事に取り組み、学び、それが生徒の自信につながるような指導ができないものかと考えていた。そこで、私が担当する「被服製作」の授業を選択していた生徒からの何気ない「ファッションショーをやってみよう」という言葉がきっかけとなり取組が始まった。

2 主題設定の理由

私は、生徒の「やってみたい」を形にしていくことで生徒が物事に意欲的に取り組めるようになるのではないかと考えた。そこで、生徒の興味本位だけではなく、教科指導の一環として「ファッションショーをやってみよう」という言葉を目に見える形にすることで、生徒が授業に意欲的に取り組み、主体的な学びにつなげられるようにしようと考えた。一つのことを深めていく中で、それが生徒にとって自信となれば、他の場面でも生徒それぞれが主体的に取り組めるきっかけになるのではないかと考えた。そこで、本校で“教科指導の一環としてのファッションショー”に取り組むこととなった。

3 取組の方法

最初に本校での実施可能な方法を考えた。家庭科関係の専門高校ではない本校の限られた条件の中で、ショーを実施するためには工夫が必要だ。まず、3年次の生徒が製作した作品でショーを実施することを考えた。しかし本校でショー実施が可能な時期は、9月末の文化祭である。4月から授業が始まり、9月にショーを実施するとなると、製作した作品の数を確保するのが難しい。そこで、生徒が製作した作品を中心としながらも既製の活用も考えた。具体的には「ファッションデザイン」の授業の中の学びを活かして既製をコーディネートした『リアルクローズコレクション』と、「被服製作」や「課題研究（被服）」の授業で製作した作品を発表する『ハンドメイドコレクション』の2部構成でショーを行うことだ。また、生徒の作品製作は授業内だけで完成するのは難しいので、放課後や夏休みに作品製作補習を毎日のように行えば実現可能であると考えた。

3-1 授業での取組

本校では家庭科の被服関係の科目として3年次で「被服製作」「ファッションデザイン」「課題研究（被服）」という自由選択科目が設定されている。これらの授業での生徒の学びをショーにつなげていく。

「被服製作」では、市販の型紙を使用して、1学期にワンピース製作を行う（写真1）。思い切って型紙を書く（平面作図）



写真1 ワンピース製作の様子

指導は3学期にし、市販の型紙に各自でアレンジを入れながら進めることで取り掛かりやすく“服作りのおもしろさ”を学べるように工夫した。また、生徒が作

品製作をしていく上で、失敗を恐れて委縮してしまうことがないように、一つ一つの事例に向き合い、失敗を成功につなげる指導をした。完成作品を、着装発表と写真撮影をすることで、日常の中で着用できるものを自分で作り出す喜びを感じられる工夫、生徒同士互いの努力を認め合える工夫をした（写真2）。そして、製作したワンピースをショーで着装し、多くの人に見て頂くことを意識させた。



写真2 ワンピース着装発表後の写真撮影

「ファッションデザイン」の授業では、コーディネートする方法を学び、グループごとにショーのテーマ案を考えた。テーマにあったコーディネートを雑誌の写真等を利用してイメージを模造紙に表現して発表しあう（写真3）。それを文化祭のショーのテーマ決定につなげた。また、今年度は自分達のショーを客観的な立場で取材し、各グループで、編集テーマを決め、ショー終了以降、架空ファッション雑誌の特集記事を編集することにも挑戦し、自分達の学んだ成果を客観視できる工夫をしている。



写真3 イメージを模造紙に表現

「課題研究（被服）」は各自で取り組みたいテーマを設定し、それぞれが作品製作を行った（写真4）。9月末の文化祭のショーに作品の完成を間に合わせるため、年間で前期作品と後期作品と2作品以上提出することを条件とし、前期作品の提出期限を、ショーに間に合う時期（9月中旬）に設定した。前期作品はショーを意識した作品、後期作品は日常的にコーディネートしやすい作品をテーマにする生徒が多い。



写真4 ドレス製作の様子

3-2 授業時間外での取組

放課後や夏休みの時間を大いに活用した。一つは、作品製作のための補習を出来る限り行った。特に夏休み中は20日間強、私も生徒と朝から晩までずっと一緒に被服室で過ごす。冷房もなく、窓は閉め切りで、常時アイロンを10台以上使う被服室は本当に暑苦しく、それでも熱中症にならないよう工夫しながら生徒は気力で頑張った。もう一つは、ショーの構成や演出（音楽や映像等）の方法を考え、ショーとしての質を高める工夫をした。平成22年度のショーは、ステージで服を着て歩くのが精一杯だった。そこでウォーキングの指導やショー本番のステージ設営指導、機材の貸し出し等を、文化服装学院とハンドメイドカンパニーにサポートしていただくこととなった。

3-3 ショー運営はあくまで生徒が主体

5月にショーのプロジェクトチーム（今年度は6名）を希望者で立ち上げる。最初は私が関わりながら会議を進めるコツを指導し、その後は生徒自身で会議を進める。ショーに関わる全員で、テーマを決める。夏休み前にショーテーマにあわせてグループ分けをし、休み中にグループごとに打ち合わせ（写真5）やウォーキング練習（写真6）、演出の準備を進める。夏休み明けにグループごとに発表しあい、修正しながら、徐々に全員でショー全体の構成をつくりあげていく。作品製作はもちろん、ショーの構成、演出等は生徒の手で全て行う。この流れの中で徐々に生徒の顔つきも変化し、積極的に話し合い、グループのまとまりもでき、気がつくると主体的に行動ができるようになってくる。



写真5 グループ話し合い



写真6 ウォーキング練習

3-4 生徒の日々の努力を見える形に

（本校HPにコラムを掲載／DVD・記念誌作成）

平成25年5月24日より、本校ホームページ（以下

HP)に「ファッションショー」というページを立ち上げ、それ以後今まで高い頻度で更新を続けている。毎日の生徒の様子を、写真を交えながら私がブログのように更新する。生徒の頑張っている一瞬一瞬を記録に残したいことから始めた。

また、DVD や記念誌（写真7）を作成しショーの様子を残すことも行った。成果を客観視できることも主体的な学びができるために必要なことだと考えた。生徒が本校に在籍してい

るときだけでなく、卒業後も「私にはこれだけ頑張った経験がある」と胸を張って言えるものを形として残すこととなった。

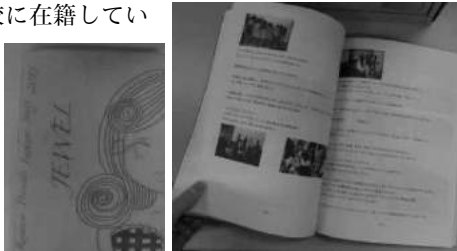


写真7 記念誌

4 本校5回目となる今年度のショーを終えて

今年度は本校文化祭2日目の9月28日に『Fashion Stage 2014 “Doll House”』というタイトルで40分間のショーを行った。出演者は25名。既製服を活用した『リアルクローズコレクション』では“Doll House = 様々なタイプの人形（生徒）の集まった家（本校）”をイメージし凝った

構成で表現した。また製作した作品を発表する『ハンドメイドコレクション』の作品数はワンピース16着、浴衣3着、



写真8 ドレス

ドレス16着（写真8）。今回は「課題研究（フラワーデザイン）」（「農業」科目）の授業選択者2名が製作した2種類の



写真9 ドレス製作者とブーケ製作者

ブーケもドレスと共に披露でき見応えのある内容となった（写真9）。9名の裏方スタッフの全面的なサポート、写真部による写真撮影、演劇部による照明のサポートなど生徒によるショーのサポートの輪が今まで以上に広がった。また、昨年度のショー参加をき

かけに服飾関係の学校に進学した卒業生数名が中心となり、ウォーキングの指導や、ショー前日のステージ設営、ショー当日の観客の誘導などの心強いサポートも得られた。そして、ショー終了以降の授業での生徒の学ぶ姿勢が変化した。例えば「被服製作」の授業の“シャツ製作”では、デザインにこだわるだけでなく、生地扱い方や一つ一つの工程の意味に関する質問が増え、ショー実施前より、明らかに積極的に学ぼうとしていると感じる場面が増えている。

5 成果

この取組を通して私自身が成果だと実感できたことを以下に挙げる。

1) 生徒が積極的に作品製作に臨むようになった

《ワンピース作り&着装発表でいろんなアイデアや着こなしを見ることができて、もっといろんな洋服を作りたいという気持ちになりました》《しつけが上手とほめられてうれしかったのでこれらも手抜きをせず一つ一つ丁寧に仕上げたいです》との作品完成後の生徒の感想。生徒はよりていねいに、工夫を凝らして作品製作に取り組むようになり、また、大きな作品（ドレス等）に取り組みたいという生徒が増えた。放課後や夏休みの自由参加の作品製作補習への参加率は年々高くなり、放課後や夏休み中の被服室は授業中以上の賑わいだ。また、文化祭のショー以降の授業に対する取組も大変意欲的になった。

2) 生徒の知識欲が増し主体的に学ぶ姿勢が見えるようになった。《作り方通りにやるのは当たり前ですが、実際作ってみると、自分にとってやりにくいことがあるので、基本を生かしながら工夫をすることも大事だと改めて思いました》というドレス製作をした生徒の感想。“縫製の方法”“服の構成”自体にも興味を持つようになり、さらに「もっとここを知りたい」というやりとりの場面が授業や補習の中で増えてきた。

3) 生徒が物を大事にするようになった《何気なく着ている洋服も、苦勞と時間があってできているものだどわかって大切にしようと思いました》というワンピース製作後の生徒の感想。一つ一つの道具を丁寧に扱ったり、布をできるだけ無駄にしないように裁断したり、余った端布でドレスやワンピースと揃いの髪飾りを作るなど、材料を無駄にしない工夫をする姿を多々みるようになった。

4) 一つのもので作り上げるには、一人ひとりの努力とチームワークが大切だということに生徒が気付く

ことができた。《ファッションショーを通して私は人の頑張りに気付き認めることの大切さを感じました》とのショー後の生徒の感想。一人ひとりの努力が質の高い作品を生み、質の高いものとなるから互いを素直に認め合え、互いの個性を認め合えるようになる。ショーが近づくほどに、自然と“チーム”としてのまとまりが出てくるようになった。

写真10 感動のショーフィナーレ

5) 全力を尽くすことで、心が震えるほどの感動を得ることができた。ショー本番が終わった瞬間(写真10)に、生徒全員が体を震わせて号泣する。緊張から解放されたのと同時に自分達がここまで頑張れたといううれしさも混ざった涙だ。努力を重ね全力でショーを創りあげることで心が震えるほどの感動を得られたことも大きい。そして友人や教職員にもその感動を伝えることができた。



写真10 感動のショーフィナーレ

6) 生徒の進路希望につながる取組となった。服飾系の学校への進路希望者が増え、さらに“ファッション”について学びを深めたいという生徒が増えた。また、服飾系以外の進路希望者も、このショーへの取組の経験を通して各自が得たことを活かし、進路活動を行うことができています。

7) 校内で理解を得て、取組が広がり始めた。本校HPに日々の様子を掲載することで、保護者や卒業生から応援して頂けたり、本校教職員の理解を得られるようになった。また生徒自身がお互いの努力を客観的に知ることができたり、生徒同士のコミュニケーションのきっかけになったりと、生徒個人又はグループ同士で、良い刺激にもなった。積極的にHPという場を活用したことで、校内でよりショーを実施しやすい状況をつくることができた。そして私自身が日々の授業の振り返りができ、授業の質の向上にもつながっている。このHP掲載や記録(DVDや記念誌)から、さらに今年度は「課題研究(フラワーデザイン)」の授業で、ドレスにあわせたブーケを製作し、ショーでドレスと共にブーケを披露できたり、写真部の生徒がカメラマンとして活躍をしてくれることにつながり、ショーに直接関わらない多くの生徒にも良い刺激を与

え、活躍の場をつくることにもなっているようだ。

6 おわりに

この5年間、“教科指導の一環としてのファッションショー”に取り組むことで「やってみたい」を形にして“生徒の主体的な学びを引き出す指導”を実践してきた。生徒は「やってみたい」という想いをショーという形にしていく過程で、授業内での取組みだけでなく、色々な場面でたくさんの壁にぶつかりながらも自分達で話し合い解決しながら乗り越えていった。もはや授業という枠組を超えて主体的な学びができ、生徒の自信につながってきたと実感する。また生徒の意欲の高まりから授業内容も向上した。一日一日を大切に丁寧に指導してきたことが、生徒自身の学びが深まることだけではなく、人と人のつながりが生まれ、少しずつ校内で広がりを見せていることは予想以上だった。そしてこの取組が、今後、学校全体のさらなる活性化につながられるのではないかと考えている。

「やってみたい」を形にする取組は教育現場では当たり前前のことだ。しかし現実には、日々の校務に追われ形にできないまま終わってしまうことも多い。逆に形ができてくると、今度は形だけが独り歩きしてそれまでの経緯や生徒達の想いを見落とししてしまいがちだ。常に原点に立ち返り、あくまで“生徒の主体的な学びを引き出す”ためであることを見失うことなくここまで積み重ねて来ることができたことは、私自身の自信にもなった。生徒の生き生きと授業に取り組む様子、生き生きとショーに取り組む様子を目の当たりにし、改めて、生徒の想いを拾うアンテナを、常に張っていたいと思う。生徒から学ぶことは多い。今後もさらに私自身の意識を高めながら、生徒の力を引き出し伸ばせるよう、日々取り組んでいきたい。

最後に、この取組を実践する中で、これまで多くの方々にご理解とご協力を頂いた。そのすべての方々はこの場を借りてお礼を申し上げます。

英語ライティング力向上を目指す授業実践

～帯単元「英文物語」の実践を通して～

大阪府守口市立梶中学校

教諭 金谷 大輔

I 主題設定の理由

国際社会を主体的に生きるため、異文化理解、コミュニケーション力が重要視されている。それを受けて小学校での英語の必修化をはじめ、生徒をとりまく環境は日々大きく変化している。

本校の実態をさぐるため、本校1年生生徒に英語についてのアンケートをとった結果、「小学校は楽しかったが、中学校で英語が苦手になった。」という意見が多く見られた。他に「英語が書けない。」「文にできない。」という意見が多くあったことから、音声と文字の接続がうまくいっておらず、ライティングに課題があると考える。

また、本校3年生は受験への意識が高いためか、英語を暗記科目ととらえている生徒が多く、表現活動に対して抵抗感をもつ生徒が多い。身に付けた知識を活用する力が育っていないことがその原因の一つと考えられる。

こうした実態から、生徒自身が伝えたい事を文としてアウトプットする活用力を育てることが重要な課題であると考え。ライティング力の向上が、コミュニケーション力の向上につながると考え、本テーマを設定した。

II 研究のねらい

言語素材の活用方法を考え、日常生活の中で、使える英語を模索し、英語による自己表現ができる生徒を育てる。

また、「学び合い」の場を設定し、仲間と切磋琢磨し、楽しみながら表現活動に取り組み、英語でコミュニケーションをとろうとする態度を育成する。

III 研究仮説と手だて

1 仮説と手だて

【仮説1】 英語の使用場面を考えることで効果的に文法や表現を習得できるのではないか。

【手だて】 文と文のつながりを意識し、使用場面を考えながら取り組めるような教材「英文物語（後述）」を工夫する。

【仮説2】 習得した言語素材をすぐにアウトプットすることで、活用力が身に付くのではないか。

【手だて】 生徒の実生活に即した英文を書く場や、スキットなど自由に英語を表現する場を「英文物語」のなかに（Your story）を設定する。

【仮説3】 仲間と関わることで、切磋琢磨しお互いに高め合えるのではないか。

【手だて】 「英文物語」で作成した英文を交換しあう場を設定する。寸劇やスピーチなど、成果の発表の場を設定する。

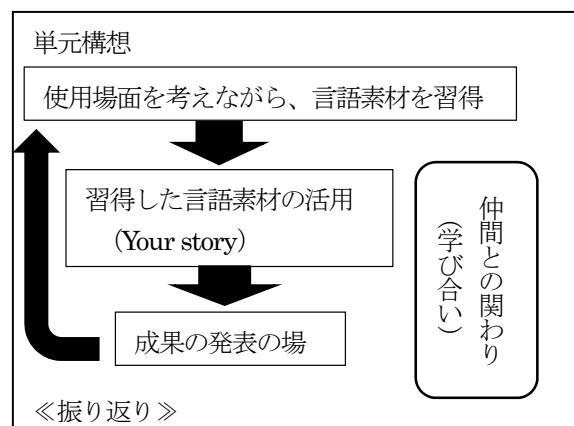
2 帯単元「英文物語」について

ライティング力向上を目指した自作プリント教材である。まず、生徒の日常会話を英作文の題材にして、新出文法事項の習得をめざす。次に、生徒は自らの好みに合わせた英作文づくりに取り組む。習得した言語素材の活用を促す。最後にペアや班で協力して、英文で物語を書いていく。最後に出来上がった物語を発表していく。という流れの帯単元になっている。「習得」「活用」「振り返り」のサイクルが螺旋的に広がる単元である。

IV 研究の内容

1 研究の検証方法

3年A組34名を研究対象とし、クラス内のグループ活動の様子やワークシートの内容、診断テストなどの材料をもとに検証を進める。



(1) 3年A組の生徒の実態

3年A組は男子19名、女子15名が在籍しており、5～6名の生活班を形成しており、男女の仲が良くグループ活動では活発に意見交換し、盛り上がる。英語に関してはリーディングでは大きな声で読むことができる。基礎的な単語を習得している生徒が多いが、ライティング活動になると、活動が止まってしまう生徒が多い。また、英語を得意とする生徒と、苦手とする生徒の差が大きいと感じており、仲間との「学び合い」を通してお互いが成長することを期待している。

(資料1) 事前アンケートの結果 実施4月10日 有効回答33名

設問1 英語が好きですか。	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
	3.2%	45.2%	32.3%	19.4%
設問2 どの力が一番弱いと感じますか。	書く	読む	聞く	話す
	67.7%	0.0%	12.9%	19.4%
設問3 英文を書いたり、英作文は好きですか。	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
	6.1%	15.2%	33.3%	45.5%

2 仮説1 に対する 実践1

英文物語プリントで、生徒が新出文法を日常生活の中での使い方が分かるように教材の工夫をした。

3 仮説2、3 に対する 実践2

上記の活動の中で使用場面を理解した後、“Your story”としてスキット形式の文や物語などを書き上げていく。

4 仮説3 に対する 実践3

“Your story”の作品を元に、ペアや班活動で協力しながら英文で物語を作り上げていく。

ペアで考えた作品を全体の前で発表する場面を設定した。優秀作品を紹介したりして励ました。

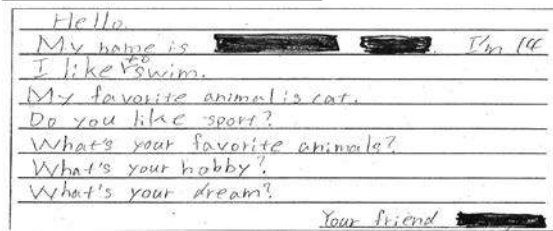
5 研究の実際

(1) ライティング力の測定

生徒の英文作成力を計るために、自己紹介の文章を書き、他クラスの生徒と英語で文通を行った。開始5分後で「先生何を書いたらいいですか。」「もう書けません。」というような声上がり、活動が止まる生徒がたくさんいた。文章の内容ではplay とlike の使用頻度が多く、文字の羅列で終わっている生徒もいた。自己紹介文を書き上げるのに、30分要した

文通であるため、生徒は返事も書いた。今までにやったことが無い活動であったため、意欲的に取り組む生徒がたくさんいた。受け取る生徒の事を考えながら表現を工夫する様子も見られ、表現活動を楽しむ生徒がたくさんいた。

(資料2) 生徒が書いた文通の一例



(2) 実践1の実際 (新出文法の習得)

新出文法が、生徒の日常生活の中で、どのような場面で用いられるか意識しやすいように教材を工夫した。流行りのアーティストの名前を使ったり、生徒同士の普段の会話の中でよくある会話を英文にする活動を行った。

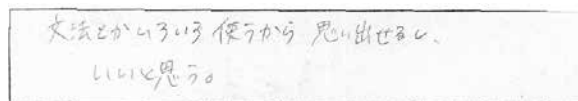
1学期の授業では、受動態と現在完了の新出文法を学習した。以下の例は受動態の学習を行ったときのものである。

(資料3) 英訳活動のプリント(受動態)の一例



新出文法だけに着目するだけではなく、前後の文のつながりを意識しながら取り組むことにより、既習文法の復習や、使い分けができるようになった。生徒の実生活に即した会話状況を設定したことで、生徒の意欲・関心を引き立てながら、基礎・基本の定着を図った。

(資料4) 生徒の授業後の感想



色々な文法の復習が出来て良かったと述べた生徒が他にたくさんいた。このことから、この実践は基礎・基本を定着させるための、効果的な支援であったと考えられる。また、1つの日本語に対して、複数の英語での表現方法があることに気付いた生徒もいた。1つの英文を書くために、様々な表現方法を模索するようになった。

(3) 実践2の実際 (新出文法の活用)

“Your story”を設定し生徒は自らの興味や関心に合わせた英作文をした。表現を楽しみながら、言語素

材の活用方法を実践的に学んだ。

(資料5) 生徒Aが書いた受動態を用いた”Your story”作品の一例

My name is [redacted].
 I am going to talk about my favorite food.
 I like Shioanigiri. Because it's very delicious.
 Shioanigiri makes many people smile. This food is
 loved by many people in Japan.

この生徒Aは自己紹介の文章の中に、受動態を取り入れた。また既習文法である「make 人 形容詞」を取り入れたり、AETとの活動で学んだ”I am going to talk about ~”を取り入れるなどの工夫が見られ、文通を行った時の自己紹介文とは内容、表現方法ともに充実している。

(資料6) 生徒Bが書いた現在完了を用いた”Your story”作品の一例

Ken and Ben are not so good friends.
 One day, Ben said "Ken, let's run together."
 And Ken and Ben ran together. When they
 were running, they talked about many things.
 And they become best friends.
 They have run for six months.

生徒Bは現在完了を用いた文を最後の一文に書いた。そこに至るまでに物語が成立し、既習語句を活用して、充実した内容となっている。接続詞whenを使ったり、talk aboutを使うなどして、工夫して物語を書く姿勢がみられる。

物語の内容が充実したのは生徒A、Bに限らず、多くの生徒が工夫しながら物語を書く姿が見られた。机間支援をしながら、良い表現を見つけると、クラス全体で取り上げた。そうすることで、自らの作品に他者からの表現を取り入れる生徒が多く見られ活動がクラス全体を巻き込むように広がっていった。

活動が止まってしまう生徒に対しては、モデル文を提示し、単語や人物を自分の好みに書き換える活動をして、少しでも自身が書きたいと思える文章が書けるように支援した。

生徒の作品には朱書きを入れて、正しい表現に書き直したり、コメントを書いて励ますなどして、関心・意欲が高まるように支援した。活動を通して、「ライティングは難しいけど楽しい」と、自己表現活動に楽しさを感じる生徒が増えた。

そのことが、生徒が書いた授業の振り返りから判断できる。

(資料7) 生徒が書いた授業後の感想

物語を考えて書くのは
 難しいけど、楽しかった。

(4) 実践3の実際 (仲間との関わり合い)

生徒の表現力がより一層高まることを期待し、ペアや班での英文物語づくりに取り組ませた。出来上がった作品を全体発表したり、優秀作品の表彰などを行った。ペア同志で表現を交換したり、時にはお互いに切磋琢磨しながら取り組み、活動が活発になる様子が感じられた。ペアの組み方は、4人の生活班の中でそれぞれペアを組んだ。生活班の中には、必ず1人は英語が得意な生徒がいるので、活動が止まってしまう場合には班活動も取り入れた。しかし、ほとんどのペアが「自分たちでできることをやろう」と前向きに取り組み、班活動に切り替えるペアはほとんどなかった。次に挙げるのが、実際に生徒が書いた作品である。

(資料8) 生徒が書いたペア優秀作品の一例

A) Have you ever played tennis?
 B) No, I haven't.
 B) Because I like ^{don't} not exercise.
 A) Exercise helps reduce stress.
 B) Really? Well, I want to do exercise.
 A) Keep trying.

この作品はテニス部の生徒と、運動が苦手な子がペアになり、書き上げた作品で、お互いの日常会話がそのまま英文として書き上げられている。二人とも英語が決して得意ではないが、教科書を片手にお互いに単語や表現のアイデアを出し合い、協力しながら完成させた。

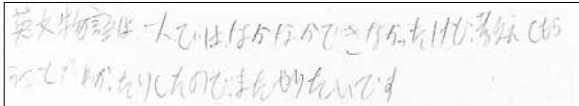
(資料9) 生徒が書いたペア優秀作品の一例

B) There was a man. He isn't good at playing basketball. He isn't a wonder player. If you don't try, you will be a good basketball player. And he can be a good player. He took part in Olympic and won the championship. His friend said this rule is normal.

この作品は英語を得意とする生徒Cと、英語は苦手だが、ユーモアのある生徒Dがペアとなり書いた作品である。生徒Dが物語を考え、生徒Cが英文にしていた。始めは生徒Dが言う日本語は英文にするには非常に難しい内容だったが、次第に、生徒Cの為にわかり易い単語に言い換えるようになった。その後、日本語

から英単語に変わっていった。最終的には生徒Cが生徒Dに対して「こんな時は英語でこう言うんだよ。」と学び合う姿が見られるようになった。その日の授業後の感想で生徒Dはこう述べている。

(資料10) 生徒Dの授業後の感想



生徒Dだけでなく、「お互いに協力でき、学び合うことができた。」と述べる生徒はたくさんいた。優秀作品を全体で紹介したことで、良い表現を取り入れるペアが出てきたり、次こそは表彰されようと、さらなる高みへと挑戦していくペアも見られた。多くのペアが表現活動を楽しみながら取り組んでいた。

(5) 検証

①実践1

生徒の日常的な場面を設定したことにより、意欲・関心をもって活動に取り組んだ。さらに文章の前後のつながりを意識し、各英文を別々の文章ととらえるのではなく、まとまりのある文章としてとらえる力が身に付いた。新出文法事項の定着だけではなく、既習文法事項の復習にもなった。よって実践1は、新出文法事項の習得の為の効果的な手立てであったと考える。

②実践2

生徒の好みに合わせた文章を書く活動の中で、複数の表現方法を考えたり、わかり易い単語に置き換えるなど、言語素材の活用の仕方を模索していた。この活動の様子から、生徒は習得した言語素材を活用し、好みの文章を書くことに喜びや、達成感を感じていた。

教師が、上手に書けている作品や表現を全体に示したことにより、表現方法の共有ができたことと同時に、生徒の意欲を高めることができた。この実践は言語素材の活用を促す、効果的な手立てであったと考える。

③実践3

仲間との関わり合いの活動の中で、「友達と一緒に取り組むと、忘れていた単語を思いだしたり、一人では考えられないような物語が出来た。」という感想が多く、お互いに良い影響があったと考える。何よりも仲間と協力することが、安心感と自信につながっていた。

全体での発表や、教師による優秀作品の表彰が、安心感と自信、関心・意欲をより一層高めた。

言語を学んでいるうえで、自分の思いや考えが誰かに伝わり、評価されることが喜びである。その喜びを味わう生徒が増えたことに、「学び合い」の成果があっ

たと言える。

V 成果と課題

1 成果

(資料11) 活動後のアンケートの結果 実施7月14日 有効回答32名

設問1 英文作りは簡単でしたか	簡単	難しい		
	21.9%	78.1%		
設問2 英文作りの活動は楽しかったですか	楽しかった	楽しくなかった		
	71.9%	28.1%		
設問3 ライティング力がついたと思いますか	とてもついた	ついた	変わらない	
	9.4%	53.1%	37.5%	
設問4 英文を書いたり、英文作りは好きですか。	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
	18.8%	53.1%	21.9%	6.3%

「活動は難しいが楽しい」という結果から、自己表現することが本当の楽しさであると感じる生徒が増えた。教材は効果的であったと言える。

表現力がついたりと自覚している生徒が増え、英語活用力が高まっていると言える。

事前アンケートでは「英作文が好き、やや好き」の割合は21.3%だったのに対し、66.2%まで上昇している。「仲間との学び合い」を行ったことが成果を上げた要因であると考えている。

以上のアンケート結果から、「自己表現で伝える」ことに本当の楽しさを見出していることが分かる。今回の様々な実践はライティング力向上の効果的な手立てであったと言える。

2 課題

今回の実践は生徒の意欲・関心を高めることには効果的であったが、「関心・意欲＝高度なライティング力」ではない。まだまだ、生徒が書く英文の内容を充実させていく必要がある。

今回の研究は1学期間のみ行ったものなので、今後も継続的に、より効果的な支援の在り方を探る必要がある。

さらに、今回の英作文活動をスピーキング力向上にもつなげる為の支援の在り方や活動内容を模索していきたい。

学校行事に主体的に取り組む小集団づくり

～改善に取り組む小集団活動を中心に～

岡山県岡山市立竜操中学校

教諭 矢吹 望

I はじめに

改訂された学習指導要領では、特別活動の目標に「人間関係」が加えられ、よりよい人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるという特別活動の教育的意義が一層明確にされた。生徒は自主的・自治的な活動のための能力を十分には身につけていないため、教師の適切な指導・助言が当然必要であるとされている。だが、中学生ともなれば、他から与えられた計画に従わせるだけでは活動意欲を失わせることにもなる。どのように生徒の自主性を生かし、いかに放任にならず適切な指導を行うか、現場の教師は悩みながら試行錯誤している。

II 主題設定の理由

本校は、1学年10クラス、全校で1000人余の生徒がいる、県下随一のマンモス校である。「人権尊重・自主自立」の校訓のもとに、運動会・文化発表会・校外研修・職場体験などの学校行事では、生徒を中心に積極的な取り組みが行われている。特に文化発表会は9月半ばの2日間をかけて開催され、1年生は教室での展示物制作、2年生はステージでの合唱発表、3年生はステージでの演劇・ダンスなどの発表を行い、保護者も一緒に楽しみ、生徒にとって思い出に残る学校行事となっている。

しかし、生徒とともに文化発表会に取り組む中で一つの課題を感じた。それは活発な生徒は活動を引っ張り、中で自分で思うように作業を進めてはいるが、それ以外の生徒や自分の意見が伝えにくい生徒は置き去りにされている傾向にあるということである。置き去りにされた生徒の意欲は低下し、他人任せの活動になってしまう。その結果、活発な生徒もだんだんと行き詰まり、集団活動自体が停滞する。やがて「文化発表会は大変だった」「あまり楽しくはなかった」という感想で、一体感のないまま終わってしまう。

そこで、生徒一人一人に居場所があり、活動に自発的に参加でき、集団としての活動が自主的・実践的なものになるような学校行事のあり方について実践研究

することとした。

III 研究の仮説

注目したのは「小集団」の活用である。というのも、小集団になることで、生徒のモチベーションが高まったり、互いに苦手なことを補いあったりする効果があると研究されているからである。そして、生徒一人一人に居場所をもたせるためには通常の生活班（6人）より小さな集団が有効ではないかと考えた。

仮説1 互いにつながり合う小さな集団づくりを行うことで、生徒は共通の目的意識をもちながら自発的に活動できるのではないかと考えた。

また、活動の指示を指導者がその都度出していくのではなく、生徒自身で計画し、実行する仕組み作りが必要であると考えた。

仮説2 見通しをもたせ計画的に進めさせる仕組みを作ることで生徒の自主性が育つのではないかと考えた。

IV 研究内容

ここでは、平成23年度文化発表会第1学年の展示物・巨大絵本制作（テーマ「つながる」）を取り上げる。学級は男子18人、女子17人の35人であるが、小集団の活動を中心に取り組んだ。なお、使用した絵本は、ふくだとしお+あきこ『うしろにいたのだあれ うみのなかまたち』であった。

(1) 小集団づくりの工夫

小集団には「直接的な関係がある」「相互作用が行われている」「互いに個人として面識がある」という特質があることを踏まえて、集団づくりを行う際に次のような工夫をした。

<構成> 1つのグループは男子2人女子2人の4人構成（ただし人数の関係上2つのグループは5人構成）にした。少人数にすることで、活動に集中しやすくする、役割をはっきりさせる、そしてお互いに意見のやりとりをしやすくすることができると思った。

<編成> 指導者がグループ編成をするのではなく、立候補した実行委員2名とクラスの信任で選ばれた生

活班長6名とグループ編成を行った。「いろいろな人と仲良くできるようになろう」というルールで決めている生活班と違い、今回は「楽しくできるようにしよう」というルールで日ごろの人間関係や相性を考えて8つのグループ編成を行った。実行委員と班長がグループのリーダーを務め、メンバーをまとめる役割を担うよう指導した。

また、連帯感を強めるためにグループには愛称をつけ、作業時にはその名前前で呼んだ。

(2) 事前指導の工夫

本格的な活動に入る前にレディネスを充実させるために、指導者が中心となって3つの活動を進めていった。
○イメージづくりの充実 1年生は初めての文化発表会ということもあり、今年度の文化発表会の目的、テーマだけでなく、3年間の見通し（展示・合唱・ステージ発表）の説明や、前年度の様子をVTRで見せるなどイメージがわくような指導を行った。また、文化発表会までの日程と作業するときの時間配分を図示し、可視化することで、どんな活動をするのか見通しが持てるようにした。制作する絵本の読み聞かせをして、作者の思いや作品の楽しさを共通理解した。

○エンカウンター「コラージュ」共同制作の楽しさを味わったり、グループの仲を深め、協力して作品作りに取り組んだりすることができるように、グループ・エンカウンター「コラージュ」を行った。出来上がった作品は教室に掲示して文化発表会までの気持ちを盛り上げるようにした。



- ルール 作業中のルールとして次の3つを提示した。
- ①時間を守る。(始まりと終わりの時間を守り、放課後にだらだら作業しないで時間内にがんばろう。)
 - ②活動時間中はわき目もふらずに取り組む。(短い時間で完成の為に時間を大切にしておこう。)
 - ③準備と片付けを確実にやる。(次回すぐに始められるように片付けをきっちり行おう。箱にセットしてリーダーが点検しよう。始める前に準備をしてからとりかかると早い。)

ルールは最低限守ってほしいことにしぼり、作品制作の楽しい雰囲気を壊さないように配慮した。

(3) グループで計画的に進めるための工夫

グループ毎に計画的に作業が進められるようにするために「進み具合早見表」を作った。早見表には完成日までの作業日数が一目でわかるようにした。反対面には担当する図柄をコピーし、出来た所を塗りつぶさせて進捗がわかるようにした。

また、作業の終わりに振り返りをして、次時への意識づけができるように、①準備・活動・片付けを◎・○・△で評価、②その日の出来を文章で記述、③その日頑張っていた人とその理由を書く、ということにした。リーダーに話し合いをして記入するよう指導した。

(4) 改善

事前に小集団づくりの工夫をしても、実際に作業に入ると問題が山積みとなった。特に下書きが終わって絵の具を使った色塗りに入ると、絵の具を混ぜて遊んだり、手に落書きをして遊んだりして作業に集中していない生徒が見られた。また、気心の知れた友達とグループになっていることで、作業とは関係のない話で盛り上がり進まない場面も見られた。早見表の振り返りを見ると△が増えていき、「集中して出来なかった」という記述も見られるようになった。全体の作業が遅れ始め、片付けが時間内に出来なくなってしまい、このままで完成できるだろうかという焦りが生徒の中にも芽生えた。

そこで、この状況を打破するために作業改善を呼びかけた。自動車メーカーで行われている、ムダ・ムリ・ムラを徹底的に省き、段取り替えをする改善(KAIZEN)活動を例にあげ、「社会で行われている改善活動に自分たちもチャレンジしてみよう！」と投げかけた。

まずグループごとに話し合ってもらって自分たちのグループの作業の問題点を考えさせた。すると、

- 作業に集中していない。●遊んでいる。
- 絵の具の無駄。 ●絵の具がもったいない。
- 片付けの時間が遅い。●準備が遅い。
- 女子がしゃべる。●男子が勝手なことばかり言う。
- 他のグループの人が乱入してくる。

などが挙げられた。

次に学級全体で活動の問題点をまとめたところ、

- 集中していない人がいる。
- 絵の具の無駄遣いをしている。
- 片付けが遅い。

の3点にまとまった。

再びグループに分かれ、改善案を考えた結果、

- ◎各々が集中する。リーダーと一緒に声かけをする。
- ◎少なめに色を作る。グループ同士で分け合う。
- ◎終了20～10分前にはきっぱりやめる。
- ◎準備と片付けの分担をする。



という改善を行うことになった。

さらに指導者とともに準備と片付けの分担について掘り下げて考え、分担表を作った。さらに、

- ①分担表を貼る・しまう。
 - ②バケツに水を汲む・洗う。
 - ③バケツに水を汲む・洗う。
 - ④絵を出す・しまう。
 - ⑤絵を出す・しまう。
 - ⑥絵の具を出す・しまう。
 - ⑦ペットボトルに水を汲む・洗う。
 - ⑧日替わり仕事をする。
- という8つの項目を生徒が考え、それぞれのグループに準備と片付けが分担された。

(5) 作品を高めるための工夫

改善のおかげで各グループが準備・片付けの際に何をすればよいかがわかり、メンバーが役割を交代して行うようになった。だ



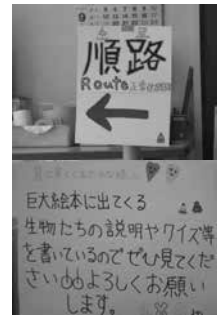
んだんと作業効率がよくなり、順調に進んだことで、時間内にできるだけ仕上げようと集中するようになった。

その結果、ほとんどのグループが余裕をもって担当部分を完成させることができ、文化発表会当日までに1時間の余裕が生まれた。そこで、この余裕時間を使って作品をもっと豊かなものに高められないかと考えた。

前時の振り返りにおいて、「クラスは活動の中で『つながる』ことができた。では、見てくれる人たちと『つながる』ためにはどんなことができるだろうか」となげかけを行い、「作品ができれば完成というわけではない」と揺さぶりをかけた。色塗りが終わって「もう済んだ」というムードだった生徒たちは、教師の思いがけない投げかけに「何かしてみたい!」という気持ちを持ち、グループごとに何ができるかをいきいきと考え始めた。

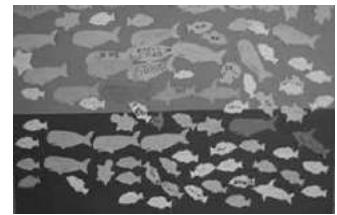
- ◇実物を展示する。
- ◇順路表示をつくる。

- ◇廊下にも展示物を作る。
 - ◇来場者に名前を書いてもらって掲示する。
 - ◇描いた動物の説明を展示する。
 - ◇教室を飾りつける。
 - ◇動物のクイズを展示する。
- などいろいろとユニークなアイデアが出された。



残りの時間でできそうなことを学級全体で話し合い、グループでそれぞれ作っていくことになった。わずか1時間という余裕の時間だったが、完成させた作品を自分たちのアイデアでさらに高めることができたことで、生徒たちは大きな達成感を味わうことができた様子だった。

文化発表会当日は楽しい雰囲気で始まり、たくさんの来場者に作品を見てもらうことができた。来場者の感嘆の言葉を聞いた生徒たちは、どこか恥ずかしそうな、だが自信をもった表情をしていた。来場者と「つながる」目的で、来場者に海の生き物を掲示してもらおうと設置した掲示板はあつという間に海の生き物で埋まり、どれだけの人が見てくれたのかが一目でわかった。



帰りの会で感想を聞いたところ「見てくれて嬉しかった。」「やっているときは大変だったけど、やってみて良かった。」といった成就感を感じていた。

V 研究の成果と今後の課題

今回の研究では、集団を小さくして学校行事に取り組むことによって生徒一人一人の役割がはっきりし、活動に自主的に取り組むことができた。また、日常生活班ではなく文化発表会の時だけの非日常的な小集団だからこそ自分の意見を十分に伝えることができ、小集団の中での心のつながりが生まれた。つながりの中でできた居場所をよりどころにして、一人一人の生徒に文化発表会を楽しみ、よりよくしていこうという実践的な態度が発現した。

また、進み具合早見表を生徒が使いこなすことで、自分たちで計画して作業することができ、やる気を継続することができた。その結果、指導者その都度指示をすることが少なくなり、困っているグループのフォローをしたり、全体の様子を見て頑張っている生徒に声かけをしたりすることができた。

さらに、活動がうまくいかなかったときこそをチャンスととらえて生徒と共に改善していくことで、自主性が育っていき手ごたえを感じた。

そして、小集団から出た課題を、クラス全体という大集団で考え、再び小集団に戻していくという相互作用の力は大きかった。ただ集団を小さくすることがよいのではなく、小さくなったり大きくなったりを繰り返しながら問題を解決し、活動をすることがよりよい人間関係と学校行事を築くことにつながるということが分かった。

また、本校では「アセス」(ASSESS: Adaptation on Scale for School Environments on Six Spheres) (以下アセスという。)を使って生徒理解に取り組んでいる。アセスは6つの側面から生徒の学校適応感を捉える調査である。1学期末と2学期末にとったアセスの結果を比べてみると、对人的適応が気になる生徒に変容が見られた。

ケース1 Aさん(男子)の場合

県外からの転校生でおだやかで消極的。入学当初は休み時間に一人でのことが多かった。

適応次元	①	②	差
生活満足感	51	83	+32
教師サポート	51	61	+10
友人サポート	37	50	+13
向社会的スキル	35	60	+15
非侵害的關係	46	47	+1
学習適応感	64	60	-4

1回目のアセスでは友人サポートと向社会的スキルに課題が見られたが、2回目には数値が60に上がっている。また、生活満足感も大幅に上昇している。実際、休み時間にクラスメイトとじゃれ合って遊ぶ様子や、自分から話しかける様子も見られた。

ケース2 Bさん(男子)の場合

大人しく真面目。小学校時代に友達とのトラブルがあり、保護者・本人ともに心配して入学。

適応次元	①	②	差
生活満足感	58	64	+6
教師サポート	59	83	+24
友人サポート	83	83	±0
向社会的スキル	63	66	+3
非侵害的關係	55	83	+28
学習適応感	45	67	+22

1回目のアセスに比べて2回目はほとんどの数値が上昇し、特に非侵害的關係が大幅に改善されている。学習的適応も上昇し、勉強にも意欲的に取り組み、自信をもって学校生活を送り、また、委員会に立候補しクラスに貢献していた。

ケース3 Cさん(女子)の場合

当番の仕事もきちんとでき、班長もこなすが、気の

合う友達は少なく、クールな態度をとることもある。

1回目のアセスでは学習的適応、非侵害的関係

適応次元	①	②	差
生活満足感	58	67	+9
教師サポート	61	83	+22
友人サポート	50	83	+33
向社会的スキル	52	60	+8
非侵害的關係	83	83	±0
学習適応感	70	83	+13

の数値の高さに比べて、生活満足感や友人サポート、向社会的スキルの低さが目立っていたが、2回目はどれも改善されている。その後は信頼できる友達のサポートもあり、クラスのリーダーとして成長し、授業、生活面でクラスを支えていた。

いずれのケースも、文化発表会の取り組みだけの成果ではないだろう。しかし、1学期終わりから2学期にかけての文化発表会をはじめとする学校行事に取り組む中で、クラスの中での对人的適応が気になっていた生徒がそれぞれに居場所を見つけ、適応することができた。

そして、3学期に行われた学年歌声集会(合唱)では実行委員が主体となり、歌詞の工夫をしたり、練習日程表を作ったり、並び方を何度も変えてみたりと自主的に取り組んでいた。その際、クラス全体にアイデアを提案して、クラスで話し合いながら改善を進めていた。文化発表会での経験が生かされていたのである。

今後の課題は、(1)学年、学校でどのように実践を共有していくかということ、(2)日常の学校生活に小集団をどう活かしていくかということである。そのためには、生徒の学年集団としての活動の場をつくっていくことや生徒会活動との関連づけ、さらに、教職員間のビジョンの共有と研修が必要となる。

VI おわりに

今後、生徒の力を信じ、任せてみながら、生徒が生涯にわたって活かせるような自主的・実践的な態度を育てる指導を続けていきたい。

参考文献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説—特別活動編』2008年
- ・プレジデント編集部『トヨタ式仕事の教科書』2006年
- ・日本特別活動学会『新訂キーワードで拓く新しい特別活動』2010年
- ・栗原慎二・井上弥、『アセス(学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト)の使い方・活かし方』本の森出版、2013年

工業高校の学科間及び企業とのコラボレーション

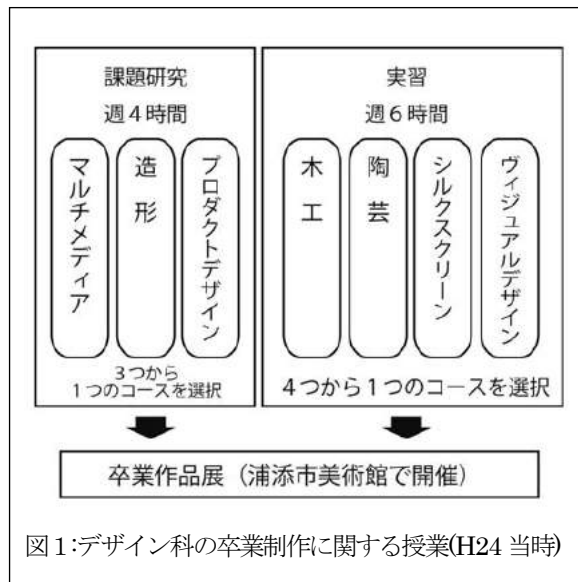
～制約をきっかけとしたコミュニケーション能力の育成～

沖縄県立浦添工業高等学校

教諭 照屋 友理

1. 主題設定の背景と経緯

本研究は主に平成24年度沖縄県立浦添工業高校デザイン科3年生を対象に行ったものである。デザイン科3年生の卒業制作は最終発表として1月に沖縄県浦添市の浦添市美術館で4日間の卒業作品展を行い、例年1000人前後の来場者がある。



生徒は3年生への進級時に実習と課題研究からそれぞれコースを選択し、1年間かけて卒業制作に取り組む。(図1) 筆者は卒業制作において、生徒の問題解決的学習とキャリア教育の実践、学校の内外におけるコラボレーションを用いた研究に取り組んだ。

この研究におけるコラボレーションとは、①学校内における学科間(デザイン科と調理科)のコラボレーション、②学校に協力する企業とのコラボレーションの2つがある。

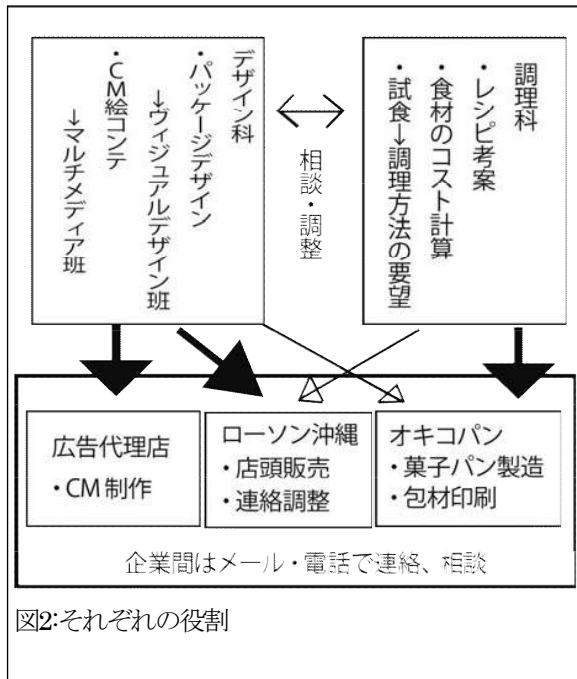
浦添工業高校は情報技術科・インテリア科・デザイン科・調理科の4つ学科からなっている。それぞれに学科の職員室があり、特色ある教育に取り組んでいるが、他の学科の卒業制作や授業の内容について詳しく知ることは難しい。お互い自科の生徒に対する指導や授業で追われており、身近に他の学科の興味深い事例や、優れた授業の取り組みがあっても、交流や学び合

い、または協力といった機会が少ない。

一方、実社会では、異業種同士が一つのプロジェクトのために、得意分野を分担し、それに伴う困難を共有しながら計画的に物事を進める過程は、ものづくりにおいて必要であると考えられる。本校は、同じ学校内に違う分野の専門性をもった生徒と教諭がおり、そのような異業種間の連携を授業で実践するには絶好の環境である。学科間で協力して浦添工業高校の独自性を出したい、と考えていたところ、平成24年3月、ローソン沖縄のデザイン科への提案でその機会を得ることができた。その主旨は「沖縄県とローソン沖縄が締結している包括連携協定の一環として、地元の高校生が授業で学んだことを生かしながら、地元の食材を使った商品と一緒に開発することで地域活性化を目指す」というものであり、学校の授業の中でも十分行いうる価値があると感じた。

それを受けて、食品ならば調理科と協力することで、デザイン科と調理科が得意分野を担当し、レシピからパッケージデザインまでを生徒が考えた1つの製品を作るのではないかと案を伝えたところ、ローソン沖縄が積極的に協力すると申し出てくれた。また広告代理店であるアドスタッフ博報堂との連絡調整なども担当して下さった。その後調理科にも依頼し、平成24年5月にデザイン科・調理科・ローソン沖縄・アドスタッフ博報堂で担当者が決まった。そしてローソン沖縄が期間限定で店頭販売する秋の新商品を、デザイン科・調理科の3年生の授業の内開発することが決定し、①アドスタッフ博報堂は広告代理店として、CM制作や製品のパッケージデザインに関してデザイン科の生徒にアドバイスすること、②包材の印刷はオキコパン株式会社が行う。③生徒が考えたデザインに対しては、オキコパンの担当者と調整すること、などが確認された。

パッケージデザイン・CMの案の制作をデザイン科ヴィジュアルデザイン班(筆者が担当する実習項目。以下VD班と表記する)の生徒が行い、レシピ・食材の選定に関しては調理科の生徒が行う。製品をまるご



と浦添工業高校の生徒が考え、企業の意見やアドバイスをもとに、生産ラインにのせられる製品を完成させ、店頭で販売(期間限定)するというプロジェクトが始まった。この取り組みが授業の中で行われたことは浦添工業高校の独特な学科の組み合わせ上実現したものであり、調理科・デザイン科双方の生徒にとって学科の授業の交流を含む新鮮な授業になると考えた。

2. 研究の目的

(1) デザインの制作における制約をきっかけとしたコミュニケーション能力の育成

デザイン科に在学する生徒は高校進学時に、「絵を描くことが好き」、などの理由で学科を選ぶ生徒が多く、基本的に、自分の好きな絵を描くことは好んでやる。しかし、販売を目的に大量生産することが前提である場合のデザインには、さまざまな制約が伴う。今回のパッケージデザインの場合、①購買意欲をかき立てるデザインになっているか、②印刷できる色数か、③袋の中の製品(菓子パン)が見えるよう包材の2/3の面積が透明になっているか、などの点に加え、関係各位の賛同を得なければならない。包材にかかるコストなど価格の制約もあるため、色数の指定や包材の大きさ、素材など融通がきかない面もある。また、生徒がデザイン案を見せて提案することで、企業が譲歩してくれる場合もあった。生徒は自分の好きなイラストを描くというせまい世界から抜け出し、必要に応じて何度もアイデアを練り直し、コンセプトを伝える必要に迫られる。

(2) 問題解決的学習

レシピを考えた調理科生徒に対して製品のネーミングやパッケージデザインに対しての賛同を得るため、資料をつくり調理科生徒に対してデザイン科3年生数名がプレゼンテーションをした。また包材印刷の会社にメールでデザインを送り、修正が必要な箇所は直すなど、生徒は自分の良いと思ったデザインを実現させるまでに何段階か見直しや相談を行った。

この研究の目的は、そのような過程で連絡調整や話し合い・プレゼンテーションを通して生徒が自らの社会性を高め、経済活動上必要な制約と自分が良いと思ったデザインとのバランスをとりながら、より良いものづくりを経験することにあった。

3. 研究の経緯

4月…①商品の種類の選択を行った。カップ入りのスイーツなども選択肢にあったが、パッケージデザインの面積や印刷の自由度から、透明な袋のオモテ面に印刷が可能な菓子パンを選択した。

②調理科では課題研究という40名一斉授業の中で取り組むことが決まる。5～6名のグループに分かれ、それぞれの班で菓子パンのレシピを考え提出。没案



の中にも面白い・美味しいものはあったが、食材のコストや賞味期限、販売時の温度などの制約からおのずと絞られた。

5～6月…調理科生徒の考えたレシピによって、オキコ株式会社によって菓子パンの試作が行われた。調理科はオキコパンと調整を重ね、原材料の産地に関しても積極的な提案を行った。試食にはデザイン科から生徒5名が同席し(図3)、デザインのヒントを得るための写真撮影を行った。ここまでで調理科によるレシピの検討が大まかに終わり、作業はデザイン科の生徒が行う工程に移行していく。

7月…菓子パンの原材料と分量が決定した。(図4)菓子パンのイメージが伝わる名称をVD班及びマルチメディア班で考えた。

第1案として「はさんだあれ」「ハサンダーレ」という語感のはずんだ感じと、奇抜さを重視した名称を調理科に提案したが、食品らしくないということから反対に合った。また、広告代理店にCMの案の動画とともに見せたところ、内容が伝わらない、などの理

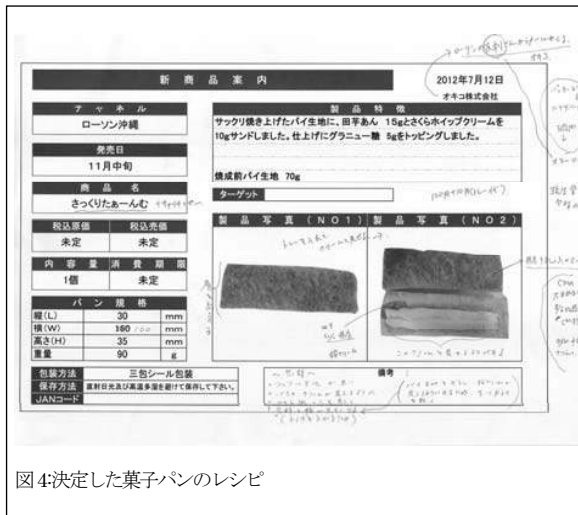


図4 決定した菓子パンのレシピ

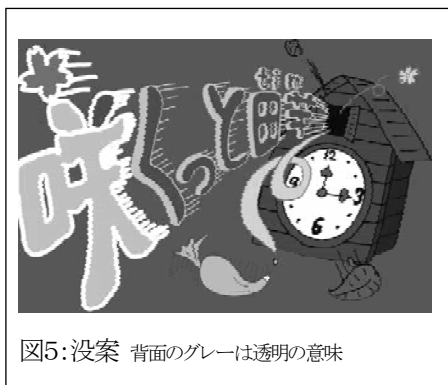


図5: 没案 背面のグレーは透明の意味

由で再検討することになった。奇抜なアイデアでは商品に使えないことを痛感するとともに、制作する生徒と関係者同士のコミュニケーションの必要を認識した。

8月…①新たに調理科にも聞き取りを行いながら「咲くっと田芋(ti me)」という名称が決定した。②CMの案を絵コンテにして企業に送るが、長過ぎて15秒に収まらない問題を指摘される。



図6: パッケージの調査のようす

③パッケージデザイン研究のため、お土産品店で沖縄県産のお菓子や菓子パンを購入し、研究した。店頭販売は主にコンビニとのことだったので、コンビニ店内におかれている菓子パンの調査を行った。

9月…①VD班で、パッケージ案を企業に送り、手

直しを進めた。顧客にパイの中身がどうなっているかをイメージさせるための断面図のイラストが作成された。(図7) ②ロゴ、キャラクターなどを作成した。(図8) ③パッケージのデザインが完成する。(図9) オキコパンの担当者から、斜めに入った植物のツルの部分が細いため、印刷のズレが生じるという指摘があり、修正することになった。また、袋表面の透明部分を増やしてより商品を見せたいという意見があり、断面図のイラストについては没になりかけたが、生徒から裏面に印刷するのはどうかと提案したところ、採用された。

10月…①プレスリリースに関わる連絡が多くなる。調理科生徒とも相談し、商品のコンセプトやパッケージデザインのコンセプトをまとめてローソン沖縄に送った。

11月…①浦添工業校長室に企業関係者が訪れ、制作に関わった生徒と学校長に感謝が伝えられた。②店頭販売に先駆けて工業祭での販売が行われた。販売ではデザイン科の1、2年生が接客などを担当し、好評であった。利益は、生徒会を通じて福祉団体及び浦添工業高校30周年事業に寄付された。③

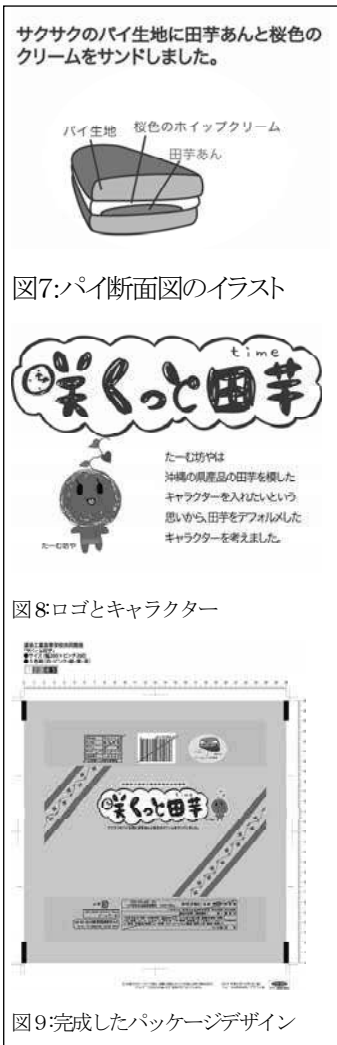


図7: パイ断面図のイラスト

図8: ロゴとキャラクター

図9: 完成したパッケージデザイン



図10: 制作の中心メンバー・ローソン沖縄社長・学校長

2012年11月10日(土) OTV(テレビ) 18:00~18:55 HI-FU☆HOP
 2012年11月13日(火) FM沖縄(ラジオ) 10:10~「Fine!」
 2012年11月14日(水) ラジオ沖縄(ラジオ) 16:05~「イブニングワイド MIX」
 2012年11月16日(金) RBC(テレビ)9:55~10:40 マモデル情報ポケット
 2012年11月17日(土) QAB(テレビ)16:55~17:00 Qごろ〜ずカフェ
 ＊タイアップ商品のTVCMを11月13日~11月19日(500GRP)放映いたします。

図11:CM放送の予定

11/13 から3週間期間限定で店頭販売が行われた。

④商品のCMが11/10、11/17までラジオ・テレビで放送された。(図11)12月1日…①好評につき当初の予定より店頭販売期間が延長された。浦添市美術館での卒業作品展で販売ブースを再現するなどの展示発表を行った。

5. 成果と課題

成果①学科間で協力することで、1つの学科の授業では完成しない、本格的なものを作ることができた。また2つの学科が協力しお互いの時期をずらして販売の機会を得ることができた。販売の機会として店頭に並ん



図12:工業祭での販売の様子

だ3週間のほかに、工業祭、産業教育フェアがあったが、工業祭ではデザイン科の「カフェ」で唯一の食品として販売したところ、2日間で1200個が完売した。(図12)産業教育フェアでは、調理科の販売ブースで取り扱うことができた。

成果②職員間でも、デザイン科・調理科が授業を通して互いの卒業制作及び課題研究の様子や取り組みを知り、学ぶことが多かったと感じる。さらに、企業の協力を得られたことで、販売する製品という形で成果を発表できることは大きい。

成果③卒業作品展終了後に生徒がまとめたレポートの中で、「夏休みから活動を始め、お菓子御殿や、コンビニに足を運び、お菓子や、パンのパッケージデザインを調査しました。ローソン沖縄さんや、CM製作をしてくれたアドスタッフ博報堂さんとの話し合いなどもあり、だめ出しをもらうこともありましたが、これもいい経験になりました。—中略—この案に辿り着く

までに、たくさんの没案があったし、修正を何度も繰り返してやっと商品化できたので、工業祭で初めて実物を見たときはとっても感動しました！！」という声があり、生徒がこの取り組みを通じて成長したことが感じられた。また、調理科の職員からも、生徒が調理にあたって、販売する商品には原材料が手に入るかどうかも含めて様々な制約があることがわかり、考え方が成長した、という声があった。



図13:店頭販売中に店員にインタビューを行った。

以下店員の声:デザインが可愛くて見栄えもいいので売れ行きは好調です!リピーターも多く、男性や年輩の方も買って行かれますよ。販売された最初の1週間の売れ行きは総数約200個、少ない日でも一日30個、多い日は1日100個で、ここ経塚店が一番売れ上げが大きいそうです。

課題①学科間の協力は、話し合いの時間の確保が難しかった。また、プロジェクトが進むにつれ、企業との連絡の際に窓口の統一が難しくなり、二重に連絡するなど混乱する時期もあった。

課題②企業の活動はスピードが早く、通常の授業も行っている学校の環境やスピードだと、追いつけない部分もあり、デザインが決定するまでには迷惑をかけた。

5. 終わりに

本研究において、地元企業の積極的な協力と、授業に対する理解と忍耐のおかげで、高校生のアイデアが商品として具体化しました。今回の研究で得たことを活かし、今後も学校と企業が連携する機会に恵まれたときには、積極的に取り組んで行きたいと考えています。

協力していただいたローソン沖縄・アドスタッフ博報堂・オキコパン株式会社へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

— 協力 —
 株式会社ローソン沖縄/株式会社アドスタッフ博報堂
 /オキコパン株式会社

算数科における思考力・表現力の育成を目指す授業づくり

～きめ細かなノート指導を通して～

千葉県東金市立東小学校

校長 子安 昌人

1 研究主題について

「ノート」は何のためにあるのだろうか。板書を写すためか？ 計算練習をするためか？ 子どもたちは、毎日、授業でノートを書くという活動を行っている。本校では、この「ノートを書く」という基本的な学習活動を改めて見直し、児童の思考力・表現力を育成するための授業づくりをしようというねらいのもと、本研究に取り組むこととした。

算数科に焦点を当てた理由は、①今日的教育課題、②本校の学校教育目標、③本校の実態の3点である。

まず、①として、学習指導要領の教育内容に関する主な改善事項の一つである「理数教育の充実」を鑑み、全学年で取り組める算数科教育の充実をねらった。

つぎに、②として、「ひとみ輝き 笑顔いっぱい 東っ子 ～夢や目標にむかってチャレンジする 心豊かでたくましい児童の育成～」を学校教育目標として設定し、すべての教育活動にあたっている。児童の具体像として、めあてや課題に対してあきらめずに粘り強く取り組んだり、自問自答しながら課題を解決したり、また、友だちとよりよい考えを練り上げていく過程で、お互いに解決できた喜びや達成感を味わえる姿を目指している。そのような児童の育成の場として、算数科の授業を捉えた。

そして、③として、算数科の千葉県標準学力検査の結果においてどの学年も県平均を上回っているが、観点別に見ると、「数学的な考え方」が4観点の中で最も低い。これらは全国ならびに千葉県の学力状況調査と同様の結果であることから、児童の思考力・表現力の育成のための手立てを講じていく必要がある。

以上の点から、算数科における思考力・表現力の育成を目指す授業づくりとして、算数科の目標にある「見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てる」ために、数、式、図、表、グラフなど思考するための道具となる様々な表現手段を用いて、自分の考えを説明したり、表現したりすることを発達段階に即して、指導していくことが大切である。

そこで、ノート指導に取り組んでいく。ただ単に書かせただけでは思考力・表現力は育まねず、考えを書けることのみが目的でもない。ノートに書く過程を重視し、思考力・表現力を育む授業を探っていく。

2 研究目標

算数科における思考力・表現力の育成のためのノート指導の工夫について授業実践を通して明らかにする。

本校が考える「思考力・表現力」とは、「見通しをもち筋道を立てて考え表現したり、表現したことから考えを深めたりする力」ととらえている。

3 研究仮説

児童の実態や学習のねらいに応じたきめ細かなノート指導を工夫していけば、児童は自分の考えを表出することができ、数学的な思考力・表現力が育つであろう。

「きめ細か」とは、教師が児童一人一人の実態や単元の学習のねらいや教材の特性を十分に把握し、教えるべき事柄や考えさせるべき事柄を明確にして、各学習場面においてノートに記述させるための手立てをさす。

4 研究の内容

(1) ノート指導の意義

ノートに関する様々な文献から、本校としてノート指導の意義を次の様に捉えることとした。

《児童にとって》書くことにより筋道を立てて考えたり、自分の考えを整理したりすることが期待できる。また、自分がどこまで分かっているのか、どこが分からないのかを自己評価することができる。《教師にとって》結果だけに目を向けるのではなく、そこに行きつくまでの過程を見ていくことができる。それは、形成的評価につながり、子どもの理解度を評価し、即時性の高い支援を行うことができる。

(2) 「望まれるノート記述」の作成

課題把握からまとめまでの各々の場面において、児童一人一人にどのような事柄を考えさせ、表現させたいかという視点で、千葉県教育委員会の『『思考し、表現する力を高める』実践モデルプログラム』をもとに、課題把握・自力解決・比較検討・まとめの流れに沿って、各学年の系統性を重視しながら「望まれるノート記述」(表1)を全教員で検討し、作成した。(図1)



【図1】「望まれるノート記述」の検討の様子

まず、課題把握の場面において、多くの場合、学習問題(素材)は教師から与えられるが、学習課題については、児童が自分のものとして捉え、本時の課題を考えられるようにしていく。

そのために、前時のノートを振り返らせながら、前時と違うところを見つけさせたり、本時のキーワードに着目させたりすることで、課題をノートに書くことができるようになる。

次に、自力解決において、結果の見通し(見積りや答え)や方法の見通し(既習事項や表現方法)を持たせ、自力解決の過程を記述できるようにしていく。

そのために、「も・ず・こ・け・し」という児童に分かりやすい合言葉で、自分の考えを表現できるように指導していく。「も」は具体物をさし、実物や数図ブロックでの操作のことである。「ず」は図をさし、○図、数直線図、線分図、面積図などのことである。「こ」は言葉による説明をさす。その際、「も・ず・け・し」は自分の考えを自分なりにどんどん書いて整理していくという意味で「自己説明」という位置づけとし、「こ」に関しては、相手を意識させ、順序立てて簡潔に分かりやすく書けるようにと「他者説明」という位置づけで指導に当たっていく。「け」は計算をさす。さくらんぼ計算や筆算、暗算などが含まれる。「し」は式をさし、数式のみだけでなく、言葉の式や公式も含まれる。これらの表現方法を自由に選択し、自分の考えを記述できるようにしていく。

そして、比較検討においては、自分の考えを分かりやすく口頭で説明したり、友だちの考えを聞いたりして、考えを深めたことを記述できるようにしていく。特に、自力解決において、自分の考えが思うようにまとめられなかった児童にとっては、考えを整理し、深めることができる時間として、1~2分と短くても、しっかりと時間を確保していく。

最後に、学習課題に照らし合わせて、分かった事柄や発見した事柄を、黒板に意図的に色チョークで書かれた学習のキーワードなどを用いて記述できるようにし、本時の学習を振り返らせていく。

尚、児童の実態に応じて、足りない所は下学年に戻ったり、達成できている所は上学年に進んだり、児童一人一人の学びに合わせて指導にあたっていく。

【表1】望まれるノート記述(一部)

学習場面		低学年	中学年	高学年
問題把握	問 ※1	場面を把握し、分かっていること(青)、聞いていること(赤)に直線を引くことができる。	素材から必要な情報を見つけて、分かっていること(青)、聞いていること(赤)に直線を引くことができる。	素材から必要な情報を見つけだし、色分けをして線を引くことができる。
	答	「今日めあては…だね」と教師と共に確認し、板書を書き写すことができる。	素材から本時の課題を教師と共に考え、書くことができる。	素材から本時の課題を考え、書くことができる。
自力解決	自己説明	具体物を操作したり、図を書いたり、数式を書いたりすることができる。 (合言葉は「も・ず・こ・け・し」)	操作表現・図表現・数式表現を用いて、自分の考えを書くことができる。	操作表現・図表現・数式表現を用いて、より良い方法で解決することができる。
	他者説明	操作表現・図表現・数式表現(※2)で言い表したり、記述したりすることができる。	どのように考えて解決したのかを、既習事項や算数用語を用いて言葉で記述できる。	どのように考えて解決したのかを、根拠を明確にして既習事項や算数用語を用いて簡潔に記述できる。

※1 学習場面の「問(答)」等は、板書と児童のノートにおける学習過程を表す記号である。

※2 中村(2010)「数学的な表現力の育成と評価」から引用

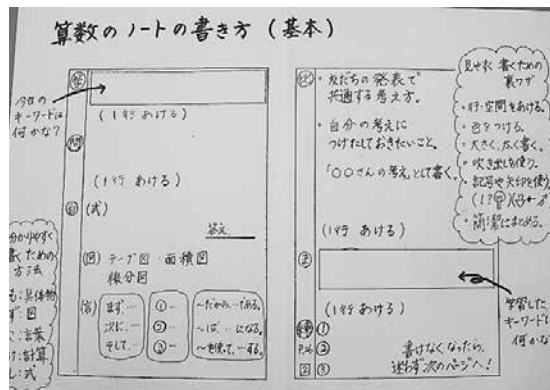
(3) ノート指導の手立て

①ノート計画の作成

教師は、単元の指導に入る前に一時間ごとの授業をイメージ化し、板書計画ではなく、「望まれるノート記述」に即してノート計画を作成する（「6 授業実践」参照）。単元のねらいや本時のねらい、そして、児童の実態に応じて、各学習場面で児童に考えさせたい事柄や表現させたい事柄を明らかにすることで、ノートに記述させていくための発問や支援の仕方をしっかりと考えることができる。

②ノート見本の掲示

ノートの書き方の型を示すノート見本（図2）を掲示する。授業が終わった後は、本時のねらいにせまったノート記述ができている児童のノートを拡大コピーして教室に掲示し、児童の意欲喚起を図ると共に、自分のノートの書き方を振り返らせる機会を設ける。



【図2】高学年のノート見本

③ノートの使い方の約束の徹底

型にこだわり過ぎるのはあまり良くないが、児童がスムーズに授業に取り組めるように、ノートの使い方についての約束を全校で統一した。このようにすることで、学年が変わっても、児童を困惑させることなく指導に当たることができる。

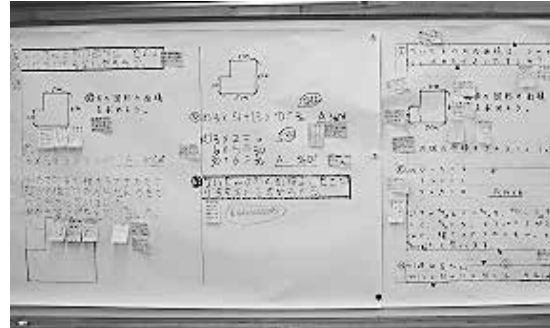
《ノート記述の約束》

- ・毎時間、見開き2ページを使用する。
- ・日付を記述する。
- ・ノート左1マス分に縦線を引き、学習の流れが分かるように記号化し記述する（学・問・自・ま・練など）。
- ・学習課題は青四角、まとめは赤四角で囲む。

(4) ノート記述の分析

平成25年度は低・中・高学年部会ごとに行う検証授業において、平成26年度は学年に関わらず編成した部会ごとに行う検証授業において、児童のノート分

析を行う。これまでに継続して行ってきたノート指導の結果として、その単元における思考力・表現力の育成が図られているか、各学習過程のノート記述内容の検討を全教員で行う。（図3）



【図3】ノート分析の様子

5 研究の方法

(1) 校内授業研究会における検証

①平成25年度

- ・6月 高学年部会 第5学年「式と計算」
- ・9～10月 中学年部会 第4学年「面積」
- ・10～11月 低学年部会 1学年「ひきざん」

②平成26年度

- ・9～10月 第4学年「見積もり」
- ・10～11月 第2学年「かけ算」
- ・11月 第6学年「体積」
- ・11月 第3学年「分数」

(2) 分析の視点

「望まれるノート記述」を指針として、各学習過程でのノート記述内容を分析し、思考力・表現力の育成が図られているかを検討する。

6 授業実践

(1) 平成25年度

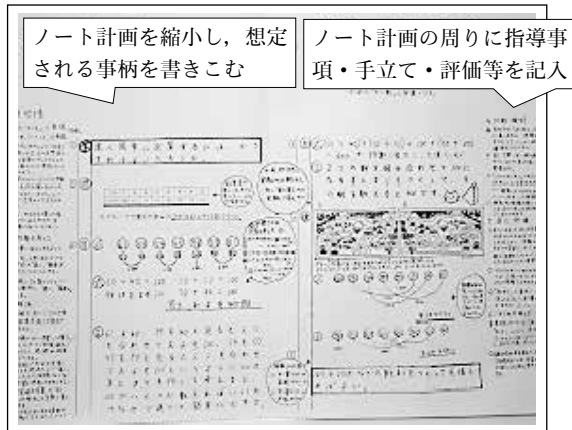
授業の前に「本時のねらい」とそれに迫るために「各学習場面で考え、表現させたい事柄」を簡条書きにしてから、ノート計画を立て、授業後に「ノート分析」を行った。その結果、仮説にある「学習のねらい」に重点を置いたノート指導となり、多様な考えを生み出す児童や理解に時間を要し、記述が困難な児童などへの個に応じたノート指導が課題となった。

また、低・中・高学年部会の授業を受け、指針となった「望まれるノート記述」について、不足部分や学年によっては予想以上に記述できていたりしたことから、学年間の系統性を考慮し、再度検討し直した。

(2) 平成26年度

前年度の実践を受け、仮説にある「児童の実態」を

重視したノート指導として、本時の授業展開を示す指導案形式を改善して、取り組んだ。(図4)



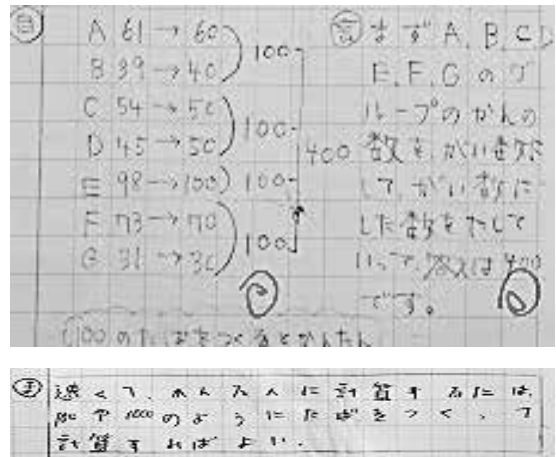
【図4】本時の授業展開案

本時のねらいに応じて、各学習場面で児童に考えさせたい事柄や表現させたい事柄を明確にしたノート計画(B4)を作成する所までは昨年同様である。本年度は、さらにそのノート計画をB5版に縮小コピーしてA3版に貼りつけ、そのまわりに各学習場面における指導事項だけでなく、児童の実態を鑑みた手立て、評価法なども書くこととした。このような段階を経ることで、再度ノート計画を振り返りながら、児童一人一人の学び(児童のつまずき・つぶやき・記述時間・教師の発問や支援の在り方)を想定し、授業展開のイメージをつかんで、児童の学びに柔軟に対応した授業を行うことができた。

図5に児童のノートを載せる。各学習過程の記述を一つ一つ丁寧に分析することで、学習課題やまとめからは、児童がどのように課題をとらえ、どのような学びをしたのかを評価することができた。また、自力解決からは、思考過程をどのような表現を用いて整理しているのか、その表現を通して、筋道を立てた思考がなされているかを読み取ることができた。机間指導の際にノート記述を見ることで、児童の考え方や表現方法が本時のねらいに迫っているか、また、児童一人一人を想定した手立ては有効であったかを判断できた。



【図5-1】児童のノート



【図5-2】児童のノート

7 研究のまとめ

(1) 成果

○「望まれるノート記述」を指針として、児童の実態や単元や本時のねらいに照らし合わせて指導を行ったことで、各学習場面において、児童自らが何を考えたらいいか、何をを用いて表現したらよいかという視点を持って学習できるようになってきた。

○児童のノートを振り返ることにより、教師の指導が不足していた事柄や児童の学びを見落としていた事柄が分かり、教師自らの指導力向上につながった。

(2) 課題

○「望まれるノート記述」について、来年度は中学校をも見据えた視点を取り入れていきたい。

○ノート指導を通して、児童に何を考えさせ、どのように表現させていくかを明確にできたことから、児童が考え、表現した事柄を教師がしっかりと見取り、指導を通してより良いものへと洗練させていくことで、さらに思考力・表現力が深まると考える。

引用参考文献

- ・千葉県教育委員会(2009). 『『思考し、表現する力を高める』実践モデルプログラム』
- ・文部科学省(2008). 小学校学習指導要領解説算数編. 東京: 東洋館出版
- ・中村亨史(2010). 数学的な表現力の育成と評価. 研究紀要, 39, 72-76.
- ・土屋明子(2011). 思考過程が表れるノート指導の在り方. 平成22年度千葉県長期研修生研究報告
- ・筑波大学附属小学校算数研究部(2009). 算数授業研究, 65, 1-38

地域を教室に一人一人のキャリア発達を促す教育の実践

～学齢期12 年間のつながりを見据えて～

静岡県立清水特別支援学校

校長 小岱 和代

1 主題設定の理由

「ともにあゆみ、ともにかがやく」は、日々の実践の拠り所となる本校の教育理念である。本校は平成22年開校以来、小学部・中学部・高等部の児童生徒が学ぶ知的障害特別支援学校として、一人一人が夢を持って可能性を伸ばし、地域で自分らしく輝くことを目指して、学校づくりを進めてきた。

そのため、地域と共に歩む姿勢を大切に、地域を学びの場とする活動を教育課程に位置付けている。児童生徒は、現在及び将来を通じて地域で生活し、働くことで社会に参加する。地域を学びの場とすることは、学校で学んだことを実際の生活に般化することが難しい本校児童生徒に、有効だと考える。

一方、平成21年3月告示特別支援学校学習指導要領では、「キャリア教育の推進」が位置付けられた。キャリア教育という概念については、特別に新しい取組をしなければならないように考えがちである。しかし、知的障害特別支援学校では、従前から自立と社会参加を目指し、働くことにつながる学びを学校教育目標と教育課程全体に位置付け取り組んできている。

昨年度は、開校から3年を経た節目の年にあたり、これまで模索してきた本校の教育について、振り返りと整理をする好機であった。その際、今社会が求めるキャリア教育の視点を加えて価値付けをすることで、日々の実践の根拠を明確にしたいと考えた。

本研究では、学齢期12年間のつながりを見据え、小学部・中学部・高等部の各段階に合わせて地域を教室とした学びを展開していく。教職員がキャリア教育の考え方を共有し、効果的な実践を明らかにする。そのことにより、一人一人のキャリア発達を促し、生涯に渡って地域でたくましく生き抜く人に育てることができると考え、本研究主題を設定した。

2 研究方法

(1) 本校の教育課程のよさや特色を確認する。

・教職員が本校の強み、弱みに気付く。

(2) キャリア教育の理念や意義について共通理解する。

(3) 学齢期12年間の連続性・一貫性に立ち、各学部の役割を確認する。

・育てたい力を一覧にした「12年間のつながり」を作成し、各学部段階の押さえを確認する。

(4) 研究の主旨を踏まえ、日々の授業の充実を図る。

・児童生徒が主体的に取り組む授業、地域に学び参加する授業を創る。

(5) 児童生徒の成長発達、教員の評価、地域の方々の評価から、本研究の成果と課題を確かめる。

3 具体的な取組 I ～基本的な考え方をつくる～

(1) 地域環境を最大限に生かす教育課程の編成

まず、運営会議のメンバーが、ワークショップにより本校の強みと弱みを明らかにした。

	strong point	weak point
地域環境	<ul style="list-style-type: none"> ○立地条件がよく、地域を活用しやすい ○地域とのつながりがある ○土地柄がよい ○関係機関との連携がとれている ○物理的、人材的にも、恵まれた学習環境 ・新しい 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域とのつながりをより大事にしたい 【校内の環境】 ・グラウンドが狭い ・本が少ない ・これから先、教室の不足、狭隘化が心配
教育課程 学習	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の学習に積み重ね ○12年間のつながりを意識 ○小中高と12年間体を動かす行事、活動がある ・生活中心の教育課程 ○交流がやりやすい ・高等部の作業製品のオリジナリティ 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育内容の精選と構築がしきれていない ・校内の設備、敷地を学習に十分活用できていない ・職業教育の充実(中) ・グルーピングが多く分かりにくい(高)

その結果、本校は地域環境に恵まれた状況にあること、地域を活用した教育に積み重ねがあること等が改めて認識できた。

職員会議では、今後も本校の地域環境を最大限に生かした教育課程編成に努めていこうと確認し合った。

(2) 本校のキャリア教育の考え方について共通理解

本校のキャリア教育の考え方を次のとおり示した。

① キャリア教育は「一人一人のキャリア発達を支援すること」である。

② 学校教育目標「児童生徒一人一人が夢を持って可能性を伸ばし、地域で自分らしく生きることをみんな

で支援する」は、児童生徒のキャリア発達を促すことと同義である。

③学校教育目標を達成するために、学齢期12年間を見通した中で、今必要なことを明確にして個別の指導計画に位置付ける。

④授業では、個別の指導計画に基づいた指導をする。
この考え方を共通理解したところ、教職員からは、「今実践していることが児童生徒のキャリア発達を促す取組であり、実践の質を高めることがキャリア教育の推進につながるということがわかった」と感想が聞かれた。

(3) 「12年間のつながり」の見える化

これまで、各学部の目標の連続性や一貫性は明確ではなかった。そこで、12年間を見通した中で各学部の育てたい力を整理した「12年間のつながり一覧」を全教員で作成することとした。

その方法は、個別の指導計画に記載した個々の目標を持ち寄り、本校が設定したキャリア教育の観点「つながる姿」「わかる姿」「えがく姿」「とりくむ姿」に沿って整理するというものである。児童生徒の実態に応じ、本校ならではの12年間のつながりを創りたいと考えた。



12年間のつながり一覧は、小中高各段階（生活年齢）において、その時々の子どものどんな力を育てたらよいかを確認するツールとなった。

観点	小学部	中学部	高等部
つながる姿	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に楽しく活動する。 自分の気持ちを伝える。 身近な人とやりとりをする。 あいさつや返事など、自分から表現する。 友達や教師と一緒に楽しい経験、がんばる経験をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と協調、協力する。 自分の気持ちを伝え、周りの意思を受け止める。 友達や教師に地面に応じたあいさつ、返事をする。 集団の中で自分の役割・仕事を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間とともに学ぶことや物事に感動することに喜びを持つ。 相手の思いやり、場や人に応じた言動をする。 周囲の人と協力したり、判断したりして活動に取り組む。 場に応じた言葉遣いや社会（校外）でも伝わる表現ができる。 様々な人と適切なコミュニケーションがとれる。 集団の一員として、役割を果たす。
わかる姿	<ul style="list-style-type: none"> 他者の存在に気付く。自己の役割や責任を認識する。 自分の好きなこと、苦手なことを見つける。 やりたいことを2～3の選択の中から選ぶ。 できたことが分かる。 その場の約束を守る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の得意なこと、苦手なことを見つけて、別のよいところを見つける。 相手の気持ちを考える。 自分の役割に気付く。 選択から目的に応じて、やりたいもの、自分が含めたいものを決める。 より良いやり方を見つける。 自分から約束やルールに気付いて守る。 活動の進捗が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の長所や短所に気付く。生かす。 相手の思いを認める。尊重する。 自分の場面に合った役割を選ぶ。 自分の力が生かせ、やりたい仕事を選ぶ。 より良いやり方を探り、行う。 ルール、約束の意義を知り、守る。 自分の行動、取り組んだ活動の自己評価をする。
えがく姿	<ul style="list-style-type: none"> 活動を楽しみにする。 憧れの人の真似をする。 身近で働く人に興味・関心を持つ。 自分で目標を決める。 手ごたえをもとに行う。 家庭や学校で役に立つ良さや希望を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間や地域のために活動することに喜びを持つ。 働くことの喜びを知る。 憧れとする仕事や活動を持つ。 自分の将来について考え、働くことに興味関心を持つ。 自分の目標に向け、計画を立てたり、情報を集めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 働くことに共通しを持ち、夢を持って努力する。 働く意義や働く上で必要なことが分かる。 将来に向けて自分にふさわしい職業や仕事への関心を持つ。 社会生活にはいろいろな役割、責任があることが分かる。 生活を豊かにする余暇活動を広げる。 自分に合った目標設定・解決策を見つける。
とりくむ姿	<ul style="list-style-type: none"> 様々なことに興味・関心を持ち、進んで取り組む。 「やりたいこと」を増やし、経験を蓄積する。 遊び込み、夢中になって活動する。 繰り返し何度もやる。 間違ってもいい活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動に自分から進んで取り組む。 最後までやり遂げる。 自分の役割が分かって行う。 自分で目標を決め、達成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分で判断し、進んで取り組む。 「やるべきこと」の意義が分かり、最後までやり遂げる。 任せられたことは一人で行う。 手順に忠実に行動する。

【12年間のつながり一覧】

4 具体的な取組II～地域を教室にした授業実践～

学校の中心は授業、主役は子どもである。12年間のつながりの中で、児童生徒が主体的に学ぶこと、現在及び将来の生活の場である地域とかかわって学ぶことを追求しようと、授業実践に取り組んだ。

(1) 地域で遊び、学ぶ小学部の実践

① 小学部教育と授業づくりのポイント

小学部の教育課程は、「遊びの指導」「生活単元学習」を柱に、基礎的・基本的な知識・技能・態度を育てるとともに、人や物とのかかわりを広げることを特色とする。

学校周辺の商店への買い物、秋の山歩き、清水駅前銀座商店街や関連施設への校外学習等で地域に出かけ、校内で培った力を応用し、地域でも発揮するよう試みている。地域を活用した授業づくりのポイントは下記のとおりである。

地域に出かけ、元気に遊び、友達と仲良く活動する学習を積極的に計画する。その活動を通して地域を知り、地域の人とたくさん出会い、交わり、物事への意欲を育む。

② 小学部5年生活単元学習「七夕祭りに行こう」

清水七夕祭りは、地域と連携した恒例の行事である。飾りを作って祭りに参加し、商店街に繰り出して飾りつけと見学を行うなど、地域の一員として参加する貴重な体験となる。

本単元では、七夕祭りに出かけるために、飾り作り、バスの乗り方の練習、清水駅周辺の地図作り、昼食のメニュー選び等の計画を立て、学習に臨んだ。

子ども達は、1年時からの繰り返しにより、七夕祭りに関心と見通しを持ち、何のために活動するかがわかっている。授業では、首尾よく祭りに出かけられるよう、自ら課題を解決したり、仲間と協力して課題に取り組んだりした。



【バス乗車模擬学習】

祭り当日は、学習したことを生かしてバスに乗り、地図を見ながら商店街を歩き、楽しく見学することができた。

③ 事例児A男の姿

A男の個別の指導計画の長期目標は、「初めての活動や苦手なことに取り組む経験を重ね、自分から活動に取り組むことができる。」である。成功体験を積んで心理的な安定を図り、環境にも馴染んで経験を広げたい児童である。

長期目標を踏まえた本単元の個別目標は、「目的地に行くために、バスでのマナーを守って乗ったり、自分から運賃を払ったりすることができる。」である（下線は「12年間のつながり一覧」小学部で育てたい力との関連）。

事前学習では、絵カードを使って「静かにする」「バ

スが止まってから立つ」等の約束を知らせ、手順表によって活動の手順を確認した。バス乗車模擬学習を通して自信をつけ、校外学習当日も、落ち着いて実践することができた。不安があると活動への取り掛かりや切り替えが難しい本児であったが、地域の「七夕祭り」に行くことを目的に、自分から取り組む姿が引き出された。本児は、授業目標を達成し、個別の指導計画に位置付けた今必要な力を身に付けることもできた。

(2) 地域に学び、主体的にかかわる中学部の実践

① 中学部教育と授業づくりのポイント

中学部の教育課程は、「作業学習」「生活単元学習」を柱とし、校内での活動を地域や他の場に広げていく機会を増やしていくことが特色である。「生活単元学習」では、桜えび、まぐろ、お茶等の特産物を調べ、地域への関心を広げる。これを基に「総合的な学習の時間」では、地域に貢献する活動に取り組む。



【商店街路面の汚れ取り】

仲間とともに地域に出かけ、学び、活動する経験を重ねることで、自信や意欲を育てる。家族や仲間のための活動に取り組むとともに、地域への活動範囲を広げる。地域の人や環境に主体的にかかわり、地域を知る、地域に役立つ喜びを持つことを目指す。

② 中学部2年 総合的な学習の時間「地藏尊祭りでおもてなしをしよう」

清水駅前銀座商店街の地藏尊祭りは、毎月23日が縁日である。2年生は年間3回程度、縁日でお茶を入れて道行く人のおもてなしをしている。授業では、おいしいお茶の入れ方を仲間と考え、練習を積む。生徒達は、試行錯誤しながらお茶の入れ方、立ち居振る舞いに改善を加えていく。縁日当日は、緊張感の中真剣にお茶を振る舞った。

振り返りでは、「お客様に、『おいしい』『ごちそうさま』と声を掛けられ、うれしかった。」と述べ、人のために役立つ喜びを味わっていた。



【地藏尊祭りでお茶のおもてなし】

③ 事例児B男の姿

B男の個別の指導計画の長期目標は、「人の話をよい姿勢で聞き、丁寧な言葉で受け答えができる。」である。自立に向けて、人間関係の形成やコミュニケーション面の課題を改善・克服したい生徒である。

長期目標を踏まえた本単元の個別目標は、「どうやっ

たらお客さんに喜んでもらえるかを考え、お茶出しのポイントを決め、目標をもっておもてなしができる。」と設定した。(下線は「12年間のつながり一覧」中学部で育てたい力との関連)

校内の学習時、友達がお茶出しをする様子を見たB男は、湯のみの飲み口に手が触れると汚いということに気付いた。自分の番になると、それを修正して丁寧にお茶出しをし、仲間にも呼びかけた。当日も培った力を十分に発揮した。「自分で決めたことが認められた」「地域の人たちに喜ばれ、役に立った」と実感することにより、自己肯定感を高めることができた。

(3) 地域で意欲的に働く高等部の実践

① 高等部教育と授業づくりのポイント

高等部の教育課程の柱は、作業学習である。本校では、在籍生徒の増加と多様化、進路状況や産業構造の変化に対応するため、「ものづくり」と「ちいき」の二つを設定している。

職場や地域で、意欲的に活動できる態度と体力を育み、仲間や地域生活での活動を楽しむための社会性や豊かな感性を高める。地域で働く経験を積み重ねることで、働くことに見通しを持って、自己実現に向けて努力することを目指す。

② 作業学習「ちいき」

「ちいき」は、将来の働く生活は地域の中であって初めて成立するという考えを基に、地域の人材と場所を借りて行う作業学習である。

本校は、比較的市街地に位置し、学校周辺は職場体験ができる資源の宝庫である。受け入れ先は17箇所及び、バラ園での摘花、神社・公園の清掃、地域関連施設の清掃、レンタカーの洗車、畳の解体、パン販売等、流通・清掃・接客に関する豊富な内容がある。

③ 洗車グループ、清掃グループの活動

洗車グループは、レンタカー会社に出かけ、洗車のやり方のレクチャーを受けた生徒がレンタカーの清掃を行う。営業に関わる車に傷を付けることは許されないため、緊張感を持って取り組む。自分達で手順表を確認し、報告を忘れずに進めるなど、真剣で丁寧な仕事ぶりが引き出される。



【レンタカーの洗車】



【地域のプロに本物の清掃を学ぶ】

清掃グループは、清掃のプロに清掃の基本を学び、

場所に合った清掃方法を工夫しながら進めている。清掃に関する課題解決を積み重ねながら、自立度を高め、チームで仕事をする姿が頼もしく見える。

八坂自治会館では、管理人さんから依頼を受けて清掃をし、終了すると点検・評価をしてもらう。

八坂幼稚園では、清掃や草取り、砂場の整備を行っている。砂場の掘り起こしを行った後は、園児たちに「お兄さん、お姉さんありがとうございました。」と言葉を掛けられ、大きな達成感を得ることができた。



【自治会館管理人さんに評価をもらう】



【幼稚園児からのお礼の言葉】

④ 事例児C子の姿

C子の個別の指導計画の長期目標は、「集団の中で、自信を持って発言することができる。」「活動の内容を理解し、手順に沿って自信を持って取り組むことができる。」の2点である。控え目で自分の気持ちを表現することが苦手なため、心理的な安定を図り、コミュニケーション力を育てたいと考えた。

長期目標を踏まえた校外清掃の個別目標は、「任された場所を、その場所に合った手順で掃除することができる。」「次にやることや改善点を自分で判断して、報告することができる。」である。(下線は「12年間のつながり一覧」高等部で育てたい力との関連)

八坂幼稚園の窓ふきや砂場の掘り起こしでは、手順を覚えて手際よく作業をすることができるようになった。教員の手本や、ペア同士で見合ったり教え合ったりする手立てが有効であった。

作業のやり方が不十分なときは、その都度改善点を考えるようにしたところ、自分で判断し、「次は〇〇をやります。」と意思表示をして取り組むことができるようになった。本生徒の作業日誌には、自己目標の欄に〇が付けられ、達成できたことへの自信が窺えた。

自分の仕事に責任を持って取り組む中で、働く人としての自覚が表情や構えに表れるようになっていった。

5 成果と課題

(1) 地域を教室とした学習の児童生徒への効果

一人一人のキャリア発達は、子ども主体の活動、自己肯定感を高める活動、人とかかわる活動の中で促される。学校内は基より、地域で実践し認められること

を通して、学びの効果はいっそう高まる。また、学齢期の各段階にふさわしく、今必要な力を身に付けることが、児童生徒の学校生活を充実させ、キャリア発達を促すことになる。

小学部は、学齢期の入り口として、校外学習を中心に地域資源を活用し、興味・関心を広げている。中学部・高等部は、地域の人と直接かかわりながら、挨拶、場に応じた丁寧な言葉遣い等、コミュニケーション能力を高めることができる。また、本物の仕事に日々取り組み、地域で役に立ち喜ばれる体験によって、自己有用感を味わい、自信を高めている。

本研究により、地域も学びの場と考え、地域を教室に実践を深めたことは、現在の児童生徒の成長発達、将来の地域生活、働く生活への移行において意義が大きいことを確認できた。

(2) 心強い学校の応援団の存在

昨年度末、本校の教育活動に協力いただいている企業・商店・事業所等10か所を対象に、聞き取り調査を行った。いずれにおいても、「子ども達の成長が自分達の励みになる。」「仕事を提供し子ども達を見守ることで、地域に貢献できる」という意見をいただいた。「地域の子どもは地域で育てる」という意識が芽生え、学校の理解者が増えていることが心強い。

また、中学部・高等部の取組については、「地域がきれいになる、仕事の一部を担ってもらい、ありがたい取組だ」「提携して仕事をするとは、地域の活性化につながる」と評価していただいた。

(3) 「12年間のつながり」に関する教職員の意識の変化

昨年度の学校自己評価の調査項目「12年間のつながりや将来の生活を意識し、学部学年の段階を踏まえた指導を行っている」では、前期・後期の各学部の平均値(ABCD評価の各点を4~1点に設定し、合計を評価者数で割ったもの)を比較すると、大きな伸びが見られた。小学部は「3.14→3.22」、中学部は「3.09→3.30」高等部は「3.28→3.43」と変化している。

これは、キャリア教育の考え方について共通理解し、全教員で「12年間のつながり」を考察しながら実践を積んだ成果である。

(4) 今後の課題

これまで培った連携を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進するために、コミュニティ・スクールへの展開を模索していきたいと考えている。

子供の自己肯定感や自尊感情の向上を目指した「子供と共に行う特別活動」の推進

富山県富山市立大沢野小学校

校長 久保 雅則

1 はじめに

校区は、富山市の南部に位置し300～1000 mの山々が連なる山間地と神通川がつくり出した河岸段丘と平地からなっている。中央を国道41号線が縦断し、交通の便が良いことから各種工場が進出しており、富山市のベッドタウンとして住宅団地も造成されている。保護者は、教育活動にとっても協力的である。

全校児童646名で、各学年3クラス、特別支援学級4クラスの22学級である。3年生以上は1クラス38人以上であり各学級の子供一人一人をどのように理解していくかが重要な課題となっている。

また、教員30名の年齢構成は50代が12名、20代が8名であり、年配と若年が多い構成となっており、若年教師の育成も大きな課題である。

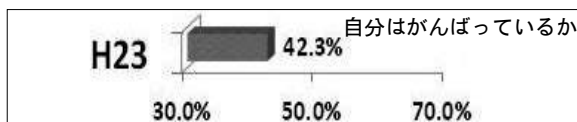
2 主題設定の理由

子供たちは全体的に素直かつ明朗であり、教師からの働きかけや与えられたことに対しては熱心に取り組むことができるので、特別活動においては、教師主導で前年度同様の活動を行うことが多かった。そのため、若年教師が自分のアイデアを生かしていくことができず、また、特別活動において子供が「自分はがんばっている」と感じることに十分できなかった。

(グラフ1、グラフ2)



グラフ1 平成23年度に行った教員評価 (5段階評定)



グラフ2 平成23年度に行った児童アンケートから

このような子供たちが、「どのようにすれば自ら身の回りに働きかけ、主体的に活動することができるか」そして「どのようにすれば教師が主体的に学校経営に参画していくことができるか」という課題を解決する

ために、子供と教師が共に取り組む特別活動「元気な風の子プロジェクトチーム」を平成24年度に立ち上げた。子供の委員会活動とチームの活動を関連付け、教師が子供と共に委員会活動を推進していくことによって、みんなの力で自分たちの学校をつくっていくという思いを共有し、子供の自己肯定感や自尊感情を高めるようにしていきたいと考えた。

3 研究仮説

(仮説1) 教師の主体性を尊重した組織と児童委員会活動のタイアップ

経営改善のチームを「学びづくり」「体づくり」「心づくり」の3つに分け、子供の委員会活動とタイアップすることで、経営がスムーズになり活動が活発になって教師の組織力が高まる。

(仮説2) 年間を通じた計画作成と見直し

1年間の見直しをもって特別活動の計画を立て、学期ごとに見直し、プランを改善したり、年度ごとの重点を見直ししていくことで、子供たちの活動意欲が高まり、若年教師が安心してチャレンジしていく環境をつくることことができる。

4 研究の実際

(1) 教師全員参加での主体的な活動 (仮説1の検証)

① プロジェクトの組織づくりと重点目標の設定

平成24年度のプロジェクト発足時に、「まなぶ」「きたえる」「おもいやる」の3つのチームをつくり、全員がどのチームに参加するか、どの委員会を担当するかを主体的に決めた。その後、月1回定期的に話し合いの機会を設定し、チームごとに、「まなぶ」「きたえる」「おもいやる」の3本柱に向かう重点を考え、チーム内の委員会同士で協力したり、必要な場合はチームをこえて協力したりして活動を行っていた。この体制を25年度も継続した。

② つながり・関わりを大切にされた組織づくり

平成25年度は、年度当初に教師全員が参加して

今年度のプロジェクトについて話し合った。前年度行って見て、子供たちが活発に活動するようになると、それぞれの委員会が独自にいろいろ企画し調整が大変であることが問題になった。そこで、「つながり・関わりを大切に」して以下のように組織を強化していくことにした。(図1参照)

- 全体の活動を統括し、活動を調整するために運営委員会を置き、代表委員会の運営や各集会の司会などを行う。運営委員会は児童会活動担当者が担当する。
- 委員会同士の調整・連絡を図っていくために委員長会議を置く。委員長同士が委員長会議で情報発信しつながることができるようにする。

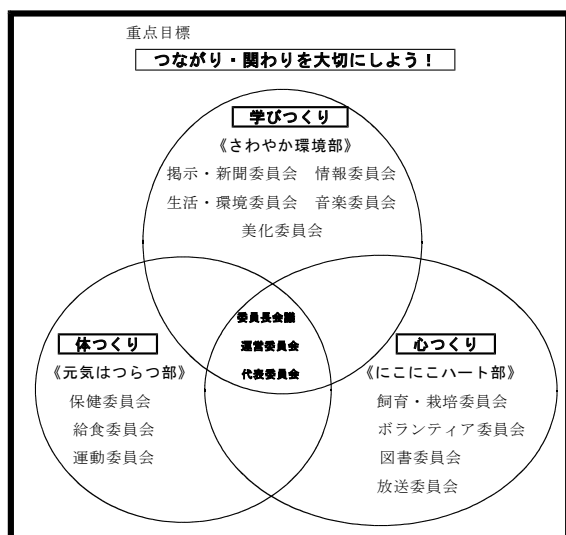


図1 元気な風の子プロジェクトチーム組織図

チームごとに重点を決めて、達成のために以下のような工夫を行った。

- 子供たちが主体的に問題として考え活動できるようにするために、中心となる委員会が提案して代表委員会で問題を提起し全校で実施する。
- 重点的に行う月を決め重点週間を設定する。
- 各学級ごとにどのように行っていか話し合っ決めて。

③教師の主体性をより大切に組織づくり

平成26年度は、前年までの成果と課題について話し合い、学校の問題を解決していくプロジェクトであるという原点に立ち戻ってそれぞれのチームがより主体的に活動していけるように以下のように考えた。

- それぞれのチームの代表者とプロジェクトの担当者が集まる「プロジェクトチーム企画委員会」を発足し、必要な時に集まって話し合うことによって、各チームが独自に活動していく。

26年度は、必要な時にそれぞれのチームで集まり活動を行っている。話し合うだけでなく、掲示物の作成や教材研究などの活動も行っており、それぞれのチームで熟年教師のノウハウを学んだり、若年教師のアイデアを生かしたりしている。

④花壇での栽培活動を中心とした「心づくりチーム」の関わり

本校は学校の伝統として全校で花壇活動に取り組み、花を使った勤労生産活動で子供を育ててきた。これまでは勤労生産活動担当の教師が企画し教師の指導の下で子供たちは花壇づくりを行ってきた。全校児童と教師が参加するこの花壇活動を「心づくりチーム」のアイデアで子供も教師も主体的に活動できないか考えた。

- どのような花壇にするかのアイデアは飼育栽培委員会が中心になって考え「ふれあい花壇」として全校に提案する。
- 一人一人の子供の主体性を大切にするために一人一人の担当プランターを決め花を植えて続けて世話をしていくようにする。
- 心づくりチームの各委員会は花壇活動に関わる活動のアイデアを考え行うようにする。

花壇整備が大変な時には飼育栽培委員会だけでなく「心づくりチーム」の他の委員会も協力した。7月の暑い時期には、朝登校してすぐに自分たちの花に水をやる子供たちの姿や、子供と一緒に花摘みなどの世話をする教師の姿があった。(写真1)



写真1 協力して花壇活動を行う子供たちと教師

また、花が咲きそうになると、飼育栽培委員会や図書委員会が中心となって、花を使ったしおり作りを行った。花が終わるころになると、花の種

をとってプレゼントしようというアイデアが出てきた。そこで、ボランティア委員会が中心となって手紙を書き、今までお世話になった交通ボランティアの方など地域の方や家族に、しおりを花の種と一緒にプレゼントした。花壇での栽培活動がきっかけとなって、地域の方や全校児童がつながりを深め、心を育てていくことができた。

(子供の日記より)

- ・ 休み時間に花の世話をしました。ほくは、地道だけど花が元気に育って大沢野小がよくなるならがんばるぞという気持ちでやりました。やっているとお意外と楽しくできました。これからも花の世話をしてお大沢野小をよくしていきたいです。(6年男子)

平成26年度は花の育ちがよく、富山県の「花と緑のコンクール 学校花壇部門」で第2位にあたる優秀賞を受賞することができた。この賞は、若年教師を中心に、全教師が主体的に花の世話をを行い、子供たちもアイデアを出し主体的に花に関わった成果だと思われる。

(2) 年間を通した計画作成と学期ごとの見直しやプランの改善 (仮説2の検証)

① 計画の見直しやプランの改善を繰り返し、子供たちの活動意欲を高めていった黙働清掃

「黙働清掃」は、しゃべらずに集中して清掃を行うという本校独自の方法である。2年ほど前から行っているがなかなか徹底するのが難しかった。

そこで、10月には、「学びつくりチーム」が中心となって「学習環境を整えるための黙働清掃を子供が主体的に行うにはどうすればよいか」について考えた。美化委員会が代表委員会で「黙働清掃週間」を行うことを提案し、各学級ごとに黙働清掃を行うための目標を考えていくことにした。

「友達と離れて協力する」「そうじに集中する」など、どうしたらしゃべらずに清掃ができるかを各クラスで考え、毎日○や△などで評価していった。結果として、◎や○がほとんどで静かに清掃ができるようになったクラスと、まだまだ△がつき、しゃべらずに集中して清掃するのが難しいクラスとの差が大きいことが分かった。(写真2参照)

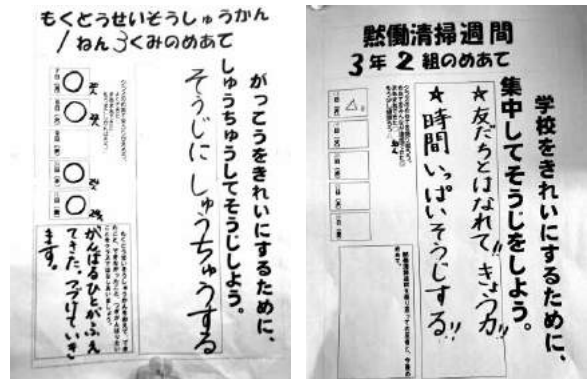


写真2 各クラスの黙働清掃の目標

3学期には、「他の学年の様子を知ることによって、子供同士で学びあって清掃ができないか」ということについて「学びつくりチーム」で話し合った。そこで、1～4年生が5、6年生と一緒に清掃を行い、どのように黙働清掃すればよいかを学ぶという「交流清掃週間」を行ってみることにした。実際は、1、3年生が5年生の兄弟クラス(1組同士など)の各班に1名ずつ、2、4年生が6年生の兄弟クラスに同様に行き、一緒に黙働清掃を行った。1～4年生は、5、6年生が集中して能率よく清掃に取り組む様子から、黙働するには何が大切なのかを学ぶことができた。また、5、6年生は、1～4年生に自分のよいところを見せようと、張り切って清掃を行っていた。見る方、見られる方どちらにもよい効果があった。

(事後の子供の作文より)

- ・ 交りゅうせいそうの時、6年生が本とうにしゃべらずに、そうじをしていたので、びっくりしました。わたしも、見ならって、もくどうせいそうをしたいです。(2年女子)
- ・ 1年生が机を運べなくて困っている時、だまって手伝ってあげるとがんばって清掃してくれました。これからも優しく教えてあげたいです。(5年女子)

なお、この交流清掃の取組は、平成26年度も子供たちの環境委員会の提案で、継続して実践している。

② 年度ごとに子供の実態により活動を見直し、アイデアを加えていった体力づくりの活動

本校では、子供が主体的に考えて体力づくりを行う活動は今まであまり行ってこなかった。そこで、体と心を鍛えるための体力づくりとして、平成24年度には、朝登校したらグラウンドや体育館を走る「朝の風の子ランニング」を体づくり部会の提案で行った。そして、2学期には運動委員会の提案で、ランニングの成果を試す自由参加のマラソン大会を

休み時間に行った。マラソン大会を目指して朝のランニングを中心とした体力づくりに、一生懸命取り組む子供が増えた。反面、ほとんど取り組まない子供も見受けられた。

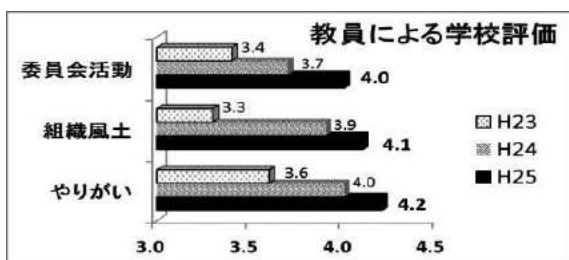
そこで、平成25年度には「体力づくりに取り組む子供100%を目指すにはどうしたらよいか」について「体づくりチーム」で考えた。運動委員会の提案で「パワーアップ週間」を設定し、その期間はいつもの自由参加の朝ランニングだけでなくリフレッシュタイム（長休み）に学校の敷地周りを走る活動も取り入れ、各クラスごとに全員が参加できるように話し合っ取り組むことにした。週間の後には、体力づくりの成果を確かめる「風の子マラソン大会」を低・中・高学年ごとに学校行事として実施し、全員のタイムを記録した記録賞を渡した。一人一人がマラソンコースでの目標タイムを設定して取り組んだクラスや、全員の走った距離の合計を毎日記録していったクラスなど、互いに励まし合いながら主体的に体力づくりに取り組み、100%を達成したクラスがたくさんあった。

(マラソン大会後の子供の作文より)

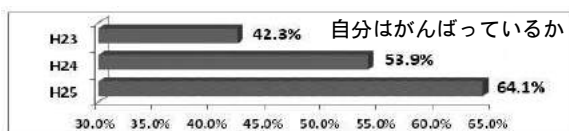
・「マラソン大会まで毎日5周」と目当てを立てて毎日がんばってきました。大会では順位や風などの不安があったけれど不安を吹き飛ばすようにしっかり走れて結果はなかなかいい順でした。毎朝しっかり走ったからだと思います。これからもがんばりたいです。(6年男子)

5 成果と課題

グラフ3 平成23～25年度に行った教員評価 5段階評定



グラフ4 平成23、25年度に行った児童アンケートから



グラフ3、4の結果から、どの項目も平成23年度に比べ平成25年度の値が大きくアップしていることが分かる。また、「自分がんばっている」と答えている子供が50%をこえ、子供たちの自己肯

定感や自尊感情も高まってきていると考えられる。

また、教師による学校評価アンケートでは、委員会活動に対する値が年々アップし、意見やアイデアが生かされ、校務分掌にやりがいを感じるポイントが高くなった。教師一人一人が、学校経営に主体的に関わっていこうという意欲が感じられた。

(1) 実践の成果

- ① 子供の委員会活動と教師のプロジェクトをタイアップし、教師主体ではなく、子供からの提案となるように教師がプロジェクトで話し合い、活動内容に子供たちのアイデアが生きるように活動すると、子供は意欲的に主体的に活動することができる。
- ② 各チームで重点項目を決め、活動を見直したり、プランを改善したりすることによって、子供たちは、新たに関わり合ったりつながりのある活動を行ったりすることができ、活動意欲が高まる。
- ③ 教師からの指導によって学ぶのではなく、上学年の活動の様子から学ぶことによって、下学年は意欲的によさを見付けようとし、上学年はよいところを見せようとし、互いに学び合うことができる。

(2) 残された課題

- ① それぞれの委員会が意欲的に活動してくるようになると、行いたい活動が全体として増え、学校全体が多忙になってくる。それを解消するためには、調整を行う運営委員会や委員長会議などがしっかり機能を果たせるようにしていく必要がある。
- ② 教師の主体性をより伸ばすために、開催が必要な時期にプロジェクトの会議を行えるよう「プロジェクト企画委員会」の機能を高めていく必要がある。

6 終わりに

「元気な風の子プロジェクトチーム」と題して、子供たちと共に特別活動に取り組んできたが、一番成長したのは、連絡調整を行ったり、代表委員会を招集し進めていったりした運営委員会の子供たちであった。自分たちの考えた今年度のスローガンがまだまだ達成できないからと、冬休み中に集まって横断幕を作り、冬休み明けに児童玄関で全校児童に「おめでとう」の挨拶と一緒にスローガンの働きかけを自ら行った。このように、自ら身の回りに主体的に働きかけていく子供を育て、教師が主体的に学校経営に関わっていくために、今後もさらに研究実践を進めていきたい。

自己効力を意図的に強化することによって学ぶ意欲を引き出す授業づくりの研究

岡山県立岡山御津高等学校

校長 浅沼 淳

1 はじめに

学ぶ意欲を研究している鈴木(1996)は、自己効力測定尺度を開発して、学ぶ意欲を引き出す授業づくりの実践を支援している。自己効力(self-efficacy)とは、バンデューラ(1977)が初めて明らかにした期待概念の一つである。「できそうだ」「やったらこうなるはずだ」など、学習課題を自分の知識や能力によってうまく処理できるかどうかという、学習への能力についての自信や信念を示すものである。

本校は、生徒数の減少により平成17年度に普通科高等学校2校を統合して、新たに総合学科高等学校として再編された学校である。岡山市の北部に位置しており、JRを利用すれば岡山市中心部から30分程度で通学できるという交通の便のよいところにある。そのため、1学年4学級の規模であるが、過疎化の進む地元から進学する生徒は約3分の1を占めるだけで、残りの約3分の2は岡山市中心部からの進学者である。しかも、地元の学ぶ意欲の高い生徒は岡山市中心部の高校へ、逆に、岡山市中心部の学ぶ意欲の低い生徒が本校へ進学するという流れができています。従って、本校にとって最も大きな課題は、学ぶ意欲を引き出す授業づくりにあった。

そこで、平成23年度から北海道大学の鈴木教授の協力を得て、自己効力に着目し、学ぶ意欲を引き出す授業づくりの実践に全校挙げて取り組んでいる。

2 研究目的

本校生徒は自己効力を構成する概念のどれに弱点があるかを調査分析して、弱点を意図的に強化できるような授業の在り方を研究並びに実践することによって、学ぶ意欲の向上を図る。

3 研究方法

はじめに、生徒の自己効力に関する実態を自己効力測定尺度によって調査し、結果の分析を行った。それらをもとに、自己効力を構成する概念の中のどれを意図的に強化するのかを明確にした。

次に、通常であれば、抽出した自己効力がどのような授業づくりによって強化されるのかという仮説を立

て、全教科で何らかの教育方法論に基づいて研究を行うのであるが、本研究では一斉に何らかの教育方法論を展開することは避けた。その理由は、高校においては、教科・科目の特色がより一層現れるために全教科が同じ教育方法論では対応しきれないこと、自己効力を強化される方法はいくつも考えられることの二つである。そこで、どのような授業づくりをすれば自己効力が強化できるのかは、各教員が仮説を立てて実践することにした。

どのような授業づくりが自己効力の意図的な強化に効果的であるのかは、PDCA2サイクルの授業研究による授業観察及び年間2回程度の自己効力測定尺度による変容度調査をもとに検証することとした。

4 研究内容

(1) 生徒の自己効力に関する実態の調査分析

自己効力を構成する概念は、表1のとおり上位概念が5つあり、統制感を除いた上位概念にはそれぞれ複数の下位概念がある。それぞれの構成概念ごとの自己効力の状況を調査するために、自己効力測定尺度を利用した。自己効力測定尺度は全58問からなる4件法の質問紙であり、構成概念ごとの自己効力得点の中間値は2.5である。表2に自己効力測定尺度の一部を載せている。

表1 自己効力を構成する概念

上位概念	下位概念
①統制感	
②手続保有感	努力、能力、教師
③メタ認知	自己評価(学習課題の把握、学習状況の把握、自己目標の設定) 自己制御(課題解決のプランニング、課題解決の情報処理)
④社会的関係性	教える役割、問解の期待、身近な友人
⑤学習方略	リハーサル方略、精緻化方略、体制化方略

*ボックス内で表記している概念が自己効力に係るグラフの横軸の項目である。

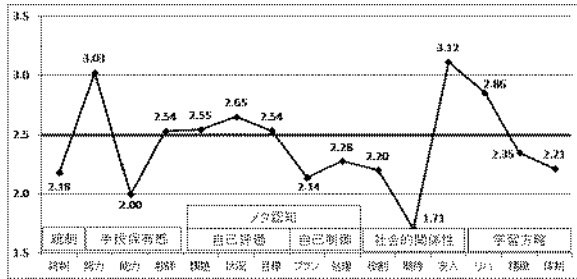
表2 自己効力測定尺度(抜粋)

○に調査する教科の名称が入る。

【選択肢】
ぜったいちがう (1点) だいたいちがう (2点) とまどきそうた (3点) いつもそうた (4点)
1. 私は、集中して○○の授業を受けることができます。
2. がんばらなくても、私は○○の勉強はすぐわかります。
3. 私は、○○の先生に、よくがんばっていると思われています。
4. ○○の成績が悪いとき、私は次に何をすればよいのかがわかります。
5. 私は、○○の勉強のことで、友達に関われることがあります。
⋮

教科ごとに調査を実施して、自己効力得点の平均値

を集計したものがグラフ1であり、調査は平成23年5月に実施、教科数は7、調査延人数は193である。



グラフ1 自己効力得点の平均値

この調査から中間値を下回り、自己効力の低かった概念は、統制感、手段保有感の「能力」、自己制御の「課題解決のプランニング」と「課題解決の情報処理」、社会的関係性の「教える役割」と「周囲の期待」、学習方略の「精緻化方略」と「体制化方略」であることが分かった。

しかし、一度に自己効力の低かった概念すべてを意図的に強化することは難しいと判断をして、手段保有感の「教師」、メタ認知の「自己評価」「自己制御」、社会的関係性について意図的に強化するような授業づくりを工夫・改善することとした。これらの概念の中には中間値を超えているものもあるが、「能力」や「周囲の期待」など相当低い概念項目を直接的に引き上げることは困難と判断されるので、ある程度高いものを更に引き上げることによって、他の概念項目を間接的にではあるが引き上げることができるのではないかと判断したからである。

(2) PDCA 2サイクルの授業研究

通常授業研究は、PDCAサイクルで実施されるが、本校はPDCAを2サイクル行っている。1サイクル目がビデオによる授業研究であり、2サイクル目が公開による授業研究である。即ち、PDCA 2サイクルの授業研究とは、ビデオ授業研究と公開授業研究をセットにしたものである。図1がその概略図である。

大まかな流れは次のとおりである。教科単位で8班(教員数の関係で、芸術と家庭科は同じ班)を編成する。各班から授業を公開する1名を選び、まず、自己効力のどの概念をどのように工夫して強化するのか仮説を立て、授業デザインシートを作成する。その授業をビデオ撮影(教室後ろから固定撮影)したものを同じ班の他の教員が空き時間を利用して視聴する。視聴後、授業評価をフィードバックする。次に、その評価を参考にして公開授業の授業デザインシートを作成する。授業を公開した後、ワークショップ形式による研究協議を行うことによって、自ら立てた仮説の検証を行い、

次の授業づくりに活かすという流れである。

図1 ビデオ授業研究と公開授業研究の概略図

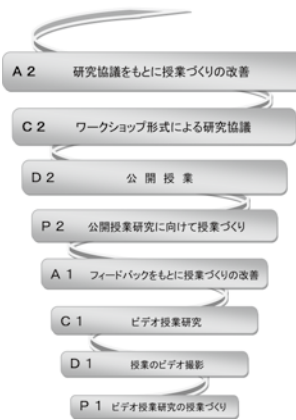
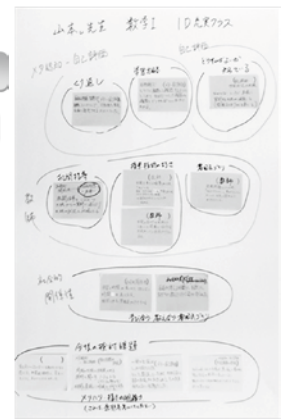


図2 ビデオ授業研究の授業評価



ビデオ授業研究と公開授業研究をセットにした授業研究を5月～6月、10月～11月の2回実施しているので、年間2名の教員が自らの仮説を検証することができる。図2は、ビデオを視聴した教員が2色の付箋にプラスとマイナスの評価を記入したものを集め、A2用紙に自己効力の概念ごとに貼付して作成した授業評価表である。これを授業者にフィードバックする。図3、図4のように、ビデオ授業研究の段階から自己効力を意図的に強化する工夫が色々と実践されている。

図3 パワーポイントの代役として紙芝居



図4 各グループの考えを小型ホワイトボードで発表



ビデオ授業研究の授業評価をフィードバックされた授業者は、公開授業研究に向けて図5のような授業デザインシートを作成する。太枠で囲んでいるところが、この教員の自己効力を意図的に強化する仮説である。

図5 公開授業研究のための授業デザインシート

公開研究授業用「授業デザインシート」平成24年6月12日(火)5限

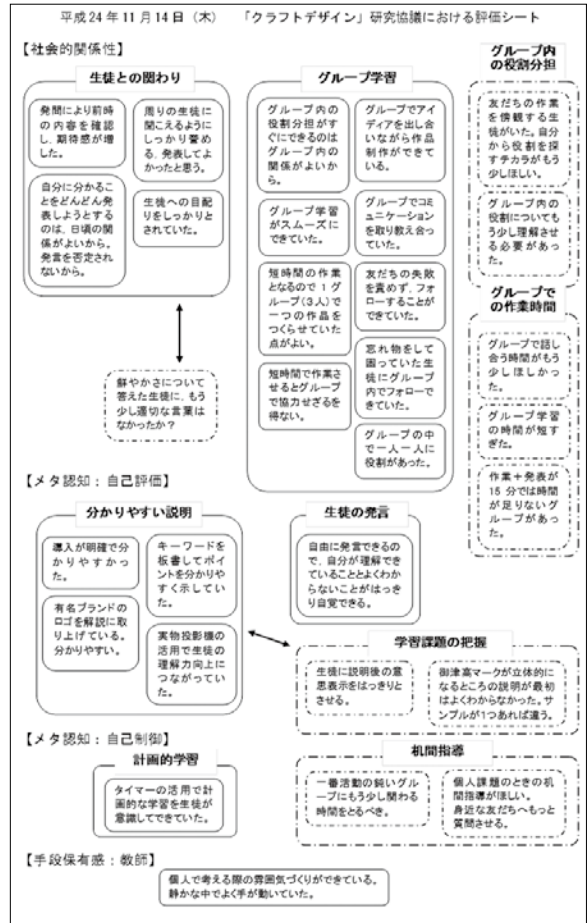
科目・対象	数学Ⅱ 継続 3年選択(発表クラス 22名)
授業者	末澤 安洋
題材名	微分法の応用(関数の最大・最小) (第一学習社 新編 数学Ⅱ 5章 微分積分 2節 関数の最大・最小 P163)
授業のねらい	3次関数の増減を調べることにより、3次関数のグラフをかきことができる。 3次関数のグラフの特徴を利用しながら、定義された範囲における最大値と最小値を求めることができる。
自己評価	生徒とのやりとりや机間指導を通して、生徒からの質問や生徒から発せられた重要なキーワードを拾い上げ、解答までの手助けをする。
自己制御	3次関数のグラフを描くまでの手順を示すことで、解答までの手助けをする。 GRAPE S(グラフ描きソフト)で3次関数のグラフを示し、グラフの最大・最小を直感的に理解させる。(視覚的な支援で理解を深める)
社会的関係性	対象生徒には学力差があるので、丁寧に指導するとともに、最後まであきらめず粘り強く取り組ませる。
授業の流れ	<p>① 教科書 P163 例5 関数 $y = x^3 - 3x^2 + 3(-1 \leq x \leq 4)$ におけるグラフを定義域は気にせずにかかせる。 留 グラフをかきかきまでの手順を確認する。特に増減表をかき際に、生徒に発問しながら、丁寧に指導する。</p> <p>② 定義域 $-1 \leq x \leq 4$ における最大値と最小値を求めさせる。GRAPE Sを用いて最大値と最小値を示す。 留 最初に生徒に最大値と最小値を答えさせる。その後、GRAPE Sを用いて最大値と最小値を示し、解答を確認する。*プロジェクターを利用する際には、教室の環境を考慮して、後ろの生徒にも見えるように配慮を行う。</p> <p>③ 教科書 P163 問7(例5の関数における様々な定義域における最大値と最小値)を答えさせる。 留 ②と同様に、生徒に自分なりの解答まで考えさせた後、GRAPE Sで確認を行う。</p> <p>④ 3次関数のグラフの特徴を示す。(グラフが極値をもつ場合は、極大値(極小値)と同じ値をとるときが存在する。) 留 内容が数学Ⅱの教科書の範囲を超えるため、特徴が成り立っていることを確認することとする。</p> <p>⑤ ④で確認した3次関数のグラフの特徴を利用しながら、問8を解かせる。 留 ①で示した手順でかかせる。増減表をかき際に、生徒に発問をして確認する。</p>

図6が公開授業とその後のワークショップ形式の研究協議である。毎回、近隣大学の教科教育学の専門家に各班一名ずつ参加してもらって指導を受けている。
図6 公開授業とワークショップ形式の研究協議



図7はワークショップ形式の研究協議で作成した評価表の一例である。実線枠がプラス評価、破線枠がマイナス評価である。この評価表から自己効力を意図的に強化する自らの仮説を検証することができ、次時からの指導に役立っている。

図7 研究協議で作成した評価表



2年間の実践を通して、各教科4名の教員が自らの仮説を検証することができ、新たな指導法の工夫・改善へとステップアップしている。その中からどのような工夫・改善が効果的であったかを一覧にしたものが図8である。これは、保存版として全員の教員が共有している。しかし、研究の方法で述べたとおり、Aという教科で効果的であっても、Bという教科ではあまり効果的でない場合もある。この授業研究を終えた教員の声は、次のとおりである。

- 反省するところがたくさんあった。これまで以上に生徒一人ひとりに声を掛けようと思う。そのために机間指導でのコミュニケーションの取り方を勉強したい。
- 教材をもっと作り替える必要性を感じた。何を中心に置かが重要である。

図8 工夫集 (保存版)

自己効力を意図的に強化する工夫集 (保存版)

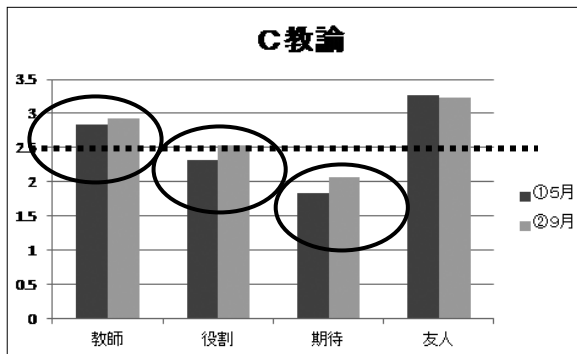
手段保有感-教師		<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒から興味が湧く場面が多く、しかも意欲が高まっている。 ○ 優しく質問しやすい雰囲気とともに、おもしろい話題はさまざまで、生徒とのコミュニケーションがとれて自然に行われている。 ○ 授業のルールを厳格することにより、どの生徒も安心して授業に臨んでいる。 ○ 朝間指導で「お！で着るとな」が一人一人への声掛けに生徒はうれしそうであった。また、一人一人のノートをよく見ていた。 ○ 丁寧な説明が大きい。嫌なく生徒の質問に回答してきていた。 ○ 発表させる様、発表に対するアドバイス、模範答の支援がよかった。
大の強要	学習課題の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝間指導で毎朝も繰り返し、指示が明確で正しいよい生徒への行動ができていた。 ○ 模範、スライドなど資料を揃えることにより各自志せていた。 ○ 知識の整理と要領が揃ってて質問もあつた。それをうまく回答して、嫌なく受け取りやすい教材を工夫し、「なぜ」を大切に説明していた。 ○ 生徒は興味を持ちやすい丁寧な授業であった。 ○ 導入の体験で生徒を驚かせ、生徒実践も分かりやすいように準備していきやすく出来ていた。この生徒も結果まで理解できていた。 ○ 板書がとてもしっかりと整理されていた。
	学習状況の把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝間指導の板書が丁寧で、よく整理して動きノートも取れていた。 ○ つまみでいる生徒も丁寧な説明ができていた。 ○ 中テストの解説をその場で選んでいく。
	自己目標の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○ 模範をきき、積極的に発表させていた。 ○ 発表の手順を示す工夫がなされ、進捗がスムーズであった。生徒も意欲をもって取り組んでいた。
	課題解決のプランニング	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題を教えることにより、よく説明しつけていた。 ○ 中テストを準備することにより、準備をさせていた。 ○ 中テストに関してルーティンがつかっているのがよく効力していた。 ○ 模範として板書するといふ活動に思い込まれると先生や友人に質問をしていた。 ○ 授業のルールとして「まだに聞きたいこと」を入れて理解していた。
社会的関係性	課題解決の積極的対応	<ul style="list-style-type: none"> ○ 模範として板書することにより、よく説明しつけていた。 ○ 模範として板書することにより、準備をさせていた。 ○ 中テストに関してルーティンがつかっているのがよく効力していた。 ○ 模範として板書するといふ活動に思い込まれると先生や友人に質問をしていた。 ○ 授業のルールとして「まだに聞きたいこと」を入れて理解していた。
	教える態度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 模範として板書することにより、よく説明しつけていた。 ○ 模範として板書することにより、準備をさせていた。 ○ 中テストに関してルーティンがつかっているのがよく効力していた。 ○ 模範として板書するといふ活動に思い込まれると先生や友人に質問をしていた。 ○ 授業のルールとして「まだに聞きたいこと」を入れて理解していた。
	期待の期待	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝間指導で一人一人の発表を丁寧にして、また、声掛けが優しく親身であった。生徒は授業に安心して参加していた。 ○ 資料に発表すると先生に積極的に尋ねていた。 ○ グループ学習なので、友人と相談しながら実践できていた。 ○ 分からないと意欲的に聞くことが出来るクラスの雰囲気があった。
	教師な友人	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝間指導で一人一人の発表を丁寧にして、また、声掛けが優しく親身であった。生徒は授業に安心して参加していた。 ○ 資料に発表すると先生に積極的に尋ねていた。 ○ グループ学習なので、友人と相談しながら実践できていた。 ○ 分からないと意欲的に聞くことが出来るクラスの雰囲気があった。

(3) 自己効力測定尺度による変容度調査

自己効力測定尺度による調査を年間2回実施して、生徒の変容を自らの仮説の検証に役立てている。

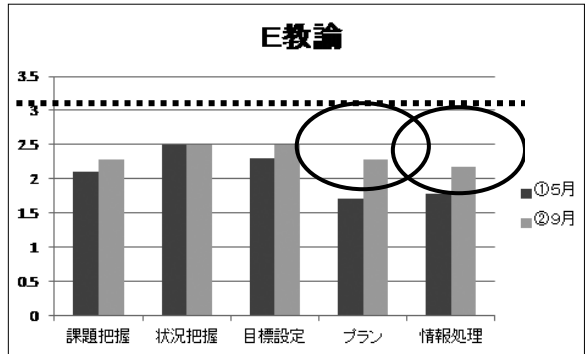
1回目：平成24年5月 2回目：平成24年10月

手段保有感(教師) 社会的関係性



(分析)「手段保有感(教師)」が上昇している(しかも中間値を超えて)ことから、教師の働きかけが生徒のやる気に繋がっていることが分かる。教師が生徒を上手に誉めて伸ばしていることが「期待」の上昇からも分かるが、中間値に達していないので周囲からの期待が薄いと感じている生徒はまだ多いと考えられる。

メタ認知(自己評価・自己制御)



(分析) 全体的にメタ認知が上昇しているが、中間値に届いていないために全体の意識はまだ低い状態にある、しかし、自己制御(プラン、情報処理)の値が大きく上昇していることから、課題を自らのチカラで解決しなければいけないという意識が高まっていることが分かる。これは注目される結果である。

なお、これらは受講者の平均値であるが、大切なことは個々の生徒の自己効力の強みや弱みを把握して、授業の中で柔軟に指導・対応できることである。そのために、調査ごとに受講者一人一人の自己効力の得点を指導者にフィードバックしている。

5 まとめ

自己効力をキーワードに授業づくりの研究を行ってきたが、自己効力を強化する即効性のある方法は見つからない。今回の研究・調査で分かったことは、僅かに、手段保有感の教師の得点が高い場合、メタ認知が高くなる傾向にあること、協同学習的な授業展開をすれば社会的関係性に効果が現れることである。手段保有感の教師が高得点になるためには何をしなければいいのか、新たな教育方法論を導入するためには何をしなければいいのかを考えると、当然ではあるが、やはり教員の意識改革に到達する。その意味から考えると、自己効力測定尺度による調査や授業研究による授業観察を繰り返すことによって、教員に生徒一人一人の自己効力を意図的に強化する方法を工夫・改善する意識が高まったことは大きな成果である。

6 引用文献

- ・鈴木 誠 2002 『学ぶ意欲の処方箋・やる気を引き出す18の視点』 東洋館出版社
- ・鈴木 誠 2008 『意欲を引き出す授業デザイン—人をやる気にさせるには何が必要か—』 東洋館出版社
- ・鈴木 誠 2012 『「ボクにもできる」がやる気を引き出す—学ぶ意欲を捉え、伸ばすための処方箋』 同

「仁尾小防災リーダー」誕生までの4年間

～防災感覚と実践力は、小学校時代に育てる～

香川県三豊市立仁尾小学校

校長 山下 昌茂

1 はじめに

東日本大震災から3年が経つ。全国の人々があれほど辛い思いをしたというのに、日本はもう次の巨大地震の心配をしなくてはならない時期に来ている。

25年後・・・その前後に、同様の巨大地震の発生が高い確率で予想されている。25年後というと、今、目の前の子どもたちが35歳前後の年になる。結婚をして家庭をもち、小学校に通うくらいの子がいるだろうか。おそらく両親は高齢で、家族では中心となり、責任ある立場にあるだろう。また、地域においても、働き手の中心となって活躍している一番遅く、一番元気の時期（年齢）となっている頃・・・となる。

そんな状況に置かれる目の前の子どもたちの将来を思うとき、感覚豊かなこの時期にこそ、指導しておくべきことが2つあると考える。

1つは、地震による被害を最小限に減らしていく減災の知識。自分を含め、家族の安全・命を守る知恵である。2つ目は、被害にあった近所や地域の人までも救おうとする、他者を思う奉仕の心の高まり(ボランティア精神の向上)と実践力である。このような知識と心・実践力、特に、後者の心・実践力については、大人になってから育てることは難しく、子どもの頃に培うべき大切な感覚(資質・能力)であり、禁煙教育・性教育等のような未来教育の1つと考えている。

2 初回となる大規模訓練の実施

上述のようなことから私は、前任校の豊中町で校長になった3年目の平成22年度(今から4年前)に、学校行事として、地震に対する大規模な地域防災訓練を実施した。地域や、地域外の自主防災組織等の賛同・協力もあり、1回目であったが、児童数120名を含む450名参加の充実したものとなった。

そして平成23年度、仁尾町の本校へ赴任した。本町は、海と山に面しており、公共施設が多く位置する中心地においては海拔が低く、また、山沿いにおいても土砂崩れの危険性が高いとされる地域である。前任校以上に地域をあげての防災訓練の必要性の高い校区であると感じるが、これまでにその実態は無かった。

3 平成23年度の実践(仁尾小勤務1年目)

赴任時、既に作成されていた本校年間計画には、2月5日が日曜参観日とあり、親子の交流活動が予定されていた。私は、PTAや本校教職員に、地理的な危険性も含め、防災訓練の早急な実施の必要性を訴えた。そして、予定されていた行事内容の変更の了解を得ることができた。

さらにその後、地元の社協(地域福祉計画実行委員会)の定期会合に飛び入り参加させてもらいながら、学校が防災訓練を実施することを発信し、それに伴う地域の理解と支援を要望した。

寒い時期ではあったが、その当日、参加者約800名(児童数330名を含む)の地域防災訓練を実施することができた。それは、前任校勤務時代から支援をいただいていた丸亀市川西地区自主防災会や、地元の社協・各種関係団体等の力によることが大きい。

とにかく、本校区の地域防災訓練のスタートの年となった。嬉しく、価値あることと考える。

平成24年1月27日 三豊市立仁尾小学校 学校だより NO. 101 ＜文責：山下＞	
日曜参観日「防災訓練」の概要	
登校	○ 児童は軽く小さなナップサック、又は、手さげ袋等に1時間目の準備と、おにぎりをいれて登校(おにぎり・家族が持参でも可。無くても可。) ○ 服装は、冬の体操服の上に防寒用の服を着て登校(寒くないように)
8:00 朝の活動	○ 児童は児童玄関で活動班を確認し、色テープを腕に貼付 ○ 保護者は上靴(おにぎり)を持参し、体育館で受付(上靴なければ学校スリッパ) ○ 保護者は体育館で自分の活動班を確認し、色テープを腕に貼付
8:20 参観授業	○ 児童は算数を中心とした授業で力を発揮(各教室) ○ 保護者は参観(教室に入って静かに参観・授業終了までにトイレ済)
9:05 訓練前指導	○ 児童はトイレを済ませ、下靴(おにぎり)等の袋を準備して体育館 ○ 保護者は、教室に居る我が子で済ませ学年下の子の側に待って待機
9:20 地震発生	○ 児童は非常の放送指示で机下にもぐる ○ 保護者は我が子の側でしゃがみ込む(担任の指示に従う)
9:21 避難開始	○ 児童は廊下に並び、親と共に決められたコースを移動して体育館に避難 ○ 集合場所の体育館では、来た順に活動班毎に整列(土足・無きで・安全に)
9:30 開会式・訓詞	○ 体育館に避難した隊形で研修(川西地区自主防災会々長 岩崎氏 講話) ○ おにぎり・上靴等の荷物を所定の場所にかため置く(家族毎に1袋で)
10:20 訓練	○ 班毎のプラカードを目印に、10種の中の第1訓練場所に集合(運動場) ○ 一声の号令により、10分毎に時計回りに移動し、全内容を体験する ○ 1つの活動班が7名前後の大勢であるため、指導者の指示に従う ○ 卒業する6年児童を優先した体験とする(全員の身体は健康、見学も別班。)
12:15 炊き出し昼食	○ 各班で食事場所を決め、班員を集合させる(広場・体育館等) ○ 班毎の代表6名が、豚汁を受け取りに行く(つぎ分けた食卓で昼食を取る) ○ 配膳して食事開始(体育館にあるおにぎりを取る・豚汁だけの昼食も可) ○ 指示に従って片づけまで終われば、自由に休憩
*昼食の状況による午後からの時刻変更有り(放送連絡に注意)	
13:00 学習発表	○ 最初に体育館に避難した隊形で研修(6年代表者による防災学習報告)
13:30 閉会式	○ 講話・挨拶 ○ 閉会式終了後、児童は先に自治会別教室に移動。保護者は一旦待機。
13:40 引取訓練	○ 保護者は児童が待つ自治会別教室に行き、我が子を引取った後、下校 ○ 6年は引き続き学習発表会があるため、6年在籍家族優先の引取訓練
*6年保護者:学習発表会 *6年児童・PTA役員:片づけ手伝い *裏面参照	
総数750名を超える参加者となりました。また、初の訓練でもあるため混乱が予想されます。さらに、当日雨天の場合は、案内と異なる動きになり、さらなる混乱が予想されます。主旨を理解の上、指示に従ってください。皆で一緒に考える意識をもち、子どもの手本として行動してください。駐車場は確保できません。上靴持参の呼びかけは、スリッパでの移動事故防止のためです。*多くの不便が予想されますが、御協力をお願いします。	

<実践内容を学校だよりで発信>



(1) 訓練の長期的展望

川西地区自主防災会の多大な協力によって訓練は成立したが、他地域に何時までも頼ることはできない。いや、頼ってはいけないと考えた。そこで、本実践は次のように展望した。

○ 計画的に地元の自立へとつなぐ

1年目は、大勢が参加できる休日に計画し、訓練内容の全て（8種）を全員が体験できるようにする。

2年目・3年目は、参加者をA Bの2班に分け、種目を1年目の半分にして、2年間かけてローテーションしながら丁寧に体験できるようにする。（4種×2）

4年目からは、他地域の組織による指導に頼らず、地元のリーダー主体で実施できるようにする。

(2) 訓練のポイント

大人主体の活動に子供が参加する形をとると、肝心の子供が客体となり、感覚を育てるというねらいが達成しにくい。そのため、子供が主体となる以下の3点を意識して計画することとした。

○ 学校行事として位置付ける（主体は学校）

地域行事は、大人の活動に子供が参加する活動になりやすい。最近の子ども会活動であっても、親が準備したものをただ食べるだけの状況が目につく。学校主体として位置付け、教育活動の明確なねらいのもとで、子供が主役の活動を計画する。

○ 子どもを先頭に活動させる

集合・移動・体験活動等の全て、子どもを先頭にする。特に移動場面においては、大人を先頭にする、列を作らない・歩く速さが一定しない・私語が増える等の問題が起こる。低学年であろうと、教育されている子どもたちが、素早く無言で整列する・整然と列を組んで移動する・真剣に活動する姿等を見ると、大人も真似るのである。それは、我が子の成長に喜びを感じ取るのと同時に、親として、子どもの手本でありたいと意識するからである。案の定、私語や携帯電話をいじる親の姿をほとんど見ない活動となった。

○ 子どもが発信・提案する場を位置付ける

例えば、教師が喫煙している父親に、「健康に悪いから禁煙してください」と言うと、静いになるだろう。しかし、学校での禁煙教育を受けた子どもが、大切な父親の健康を思い、家に帰って「タバコは健康に悪いということをお父さんに学んだよ。お父さんの命が大切だから、お父さんに何時までも元気でいて欲しいからタバコを止めて」と言うと、どうだろう。私の過去の実践でも父親の心は動いた。これは、我が子からの訴えは、成長を感じたり、自分のことを思ってくれる愛情を感じたりするからと考えられる。またこれは同時に、学校での教育実践のアピール・発信にもなる。

防災教育も同様に、子どもの口（言動）を通して、家庭・地域に発信させ、地域全体を変えようとした。



<安全な避難経路と避難先を発信・提案する>

6年生の総合学習で、災害時の避難先アンケートを実施。その結果、本地区の津波予測は4mであったが、それよりも標高が低い公共施設を選択した家庭が多いことが判明。子どもの口から、その見直しと適切な避難施設を提案。



<安全な避難経路と避難先を調べる子ども>

4 平成24年度の実践（仁尾小勤務2年目）

11月18日（金）に実施した。あえて平日に開催したが、630名もの参加があった。訓練1年目は、1種8分間で全種目体験のローテーションだったが、2年目は全体を2班に分け、半分の種目にして15分間ずつゆとりを持って体験するものである。

そして、今回の訓練においても、上述した3つのポイントを意識し、子ども（学校）が主体となるよう企画・運営した。また、本年度の6年生の発信のねらいを「我が家から自治会（近所）へと、家具転倒防止対策の実践を広げる」こととした。



(1) 家具転倒防止対策の実践と実態

6年生は、地域へと「家具転倒防止対策の実践」を呼びかけるため、実態を調査することとなった。すると、6年生の家においては、4月の時点で14%しか実践していないことが明らかになった。

呼びかける当事者でありながら、ほとんど実践できていなかったことが課題となり、6年担任と子どもたちの取組が加速した。＜加速①＞結果として、8ヶ月後の1月には84%まで改善した。そしてその成果を学校だよりで紹介し、ホームページにも掲載した。

(2) 取組の加速②—「ためしてガッテン」の取材

国の防災対策を推進する関係者は悩んでいた。それは、いくら地震の恐さを伝えても、いくら災害による悲惨な情報を伝えても、我が国の各家庭における防災対策が進まないことである。心は動くが、行動につながらないのである。

そんな時に、本校のホームページが、NHKテレビ「ためしてガッテン」のプロデューサーの目に止まった。家具転倒防止対策が、1年内に14%から84%まで改善したというデータである。そして、そのことで取材を受けることとした。



平成24年12月2日
三豊市立仁尾小学校
学校だより NO. 107(227) <文責：山下昌茂>

「ためしてガッテン」取材

ご覧になりましたか？ 仁尾小学校区が、我が国で一番防災実践が進んだ地域というイメージで広まりました。現実には、まだまだ…という状態だと思っています。多少オーバーな取り上げをされてしまいましたが、この放送をいい機会ととらえ、冬休みに実践が進んで欲しいと願います。

NHKのプロデューサーに「普通のことをしているのに、なぜ仁尾なんですか？」と聞きました。すると、「全国では、普通ではありません。どこでも訓練はしていますが、ねらいが見えませんが、家庭や地域まで変わらない訓練になっているのです。」と書いていただきました。

さらに後日、ある方から「孫に言われてテレビを見ました。素晴らしい教育ですね」と電話をいただきました。学校教育を応援していただける人の存在…この存在が活動のエネルギーになります。

学校で学んだ子供が、大切な親（祖親）の健康を思う。→ 訓練、大切な親が子の命と健康に気付く。

本日、校長からの宿題を出しました。内容は、「家具を固定する」です。各家庭では、様々な環境があろうと思いますが、1か所でもいいですから、「家族の命を守るための動き」をしてください。子供と一緒に考えながら、家具が倒れないような工夫をお願いします。大切な子供の命を救うための最大の確率を見つけてあげてください。

(2) 取組の加速③—「NHK香川ニュース」の取材

実践84%は、6年生だけの実態である。「ためしてガッテン」の放映を機に、校長から全校生に、家具固定を冬休みの宿題として与えた。これには、次のような4つの意図を含んでいる。

平成25年1月10日
三豊市立仁尾小学校
学校だより NO. 111(231) <文責：山下昌茂>

NHKニュース番組に出演！

★1月16日（水）18:00～「ゆららがわ」18:30頃
★1月22日（火）7:45～「おはよう香川」

「ためしてガッテン」で取り上げてもらった反響の大きさを感えています。北海道の防災アドバイザーの方からの激励とお礼の手紙もいただきました。

そして今回、冬休みの宿題として「校長チャレンジ」を課したことによる成果に興味を持っていただいたNHKの取材を受けました。この内容は、2回に渡って放送される予定です。

校長チャレンジによる成果・・・アンケートから

防災対策したの？

実施した理由	実施内容
<ul style="list-style-type: none"> 家具の固定 家具の転倒防止 家具の転倒防止 その他 	<ul style="list-style-type: none"> 家具の固定 家具の転倒防止 家具の転倒防止 その他

アンケート結果を元に指導

できなかった理由？

できなかった理由
<ul style="list-style-type: none"> 家具の固定 家具の転倒防止 家具の転倒防止 その他

してみよう？

してみよう理由
<ul style="list-style-type: none"> 家具の固定 家具の転倒防止 家具の転倒防止 その他

放送者の声

ためしてガッテンの放送後、「うちはできてないやん、しよ力と子供に言われたのがきっかけです。面倒かと思いましたが、我が子や家族を本当に守れるのかと考えると恐ろしくなりました。やってみると、そんなに手間もかからず、何もしてなかった阿婆より安心して過ごせています。やることはやっておく心安です。「備えあれば憂いなし」

- 防災が進んでいる仁尾地域と報道されたことに対して責任意識を高め、実態をそれに近づける。
- 冬休み前には、各家庭で大掃除が行われるため、家具防止対策のチャンスが生まれる。
- 子どもの意識が高まり、先頭に立って自らが動くすると、必ず家族の応援が生まれる。
- 命を守ることに関わる取組は、ある程度、強制的に指示（宿題）することが必要と考える。

そして、冬休み明けのその結果・成果に興味を持ったNHKテレビ局の取材が続くこととなった。半数近くの児童の家庭で、家具の固定が進んだからである。

また、地域の意識を改善するには、マスコミ報道と連携することが効果的と考え、学校だよりと通じてそのことを発信し続けることとした。



5 平成25 年度の実践（仁尾小勤務 3 年目）

10 月30 日（水）に実施した。新たに幼稚園保護者の参加要望もあり、660 名の参加があった。昨年度、本地区に町づくり推進隊が発足し、その中に安全対策部が位置付いたため、その組織（地域）と連携しながらの訓練を始めることができた。

本年度の 6 年生の発信のねらいは「3 年間の防災学習の歩み紹介と、新たな土砂災害への対策」である。これまで、海からの視点が中心であったが、土砂災害の危険地域として、本校の一部が加わったためである。

海・山、そして家屋の倒壊等と、様々な視点での防災対策の必要性を子ども主体で発信できた。



6 平成26 年度の実践（仁尾小勤務 4 年目）

新体育館が落成した。この建設過程において、防災備品の倉庫を備えるものとしたという私の強い要望が叶った。そのため、避難場所として指定されているこの体育館完成の機会を生かした取組を考えた。

それは、「仁尾小子ども防災リーダー」の結成である。昨年度までは、学校行事の中で学校側が設定したステージに子どもを立たせるものであった。今回はさらに一步前進させ、総合的な学習の時間の中で、個々の子どもがチームを組んでのより主体となる取組である。そしてその内容は、避難場所運営のシミュレーションである。例えば、①備品倉庫には、何をどれだけ保管させれば良いのか ②毛布はアリーナにどのように配置させれば良いのか ③自治会毎にどう案内すれば良いのか ④何人収容が可能なのか ⑤受付の混雑を防ぐためには… ⑥1 日のスケジュールは… ⑦ペットの扱いは… ⑧表示は…？ 等の学びである。

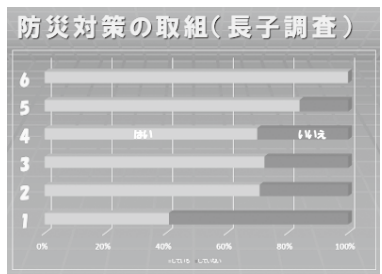
避難場所運営体験者から指導を受け、地域の防災組織から「仁尾小子ども防災リーダー」としての委嘱状と特注のリーダー腕章を与えられ、責任の重みを感じる当事者としての学びが継続されることとなった。



7 おわりに

右グラフは、家具転倒防止対策の取組状況である。

ここから、卒業学年に向けての継続的な取組の成果



が見て取れる。また、意識調査からは、防災対策を実践することによって、安心感を抱きながらの生活に改善されていることがうかがえた。

確かな学力を身につけた生徒の育成

～21 世紀にふさわしい I C T 環境を活かした学び合う授業づくりをとおして～

熊本県阿蘇郡高森町立高森中学校

校長 古庄 泰則

1 主題設定の理由

(1) 急速な情報化の進展と地域の願いから

インターネットがグローバルな情報通信基盤となり、パソコンや携帯電話などが広く個人にも普及し、日常生活が大きく変化している。このように経済・社会、生活・文化のあらゆる場面で情報化が進展する中で、大量の情報の中から取捨選択をしたり、情報の表現やコミュニケーションの効果的な手段としてコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用したりする能力が求められるようになってきている。

このような中、高森町では、平成24年3月「高森に誇りを持ち、夢を抱き、元気の出る教育」をスローガンに「高森町新教育プラン」が策定された。重点施策は「コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育、ふるさと教育」であり、その施策の一環として I C T 環境の整備が段階的に進んでいる。具体的には、普通教室及び特別教室に電子黒板と実物投影機が配備され、各教科デジタル教科書が導入されている。また、校内無線 L A N が構築されており、本年度はタブレット P C 100 台が新たに導入された。校務支援システムや教務支援システムにより、校務の情報化も進んでいる。これら I C T 環境の整備・充実は、当然のことながら町当局の財政的な支援のもと行われている。町当局においては、本校における I C T 教育の視察はもとより町議会として I C T 教育の先進地視察を行うなど、財政的な支援にとどまらず学校における I C T 教育に理解をいただくとともに、その成果に期待をされている。

(2) 学校・生徒の実態とこれまでの研究経過から

本校は、8 学級(特別支援学級 2 を含む)、生徒数 148 名の学校である。「郷土を愛し、認め合い、励まし合い、高め合い、未来を拓く生徒の育成」の学校教育目標のもと、「共有化・教材化・焦点化」を学校経営のキーワードに、「確かな学力、豊かな心、たくましい身体」の育成を重要な柱として教育活動を展開している。

本校の生徒は、豊かな自然に囲まれて育ち、とても

素直で明るい生徒が多い。学校行事や生徒会活動、部活動などでも、学年の枠にとらわれることなく仲良く協力しながら活動しており、楽しい学校生活を送っている。また、校務の情報化により生み出された時間を生徒の主体的な活動を促すために活用することで、生徒会 T V の取組(各教室に配備されている大型テレビや電子黒板を活用した生徒会執行部による校内放送)や昼休みカップ(全校生徒の親睦を図ることを目的に、各学級、学年、男女の枠を越えてチームを編成し、代議員会が企画・運営する体育的・文化的活動で職員チームや生徒、職員の混合チームも参加)の開催など、生徒の主体的な活動が活発に行われるようになってきた。

本校は、平成24年度から3年間「産学官による普通教室における I C T 活用実証研究協力校」、平成25・26年度、熊本県教育委員会指定「I C T を活用した『未来の学校』創造プロジェクト推進事業研究推進校」、加えて平成26年度は、文部科学省から「I C T を活用した教育の推進に資する実証事業」の委託事業を受け、I C T 活用による授業実践をとおして知識・技能の習得と、自ら学び考える力の育成をバランスよく進めるべく研究に取り組んでいる。最初はとにかく使ってみようというところからのスタートであったが、I C T そのものが生徒の学力を向上させるのではなく、I C T 活用が教員の指導力に組み込まれることによって生徒の学力向上につながる。そこで、「どの場面で、どの機器を、どんな目的で」といった視点から、学習過程に I C T 活用を位置づける研究を進めた。

しかしながら、過去3年間の全国学力・学習状況調査や N R T 式学力検査の総合学力の値(表1)及び熊本県学力調査(知識や技能の到達度だけでなく、自ら学ぶ意欲や思考・判断力、表現力までを含めた到達度を客観的に把握できる熊本県が独自に開発している評価問題で、平成14年度から実施)の「知識」「活用」における県平均を100とした本校の値(表2)は、私たちの期待を大きく下回っている。これらの結果から、特に次の2点を大きな課題ととらえた。

- ① 標準学力検査において、学年が上がるにつれて総合学力が下がっていること。また、熊本県学力調査において、前学年の達成率を下回る項目が多く、学年が上がるにつれ達成率が下降する傾向が見られること。
- ② 全国学力・学習状況調査や熊本県学力調査において、「知識」と「活用」を比較した場合、全体的に「知識」に課題があること。

これらの課題解決をめざし、21世紀にふさわしいICT環境を活かして生徒に確かな学力を身につけさせることが本校職員の願いであり、かつ、そのために授業力を向上させることが私たち自身の責任である。

	1年	2年	3年
H23年度	51.4	48.8	47.8
H24年度	52.1	49.7	49.4
H25年度	53.7	50.2	47.8

教科	知	活	1年	2年	3年
国語	知識		102.7	122	97.1
	活用		129.8	101.1	78.9
社会	知識		87	94.3	101.9
	活用		112.5	112.5	129.1
数学	知識		94.9	94.9	87.7
	活用		116.6	116.6	103.7
理科	知識		100.1	111.3	85.6
	活用		99.6	114.8	90.4
英語	知識		100.2	104.9	85.8
	活用		108.9	171.1	100.5

2 研究の仮説

【仮説1】基礎基本の確実な習得

目的を明確にしたICT活用を学習過程に位置づけることで、本時のめあての把握や学習内容の理解が容易になり、基礎基本の確実な習得が図られるのではないか。

【仮説2】思考力・表現力の育成

ICT活用による互いに学び合う学習活動を各教科の言語活動に位置づけることで、一人一人の学びは深められたり広げられたりし、思考力・表現力の育成が図られるのではないか。

【仮説3】教師の授業力の向上

教師のICT活用力を充実させることで、教師の授業力は向上し、生徒の基礎基本の確実な習得や思考力・表現力の育成が図られるのではないか。

3 研究の実際

(1) 仮説1について

仮説1は、学習過程に目的を明確にしたICT活用を位置づけることで、本時のめあての把握や学習内容の理解を深め、基礎基本の確実な習得をめざすことをねらいとしている。ここでは、美術科の授業を紹介す

る。

- ① 題材名「文様 飾りの小宇宙」(光村図書 1年)
- ② 目的を明確にしたICT活用



【写真1】

・教師の活用
導入の課題提示において、デジタルテレビで実際に作業を行いながら、作業手順を分かりやすく説明することで本時の課題に対して理解を深めさせる。(写真1)



【写真2】

・生徒の活用
タブレットPCを活用して作品制作を行い、班で画面を見ながら意見交換をし、配色の変更などを行うことで、色彩などによる表現の技能を高める。(写真2)

③ 本時の目標

友達からの意見を参考に配色を工夫し、テーマがよく分かる文様を作ることができる。

④ 教師が実感したICT活用の効果と課題

タブレットPCを使って作品を作るというこれまでの経験したことがないものへの興味関心が高く、終始意欲的に学習に取り組むことができた。また、彩色やアイデアを考えることが苦手な生徒も作品を完成させる達成感を味わうことができた。本時の授業では、その場で瞬時に色や形を変更できるというタブレットPCの特長を生かし話し合い活動を行ったことで、お互いに根拠を持って意見交換を行うことができ、それぞれの作品を練り上げることにつながった。

課題として、1年生ということもあり、タブレットPCの使い方に時間がかかった。今後、他教科での活用も含め、使い方に慣れていくことが必要である。

(2) 仮説2について

仮説2は、ICT活用による言語活動での学び合いをとおして、思考力・表現力の育成をめざすことをねらいとしている。ここでは、国語科の授業を紹介する。

① 題材名「気になる『あの人』を探ろう」(光村図書 2年)

② 単元を貫く言語活動とそのねらい

単元を貫く言語活動を「高森中学校に掲示するのに

「ふさわしい新聞を作ろう」と設定することによって、「誰が見るのか」という相手意識や、「ふさわしいということから、どういう記事を載せればよいのか」という目的意識を強く持たせる。(写真3)

③ ICT活用のポイント(言語活動への位置づけ)

タブレットPCと共同学習支援ソフトウェアを用いて意見を交流することで、複数人が作品を見たり、付箋に意見を書き込んだりする活動を同時に行わせ、見直したり改善したりする作業を効率よく進めさせる。(写真4・5)



【写真3】本時のめあてや新聞を見直す際の視点は板書や掲示をすることで、身につけさせたい技能を意識させる。



【写真4】最初は個人で、他の班の作品がねらいにそった新聞になっているかを検討し、気づいたことをタブレットPC上の付箋に記入する。



【写真5】他の班の生徒たちが気づいたことをタブレットPC上の付箋に記入し、タブレットPCからたくさんの付箋が左側の電子黒板に画面転送された。修正したものを右側の電子黒板に提示し、「ねらいにそった新聞」にするためにどのような点を修正したのかを

発表している。

④ 本時の目標

新聞の構成や展開、表現の仕方について、他のグループへ根拠を挙げてアドバイスをし、また、他のグループからもらったアドバイスをもとに、伝えたいことがより伝わるような新聞になるように見直し、改善することができる。

⑤ 教師が実感したICT活用の効果と課題

ICT活用により、複数人で同じシートを編集することができ効率的に作業を進めることができた。また、紙媒体では難しい修正や再編集などの作業を容易に行

うことができた。

電子黒板上に複数枚の資料を提示した場合に画面上に残せるものは一つであるため、板書として残す必要があるかどうかを事前にしっかりと考えておく必要がある。

(3) 仮説3について

仮説3は、私たち教職員のICT活用力を充実させ、授業力の向上をめざす取組である。ICT習熟のための研修や学習支援ソフトウェアの研修では外部講師を招聘し、専門家の指導による演習などを行った。



【写真6】

特に言語活動を充実させるために、外部講師を招聘し、学習支援ソフトウェア(共同学習支援ソフト)の研修に力を入れた。(写真6)

本年度も、授業づくりの視点を「ICT活用のポイント」におき、「事前研」を中心とした授業づくりを行い、ICT活用の学習活動では必ず模擬授業を実施しICT活用の有効性を全員で研究した。(写真7)



【写真7 音楽科の模擬授業】

CTを活用した『未来の学校』創造プロジェクト推進事業研究推進校』としての検証授業やNIE公開セミナーでの研究授業、視察訪問時の参観授業など各教科で多くの実践を行ってきた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

① 各仮説から

仮説1では、「課題提示」の場面で、電子黒板等を活用し、視覚に訴える等の工夫により、明確に課題を把握させることができた。また、「知識の定着や技能の習熟を図る」場面で、タブレットPCを活用することにより、習熟度に応じた学習の個別化が図られ、知識・技能の定着や習熟がみられた。

仮説2では、学び合う場面(言語活動)において、タブレットPCや共同学習支援ソフトウェアの活用により、考えの共有・交流が生まれた。また、電子黒板

やデジタル教科書の活用により、思考の可視化や意見の共有化が図られ、一人一人の学びに深まりや広がりが見られた。

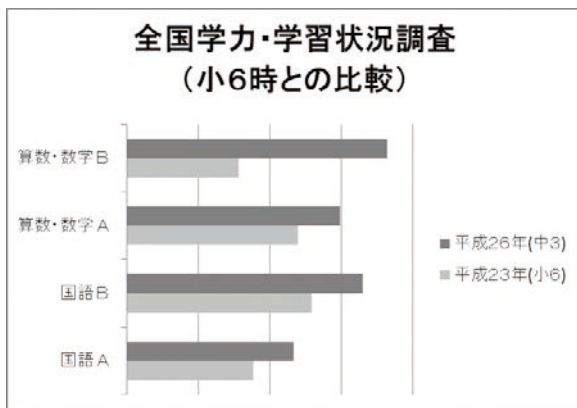
仮説3では、事前研においてICT活用の場面では必ず模擬授業を行うことにより、教師のICT活用力が充実するとともに、発問や板書等を含めた授業力の向上が見られた。

② 全国学力・学習状況調査から

生徒質問紙調査の授業に関する部分を生徒による授業評価ととらえ、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」の合計の値（％）を、本校の昨年度の値及び今年度全国平均の値と比較し検証した(表3)。

項目	H26	前年比	全国比
本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていたと思いますか。	93.4	+33.0	+46.9
自分の考えを発表する機会が与えられていたと思いますか。	93.4	+4.6	+12.3
生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか。	86.7	+13.3	+11.4
目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか。	93.3	+8.8	+21.8
学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。	71.1	+13.3	+17.8

この結果から分かるように、生徒の立場からも、事前研を中心とした本校の研究が分かりやすい授業につながっていると言える。



また、上のグラフは、全国学力・学習状況調査の結果を同じ集団（現中3が小6時の全国学力・学習状況調査結果）で比較したものである。すべての種目で確実に伸びていることが分かる。特に、知識の活用力を見るB問題において顕著な伸びが見られる。また、すべての種目で全国平均を上回ることができた。

(2) 課題

① 各仮説から

教師が、授業のねらいや場面に応じた最適なICT活用を選択できるように、引き続き、日常的な授業実践の中で、授業力の向上に努めていかななくてはならない。特に、タブレットPCについては、学習場面に応じた使い分け（一人一台、班で一台、使わない等）を研究していく必要がある。

② 全国学力・学習状況調査から

すべての種目で全国平均は上回っているものの、基礎的な知識・技能の定着の伸びが、活用力の伸びに比べて緩やかである。また、家庭学習に関して、生徒質問紙調査から「家庭学習の時間」「自分で計画を立てる」「授業の予習や復習を行う」などの項目において、本校の昨年度の値や今年度全国平均の値を下回っている。これらのことから、家庭学習に関する実効性のある対策を講じることで、基礎的な知識・技能のさらなる定着を図っていく必要がある。

5 今後の展望

研究の実際(仮説3)でも述べてきたように、各教科において様々な形での研究授業や検証授業を行ってきた。課題であった、特別支援学級でのICT活用についても取り組むことができた。数多くの教育委員会や学校、報道機関等から視察や取材を受けることで、教職員はやりがいを感じ、生徒たちは自信と誇りを持つことにつながっている。私たちが改めて感じていることは、ICTは道具だということである。授業におけるICT活用に関する研究に組みれば取り組むほど、教材研究の大切さや単元（本時）の目標の設定の仕方、発問や指示、板書等教育指導の不易の部分の重要性を感じる。また、道具であるからこそICT活用は限りない可能性を秘めていることも事実である。

今後、今回の研究の成果と課題を踏まえ教育の不易の部分を一層確かなものにししながら、21世紀にふさわしいICT環境を活かし、引き続き確かな学力を身につけた生徒の育成をめざしていかなければならない。

コンサマトリー性の動機づけに着目した授業の実践（高等学校物理）

～楽しさから物理を学び、それから本質的な物理の楽しさへ～

秋田県立秋田高等学校

教諭 伊藤 匡

1 はじめに ～物理を学ぶ生徒の実態から～

「物理は難しくてわかりにくい」という生徒の声をよく耳にする。これは、物理を学ぶ生徒の共通の悩みでもあり、物理を教える教師の悩みでもある。物理は系統的な学問であり、前の単元の学習事項の上に次の事柄が積み重ねられるという特徴が主たる原因である。さらに、高等学校で学ぶ物理の内容は膨大な量となり、単元が進むにつれて「物理は難しい」と感じる生徒は自然と増えていくのである。

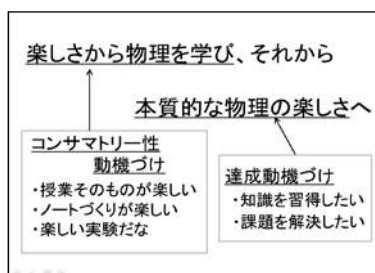
2 主題設定の理由 ～楽しさから物理を学び、それから本質的な物理の楽しさへ～

学習指導においては、単元ごとの達成目標に基づく達成動機づけが重要となることは言うまでもないが、上記のような生徒の実態を踏まえれば、高等学校物理の学習指導では「授業が楽しい」「何だか楽しそうな実験だな」といった、学習のプロセスそのものが目標となる動機づけ（「コンサマトリー性の動機づけ」という）を継続して生徒に与えていくことも重要であると考えられる。

例えば、「電磁気学がよくわからないので、どうにか理解したいが、物理の授業や実験は楽しくて好きだ」という生徒の感想を聞くことがある。「電磁気学を理解しようと思う」ことは、生徒が電磁気学を習得することが目標となり、「物理の授業や実験は楽しくて好きだ」とは、授業を受けるという学習活動のプロセスそのものが目標となる。後者のように、自分の興味があることを完成させようとする意志をコンサマトリー（consummately）といい、活動そのものが楽しいと思うことを「コンサマトリー性の動機づけ」という。

このように、「～が知りたい」、「～がおもしろい」という性質の異なる動機づけを

生徒に持たせ、それらをリンクできるような物理の授業を目指すことは、生徒の関



心、意欲、態度を育成し、自発的な学習活動に深化させていく上で大切である。そして、何よりも、物理を教える教師として、一人でも多くの生徒に「物理を学ぶ喜び」を持たせたいという強い思いから主題を設定した。

3 研究の仮説

「授業が楽しい」と感じるコンサマトリー性の動機づけは、教材によってのみ喚起されるというものではない。授業中の教室全体の雰囲気や教師と生徒の笑顔も動機づけの原因になり得る。

教材は、生徒を単元目標に到達させるための媒介物といえるが、コンサマトリー性の動機づけを引き出す教材は実験装置やプリントに限らない。知的遊び心や授業の演出技術までもが教材となると言ってよい。

コンサマトリー性の動機づけ教材の要素

遊び心 身近な感覚で知的好奇心をひくもの、知的遊び心を含むもの。

演出 授業にサイエンスショーの楽しさを。発問→予想（話し合い）→評価の場面も楽しさに。

継続性 次は何だ、という期待感を抱かせるもの。

研究の仮説

「物理は難しい」という生徒に対し、学習活動そのものが楽しいと感じさせる教材開発を行い、それを積極的に活用した授業を展開すれば、生徒の学習意欲や能力の向上が見られるであろう。

4 研究の構想

本研究は、筆者の担当する授業科目「物理基礎」（1学年）「物理」（2・3学年）を対象とした。

研究の構想（1～3学年対象。4月から1年間継続）

- (1) 教材開発
- (2) 授業の展開
- (3) 評価（生徒授業アンケート分析）

仮説に示した「学習意欲や能力の向上」を客観的に

評価するために、授業アンケート（年2回実施）の集計結果を分析する。また、本研究主題は初任者研修時から、約20年間、継続して取り組んできたものであり、これまでの実践を整理するとともに、現在の教材や授業展開が生徒にとって適切なものになっているか、検討したい（2008年度と2014年度の授業アンケートを比較する）。

5 研究の実際

年度	教材・授業の実践	ねらい（ <u>コンサマリ</u> <u>リニ性</u> の観点から）
1995～2014	授業のマスコットをつくる。【①】	教師への期待感を持たせる。
1995～2014	自作の漫画を授業で活用する。【②】	単元に興味・関心を持たせる。
1999～2014	授業のホームページを開設する。【③】（授業アンケート）	教師への期待感を持たせる。教材の整理。
→(2008)		
2009～2014	「短冊型プリント」を使った生徒の授業ノートの指導を始める。【④】	「板書⇔ノート」というコミュニケーションの場として活用する。
2009～2014	「おもしろ川柳による物理」【⑤】	創造力・思考力の育成。
2012～2014	授業にサイエンスショーの楽しさを。【⑥】（授業アンケート）	単元に興味・関心を持たせる。教師への期待感。
→(2014)		

【実践①】授業のマスコットづくり（1995年度～現在）

授業のマスコットキャラクターを登場させ、授業そのものを親しみやすくした。

生徒の反応

- ・マスコットキャラクターの名前が筆者のニックネーム（物理のブッチャン）となるほど生徒に浸透した。
- ・授業に対する期待が高まった。「なにかやってくれそうな先生だ。」

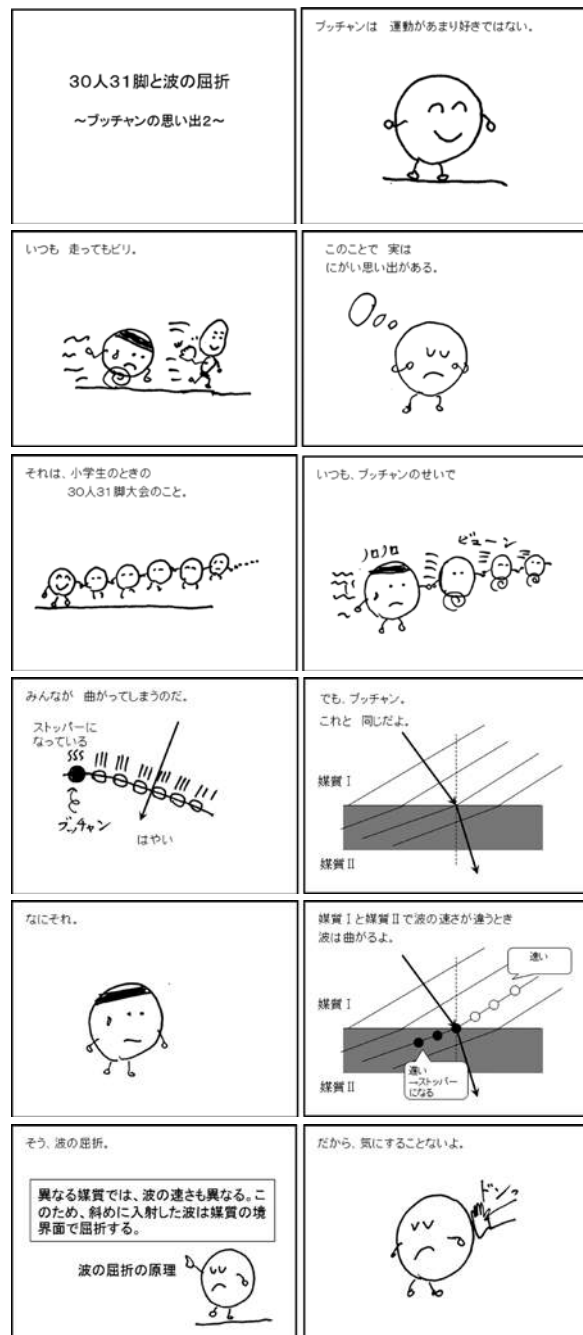


図1 物理のブッチャン

【実践②】自作の漫画を取り入れる（1995年度～現在）

単元の導入として、漫画を教材化した。提示の仕方は授業展開により、スクリーン投影とプリント配付を使い分けた。

*** 物理I 波の屈折 漫画 [30人31脚] より *****



（その他に）「ブッチャン、ファラデー先生へ会いに行く（電磁誘導）」「ブッチャンの公園（力学的エネルギー）」「ニュートンのエプバック（運動の法則）」「ジュール熱は恋の味？（電流と熱）」など



写真1 漫画を導入で活用

生徒の反応

- ・教室の雰囲気が明るくなり、笑顔であふれた。
- ・導入時に提示するため、単元の到達目標をより明確に理解させることができた。

・「次は、どんな漫画を作ってくれるのかな」

【実践③】ホームページ開設 (1995 年度～現在)

生徒向けに授業のホームページを開設した。主なコンテンツはマスコットキャラクターに関するもの(誕生秘話など)、授業で用いた漫画、動画クイズなど。教材の整理の場になった。



図2 ホームページ開設 「物理のブッチャンの物理教室」

生徒の反応

・年々、アクセス数が増加し、現在まで延べ6万人が閲覧した。

- ・物理に関するクイズなどもあり、内容について質問してくる生徒がいた。
- ・教師への期待感、授業への期待感が高まった。
- ・「ブッチャンっておもしろそう」

【実践④】「短冊型」プリントによる授業ノートの指導 (2009 年度～現在)

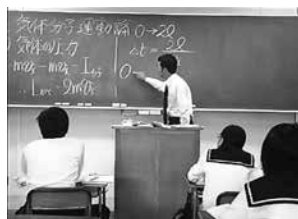
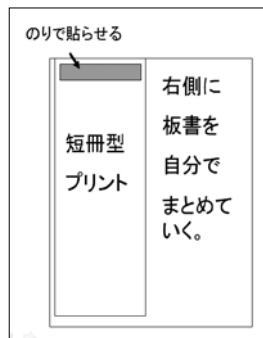
過去の授業アンケートから、ノートをとるのが大変だという指摘があり、これを受けて板書計画の見直しと生徒のノート指導について改善を試みた。

生徒の授業ノートの現状

- ・板書を写すだけのノートとなっている。
- ・授業ノートは、ほとんど活用されていない。
- ・1時間あたりの授業ノートは2～3ページ程となり、ノート作成に時間がかかっている。

ノート指導の改善点 (短冊型プリントを教材に)

- ・生徒がノート作成に費やす時間を短くしたい。
- ・板書を写すのではなく、必要な情報を自分の表現でまとめさせる工夫をする。
(板書に文章は用いずに数式のみで展開する。短冊型プリントで情報量を増やす「本日のテーマ」として単元目標を明確に示す)。
- ・「知的遊び心」を付加。ノート作成そのものを楽しませる。



↑ 写真3 文章のない板書

← 図3 短冊型プリント

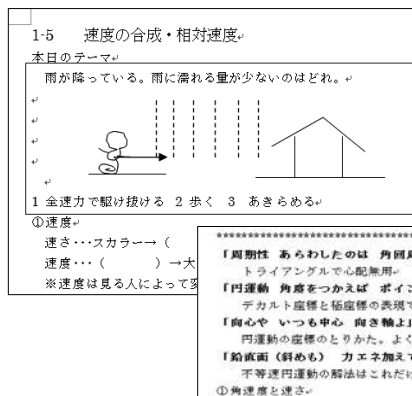


右半分には板書の内容をまとめていく。

写真4 生徒の短冊ノート

【実践⑤】おもしろ川柳で解く物理 (2009 年度～現在)

「短冊型プリント」には、「おもしろ川柳」を載せてある。これは問題解決の指針をアドバイスするものである。また、単元の目標を明確にするためのクイズも載せた(授業の導入で、発問→予想(話し合い)→集計→評価のサイクルが定着した)。



← 図4 「本日のテーマ」 予想させる

↓ 図5 おもしろ川柳

生徒の反応

- ・全員がノートをとるようになった(コンサマトリー性動機づけの効果が顕著である)。
- ・ノート作成の時間が短くなり、その分、演示実験や演習などに時間が使えるようになった。
- ・模擬試験などの前に、授業ノートを活用する生徒が増えた。
- ・「早く、次の『短冊』が見たいな」

【実践⑥】授業にサイエンスショーの楽しさを

(2012 年度～現在)

物理の授業では、教室で演示実験を行うことが多いが、実験そのものにも「参加することの楽しさ」を生徒に感じさせる教材開発を行った。

演示実験を生徒の目線で誇大に演出

- ・授業にサイエンスショーの楽しさを。
- ・実験のネーミングそのものにも楽しさを加味する。(「摩擦グランプリ(摩擦角の測定)」、「無重量実験ツアーによるこそ! (万有引力)」など)
- ・参加型の実験にこだわる。
- ・実験前に必ず結果を話し合わせ、予想させる。

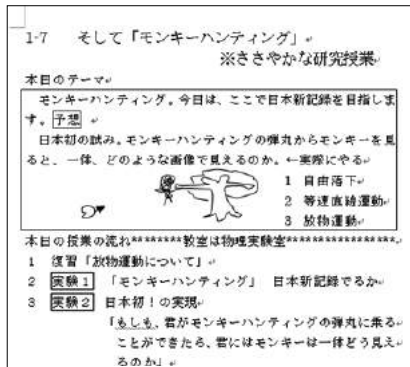


図6「日本一大きなモンキーハンティング」の実験 (短冊型プリント)

2年生・物理
「平面運動」
教室全体を使った「巨大空中衝突実験装置」を製作した。

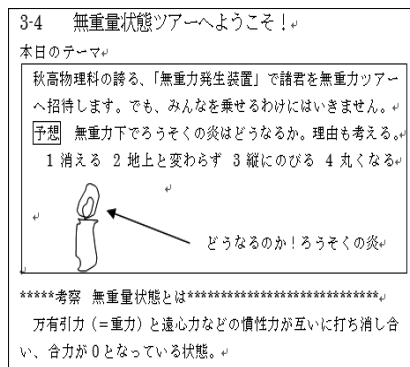


図7 無重量状態ツアーによるこそ！ (短冊型プリント)

2年生・物理
「万有引力」
ネーミングにもこだわる。必ず、予想→話し合い→評価を。



← 写真5
摩擦グランプリ
(1年・摩擦角)

写真6 →
日本一大きな
モンキーハン
ティングの実験



生徒の反応

- ・実験装置を取り囲んで、生徒全員が参加するスタイルが定着した。
- ・教師と生徒のコミュニケーションが活発になった。(生徒間で予想→話し合い→観察→評価ができる)
- ・「もう一度、こないだの実験をやってみたいな」

6 評価とまとめ

以上のように、これまでコンサマトリー性の動機づけを喚起する教材開発に継続的に取り組んできた。これを活用した授業を展開することによって、生徒の学習意欲や能力の向上が見られたのだろうか。

本校では7月と12月に授業アンケートを実施している。生徒による授業評価は、生徒が自分自身の学習

活動を自己分析した上で行われるものと考えられる。したがって、生徒の「学習意欲や能力の向上」を評価する手段として、授業アンケートは有効であると考えた。授業アンケートの2008年(7月)と2014年度(7月)の結果を比較することで、長期間取り組んできた本研究の仮説に対する検証を行いたい。

授業アンケート・評価項目

- 1 説明・板書は工夫されているか。
- 2 授業内容は充実したものか。
- 3 授業の進度は適切か。
- 4 学力、興味・関心は身についたか。
- 5 教師と生徒のコミュニケーションはあるか。

評価方法 5段階

各項目に対して「あてはまる」「ややあてはまる」を選んだ生徒の割合(1年～3年・担当クラスの平均値)を比較する。※2008年度は旧課程科目

項目	2008年度(%)	2014年度(%)	増減(%)
1 説明・板書の工夫	74.2	97.5	23.3
2 授業の充実度	82.1	99.5	17.4
3 授業の進捗	88.3	96.5	8.2
4 学力	75.7	94.3	18.6
5 コミュニケーション	74.3	95.5	21.2

結果

2008年度授業アンケートとの比較では、2014年度で5段階評価のうち「あてはまる」「ややあてはまる」を選んだ生徒の割合は、全ての項目で8.2%～23.3%の範囲で増加した。

- ・「説明・板書の工夫」「授業の充実度」「学力・関心」
→ 一連の教材による動機づけの効果が十分見られる。授業が充実していると感じている生徒が多いことを示している。
- ・「進捗」→ 特に「短冊型プリント」によるノート指導の効果を示すものと思われる。
- ・「コミュニケーション」→ 「予想→話し合い→評価」のスタイルが定着したことによる。

生徒の自由記述

「授業をわかりやすくするためにいろいろな装置を作ってきてくれて、楽しいしわかりやすいし、頑張ってくださいのありがとうございます。」(3年生)

今後の課題

- ・コンサマトリー性の動機づけと達成動機づけを相互にリンクさせること。そのための教材開発、指導の技術、生徒観察方法の研究を継続する。
- ・授業内での生徒の自己評価の方法とその評価について研究し、動機づけや生徒の学習活動に生かす。

料理に込められた想いに気づこう

～心をむすぶ「おむすび」作り～

兵庫県芦屋市立打出浜小学校

教諭 辻 晴美

1. はじめに

この年、5年生を担当することになった。学年で話し合い、教科担当制をとることになり、私が家庭科を担当することとなった。5年生の子どもたちは家庭科という教科に初めて出会う。そんな子どもたちを目の前にして、身が引き締まる思いがしたと同時に、家庭科の学習を通して、子どもたちにどのような「生きる力」をつけることが必要なのかということを探り続けた1年だった。ある研究会に参加した際に、「裁縫セットを購入する必要があるのか？」という話題があがった。その議論の中で、裁縫セットは一生使うことができる大切なものであり、必要であるという話が強く心に残った。裁縫セットと同様に、小学校で身につける家庭科の力も子どもたちの将来を左右する、「生きる力」となる一生ものだと感じている。

本校は、20年前に阪神・淡路大震災の被害を受け、尊い児童の命を失った。そして、震災の教訓を語り継ぐ取り組みを行っている。震災の体験は、私たちの生き方、人間としての在り方を問い続けている。子どもたちを取り巻く現状は厳しく、家族の規模の縮小、家族や地域の人間関係の希薄化により、子どもたちの人間関係をつくる力の低下があげられている。本校においても、生活力の低下、生活習慣の乱れなど「生きる力」の育成が大きな課題である。今回、家庭科の学習の中で、自分自身の生活をみつめ、自分の生活をよりよくする力を育てたいと感じている。

2. 主題設定の理由

家庭科の時間の中で、子どもたちは「食べること」についての学習に関心が高く、「食」に関する授業をいつも心待ちにしている。本単元以前に行った調理実習の際には、事前学習から意欲的に取り組んでいた。これまでに「白玉だんご」「ゆで野菜サラダ」を作る学習を行い、食べることの楽しさや、自分で作ったものを食べることへの喜びを味わってきた。しかし残念なことに、子どもたちの半数はほとんど家で調理をしない傾向にあった。そして日々、完食をめざして給食を食べてはいるが、最終的には義務的に食べてい

る子どもたちが多かった。家庭でも学校でも何も意識することなく、時間になると食事が準備されるという日々を過ごしている子どもたちは、何気なく食べ物を口にしているようだった。しかし、子どもたちの口に食べ物が届けられるまでには時間がかけられ、作り手の思いが込められている。そのような、食事を作ってくれている人の思いを感じ取ることがなかなかできていないことが残念に思っていた。また、「何のために学校に来て学習をするのか。」と疑問に思い、質問をしてくる子がいる。多かれ少なかれ、そのような疑問を抱いている子は多いだろう。それは、学習した内容が日々の生活にすぐに活かすことができないから思うのだと思う。しかし、家庭科は特に学びが実感できる科目であり、今日学んだことが、今日すぐに生活に役立ち、将来に活かされる科目である。それを体験することで、学校で学んでよかったという達成感と満足感を実感することができる。そこで、子どもたちの日々の食生活にどう活かそうかと考えたときに、家にある材料で簡単に調理ができて、栄養バランスも良いものが作れるという点で「おにぎり作り」に取り組むことにした。さらに、家族を思いやる優しさや気持ちを育むために、家族へのメッセージを込めることとした。

3. 授業実践

(1) なぜ食べるのか考えよう～栄養素の働き～

栄養素の働きを子どもたちはあまり知らない。そして、給食や毎日の家庭での食事にも栄養素について考えられて調理されているということも知らない子どもたちが多いことを日々の会話からも知ることができた。また、いつも食べている給食の献立表に栄養素のことが記入されていることを知っている子どもは、学年では非常に少なかった。何かマークがついていて、分類分けされていることは知っていても、マークの意味や、マークについて関心がなかったようである。授業で五大栄養素（炭水化物・脂質・たんぱく質・無機質・ビタミン）を学習して、はじめて給食の献立表の意味を知り、栄養バランスのことを考えられているのを知った状況だった。栄養素の学習後に、子どもたち

は「大豆の炒め物があるから、今日のお汁には豆腐が入っていないのか〜。」などと感心するなど、給食の献立に対して好きな物や嫌いな物があるといった観点以外のことで興味を持ち始めてきた。

(2) 作り手の思いを伝える

～栄養教諭の先生とともに食を考える授業～

芦屋市は、各学校に栄養教諭が1人ずつ配置されている。栄養教諭は、栄養管理や季節に合わせて給食の献立を考えることに加えて、それぞれの学校行事に合わせて行事食を調理したり、学習内容に合わせて献立を考えている。例えば、国語の教科書で子どもたちが普段食べないような料理が登場すれば、それをメニューに加える、生活科で栽培した野菜を給食で調理する、運動会の練習があるシーズンには、暑く疲れていても食べやすい物など、いろいろなこととつながっていくきっかけとなることをめざして献立を考えている。子どもたちは、そのような給食があたりまえで、特別なことであるとは捉えてはいなかった。そこで、いつもどのような思いで給食を作っているのかということ子どもたちに話していただいた。そしてさらにもう一度、栄養教諭に、栄養素について話をしていただき、その日の給食の材料を3つ（エネルギーになる黄色の食品群・体を作る赤の食品群・体の調子を整える緑の食品群）に分類する学習を共に行うこととした。



その日の給食時には特に、栄養バランスの話がこの班でもよく挙がっていて、自分たちのことを考えて作ってくれていることが実感できたからなのか、苦手な物も頑張って食べている様子が見られた。作り手の立場からの思いを子どもたちに理解してもらえたようだった。

(3) 思いを込めたおにぎり作り

～作ってみよう♪家族が喜ぶspecial おにぎり♪～

5年生の食に関する単元は、「毎日の食事をみつめよう」「ごはん味噌汁を作ろう」「食べることの大切さを知ろう」の3つの小教材で構成されている。この後

に発展的な学習として「作ってみよう♪家族が喜ぶspecial おにぎり♪」という小単元を計画した。子どもたちが「やってみたい!!」と興味ができるように考えて単元名をつけた。「食べることの大切さを知ろう」で栄養教諭の先生から聞いた思いを知ったうえで、大切な家族のために食材や調理方法を工夫しておにぎりの具を作ることができる力を身につけられるようにした。そこで、「おにぎり作りを通して日頃の気持ちを家族に伝える」ということを「めあて」にした。手順としては、

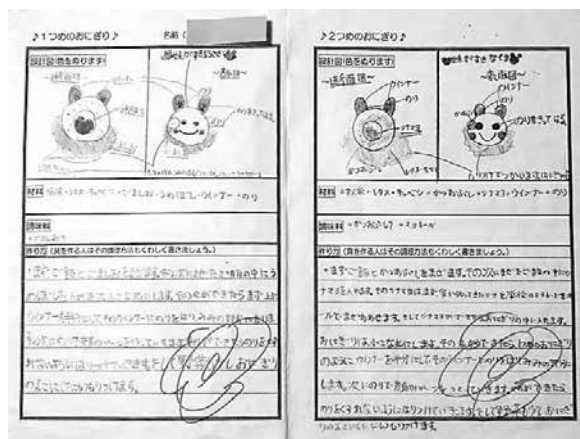
- ①家族の誰の為に おにぎりをつくるのかを決める。
- ②自分が作ると決めた家族の人の好み(好きな味付け・好きな食べ物・好きな料理)をリサーチする。
- ③どのような思いを込めて作るのか。
- ④何を具にするのか、どのような味付けにするのかを決める。

⑤気持ちが伝わるように盛り付けを考える。

とした。さらに、おにぎりを作る上で必ず守ることとして、「作る家族の好みに合わせること」「おにぎりは2つ作ること。そして、2つを食べると3つ（エネルギーになる・体をつくる・体の調子を整える）の栄養素を摂取できるようにすること」「作り手の思いを込める（おもてなし・感謝の心など）」「具は必ず何か調理すること」という4つのことを提示した。

(4) 思いをあらわそう～設計図作り～

自分が思い描いたおにぎりを、①おにぎりの断面図、表面から見た図②材料、調味料③作り方④盛り付け図⑤盛り付けの際に必要な物、をワークシートに書いて作業を取り入れた。



今までの調理実習では、みんなで同じものを調理していたが、この実習で初めて全員が違うものを調理することになったので、味付けに必要な調味料や、それぞれの具材の分量などを緊張した面持ちで調べたり考えたりしていた。1人ひとりが違うものを作るというこ

とで、いつもに増してやる気もアップしていた。

(5) よりよい「おにぎり」をめざして

～班で考えたおにぎりにアドバイスをしよう～

実際に具を調理しておにぎりをにぎる前に、自分達で考えたおにぎり、具、盛り付け方法などを班で紹介しあい、さらによりよいおにぎりになるように気付いたことをアドバイスしあった。そして、班で出たアドバイスや、班で一押しのおにぎりをクラスで発表をした。



また、栄養教諭や私自身が各班をまわって、アドバイスをを行った。子どもたちから挙がったアドバイスにはこのようなものがあった。

- 小さな妹や弟への「おにぎり」なのだから、間違えて飲み込まないように、食べやすいように、梅干の種は入れない方がよい。
- おにぎりの周りをレタスで巻くのは、ぱりぱりして巻きにくいので、一度茹でて水気をふき取ったものを巻くと巻きやすいのではないかな。
- 味が薄そうだから、味がもっとつきやすいように中に入れるカラアゲをこまかく刻んで、マヨネーズで和えるとよい。
- 少し盛り付けがさみしいので、手紙を添えるとよい。
- プリとガリだけのおにぎりでは少し物足りない感じがするので、大葉を加えてみてはどうか。

友だちの考えたおにぎりのよさや工夫を知り、新たな気付きや改良がたくさんあった。

(6) おにぎりって簡単ににぎれるの??

～プロからコツを教わろう～

子どもたちは、家で手作りのおにぎりをあまり食べる機会はなく、おにぎりと言えばコンビニの袋に包まれたおにぎりを食べることの方が多い。家庭でのおにぎりでも、おにぎり型を使ったり、ラップを使ってにぎったりした物が多く、手に塩と水をつけて直接にぎるおにぎりは、ましてやほとんど口にしたことがない

と言っていた。そこで、栄養教諭の先生にお願いをして、子どもたちの目の前で、おにぎりをにぎっていただいた。



子どもたちは大興奮で、先生の手元に見入ってしまっていた。クラス全員が、先生がにぎった出来立てあつあつのおにぎりをその場でいただいた。子どもたちの感想は次のようなものだった。

- 手早く握っていたのに、硬すぎず、柔らかすぎず、ちょうど良い硬さで美味しかった。
- 気持ちが込められていると思った。
- 食べてみると、とてもふわふわで口の中でこわれそうな感じでとても美味しかった。
- 今まででは、おにぎりなんて簡単な食べ物だと思っていたけれど、気持ちを込めて握っているのを見て、とても簡単にはできない食べ物だと思いました。
- 先生を見ていて、「気持ちを込めてにぎる」ということが心に残った。
- つぶれないけど、ほぐれそうな感じで、塩をご飯のバランスが最高!!
- 一回一回、コロっとまわして三角形を作っていくことに感激。
- 具がなくてもこんなに美味しいなんて驚いた。やっぱり、手でにぎると心がこもって美味しいんだなあ。

目の前でにぎり方を見せていただき、そのおにぎりを食べたことで、ますますおにぎり作りに向けてやる気がアップしていた。後で聞くと、その後、実習日まで家で何度か練習をした子が多かったそうだ。

(7) 思いを形に～おにぎりを作ってみよう～

ラップやおにぎり型を用いてにぎるのではなく、手に塩と水をつけてにぎる方法にチャレンジした。また、ただお皿に並べるだけでなく、見た目大切さを知ってもらうために、思いが伝わるように、見栄えがするように盛り付けた。みんな、自宅から思い思いの食器

を持ってきたり、準備をしてきた装飾を使ったりして盛り付けをおこなっていた。左下の写真は、和食が好きな両親の為に日頃の感謝を込めて作った作品。右下の作品は、サッカーの習いごとに専念できるようにいつもサポートしてくれている両親に感謝の気持ちをつたえるための盛り付けがされている。



中に入れる具がうまく入らずはみ出したり、思った形にならなかつたりした子もいたが、どの子も思いを込めて作品が仕上げられていた。

(8) 気持ちを伝えよう～家庭でもにぎってみよう～

学校では2学期末にこの単元を学習したので、最後の締めくくりとして、大切な家族の為ににぎりを家庭で作るということを冬休みの課題とした。おにぎりは、学校で考えたものでも、さらに改良を加えたものでも良いということを指示した。そして、作ったおにぎりの写真・自分自身のふりかえり・食べた家族の感想などを記入するようなワークシートを配布した。冬休みが明けて、宿題のワークシートを見てみると、次のようなお家の人からの感想があった。

- 作っている時、あれやこれやとアイデアを出して楽しそうに料理していました。食べてもらう人のことを考えながら作っていると伝わってきました。
- おにぎりが、ふわぁ～として、にぎり方もgoodでした。
- 時間がどれくらいかかるとか、具の味付け、ゆで方など完成まですぐにはできないということを少しはわかったようで、良い勉強になっていました。
- この、おにぎり作りをきっかけに、お家でも少し料理を作ってくれるようになりました。良い宿題だと思いました。
- 仕事で疲れて帰ってきたときに、好きな具の、そして栄養バランスの良いおにぎりをこっそり作ってくれていて、感激しました。

4. 実践をふりかえって

子どもたちの最後のふりかえりから、いつも自分は家族の人や、給食を作ってくださっている先生方にとって大切な存在であり、思いを込めて作っていただ

いている、思いがたくさんつまった食事がいつも自分の前に並んでいたんだということ。それから、食べることの喜びではなく、誰かを思って作ることの喜びや幸せが十分に実感できたことが伺えた。また、学校給食の「めあて」として「完食をする」ということがふさわしくないと考える教師や保護者の方も居る。確かに、そうかもしれないが、作り手の気持ちがわかった上で、食べ物を残すことと、知らずに残すことは全く違う。そして、この授業の後は自分のクラスでは、「苦手な物だけど、食べやすいように小さくしてくれているから食べてみよう。」「自分たちのことを考えて献立をたてて、作ってくれているので、もう少しだけおかわりしてみよう。」というような声がたくさん聞かれるようになった。そして、無理なく、嫌々でなく、給食を完食できるようになった。また、この授業の後に保護者の方々と話す中で、「家に1人で居てお腹が減った時に、お菓子を食べるのではなく、冷蔵庫の残り物から具を考えておにぎりをにぎって食べるようになった。」「夕方に習いごとに行く前に、おにぎりを自分で作って食べて行くようになった。」「家族でおにぎりを作ることが増えた。」というような喜びの声を多く聞くことができた。

5. まとめ

昨今の調査で、日本の子どもの自己肯定感が低いという結果が出ている。私たちは人々に支えられて生活をしており、自分自身も「生きる力」を身につけて生活を支える一員として成長していかなければならない。そして、自分が周囲の人にとって大切な存在であるということをより感じたり、自分が誰かを支えることで社会に必要な存在となったりして、自己肯定感を高めてほしい。今回のこの取り組みは、その助けをするための「生きる力」を育むことができたのではないかと感じている。

第20回 日教弘教育賞

教育研究集録 第26集

平成27年3月26日発行

編集・発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp>

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6

TEL 03-3354-4001

FAX 03-3354-4068

印刷 株式会社 篠原印刷所

〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL 054-286-5141
